

【筆名】



海冬レイジ

かいとう・れいじ

トイとかプラモとか大好き！

近頃地味に病弱設定な職業作家。  
横みプラモでダンジョン化する自室に戦慄！  
札幌市在住。1月8日生まれ、A型。

ほかに「も女会の不適切な日常」(ファミ通文庫)など。

【イラストレーター】

るろお

顔が痛いです。

カバーイラスト／るろお 装丁／百足庵ユウコ(ムシカゴグラフィクス)

# 9 機巧少女は傷つかない

Facing "Star Gazer"  
Mechanical Maquette Girl



海冬レイジ  
るろお

機巧少女は傷つかない9

海冬レイジ

MF文庫  
J

580



9784840148207



1920193005806

ISBN978-4-8401-4820-7  
C0193 ¥580E定価：本体580円(税別)  
メディアファクトリー

## 機巧少女は傷つかない9

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術、  
《我欲の聖塔》内での戦いも、いよいよクライマックスを迎えていた。最上階で相対  
するシャルとオルガ——すなわち、シグムント対トール。ぶつかり合う魔剣と魔剣、  
だが、その結末はあまりに無慈悲なものだった。トールの放った閃光により、心臓を  
破壊されてしまうシグムント。「ずっと一緒にいてくれて、ありがと……っ」「さら  
ばだ、シャル」そして、シグムントは最期にひとつの卵を遺して消えた。一方で雷鳥  
は、夜会の帰りにぼろぼろの男性を保護する。〈結社〉に迫られる彼は、シャルとア  
ンリの父親、エドガー元伯爵で……!? シンフォニック学園バトルアクション第9弾!

MF文庫

## J 海冬レイジの本

機巧少女は傷つかない1 Facing "Cannibal Candy"  
[イラスト：るろお]機巧少女は傷つかない2 Facing "Sword Angel"  
[イラスト：るろお]機巧少女は傷つかない3 Facing "Elf Speeder"  
[イラスト：るろお]機巧少女は傷つかない4 Facing "Rosen Kavalier"  
[イラスト：るろお]機巧少女は傷つかない4 Facing "Rosen Kavalier"  
CD(Side-A)付き特装版  
[イラスト：るろお]機巧少女は傷つかない5 Facing "King's Singer"  
[イラスト：るろお]機巧少女は傷つかない6 Facing "Crimson Red"  
[イラスト：るろお]機巧少女は傷つかない7 Facing "Genuine Legends"  
[イラスト：るろお]機巧少女は傷つかない8 Facing "Lady Justice"  
[イラスト：るろお]機巧少女は傷つかない9 Facing "Star Gazer"  
[イラスト：るろお]



9 Facing 'Star Gazer'

機巧少女は傷つかない

マシナリガールズ

mechanical machine-doll

海冬レイウ


NONO

## **contents**

|           |                       |           |
|-----------|-----------------------|-----------|
| Prologue  | 魔の山に棲む竜               | .....p11  |
| Chapter 1 | 魔剣使い                  | .....p22  |
| Chapter 2 | ブリューとともに              | .....p45  |
| Chapter 3 | 災禍の客人 <sup>まじひと</sup> | .....p78  |
| Chapter 4 | 妖精の庭で                 | .....p114 |
| Chapter 5 | 鏡の中の乙女                | .....p147 |
| Chapter 6 | 帰還                    | .....p173 |
| Chapter 7 | 星に祈りを捧ぐ者              | .....p204 |
| Epilogue  | 乙女の胸で眠る竜              | .....p241 |







「あばよ、人間の犬！」  
吐き出された閃光が。  
今度は外部からシクムツトの胸を射抜く。

「ほらな？」  
主を気に入った奴から  
死んでいく」

トールはにたりと笑って、  
もう二度、自分の魔術回路を起動した。

「ありがとうございます……  
人形にすぎぬ私を、雷真殿は女に  
してくださいました……」

「寝ボケてる場合か！  
つか、どういう  
意味だそれ！」

「姉さま……  
うう……」





マシンドール  
**機巧少女は傷つかない9**  
Facing "Star Gazer"

海冬レイジ

MF文庫 

口絵・本文イラスト●るろお

編集●庄司智



# Prologue

魔の山に棲む竜



「とってもいいお話を聞きました。二人の妻を持った者は死刑なんです♡」

爽やかな微笑みを浮かべつつ、夜々が不穏な発言をした。

雷真の背中を冷たい汗がすべり落ちる。

二人がいるのはオルガが築いた塔の中、最上階に向かう階段の途中だ。雷真のとなりに  
は疲労困憊の日輪が、その後ろに満身創痍の品と六連が続く。

夜々は雷真に身をすり寄せ、怖いぐらいの笑顔で言った。

「浮気は甲斐性じゃありません。姦通した者は死刑になるのが世界標準です」

「……中東の方じゃ、四人まで妻を持てるって聞いたぞ？」

「雷真……っ！ やっぱり……やっぱりその気が……っ！」

「早とちりするな！ 何が「やっぱり」だ！」

「ご安心ください雷真さま。お妾さんの一〇人や二〇人、日輪は我慢できます」

「ひとケタ多いぞ！ 俺は性欲の権化か！」

日輪はほんのり頬を染め、恥じらいながら言った。

「赤羽の血は後世に残さなければなりません。も、もちろん日輪も助みますけどっ」

「飛躍するな！ 結婚なんてまだ先の話——」

「あかんわああああ——」

いきなり尻を蹴られ、雷真はつんのめった。

「いつて——な昂—— 何しやる——」

「お嬢ほっぽって、よその嬢さんと子作りやと……!? そんな絶対許さへん——」

「そんなこと、俺はひと言も言つてねえよな!?」

「日輪の愛はお妾さんくらいでは揺るぎません。おわかりですか、夜々さん!?」

日輪が夜々に指を突きつける。夜々は涙ぐみ、悔しそうに肩を震わせた。

「夜々は……納得できません。雷真の愛は一滴漏らさず夜々が受け止めます——」

「生々しいよー イヤな表現すんな——」

「子ども、子どもって、そんなに子どもが大事なんですか!?」

雷真も、日輪も、思わず返事に詰まった。

どんなに人間そっくりでも、夜々は自動人形だ。子をなすことはできないだろう。

重くなりかけた空気を、シャルの不機嫌な声が救った。

「ちよっと貴女たち—— 痴話喧嘩なら後にして——」

わざわざ階段を降りてきて、雷真を怒鳴りつける。

「私はこれから戦いのよ—— 気が散るわ——」





そのシャルの帽子の上で、仔竜こりゅうの姿のシグムントが苦言をつぶやく。

「落ち着け、シャル。オルガは強敵だ。心を乱して勝てる相手ではないぞ」

「わ、わかつてるわよ。ちよつと気に障っただけ」

オルガの名前を聞いて、雷真らいしんは無意識に足を止めた。

「オルガ……か。あいつは何のために魔王マウスファンの座を欲してるんだろうな」

「理由なんていくらでもあるじゃない。貴方あなたは興味ないかもしれないけど、魔王マウスファンの称号は魔術師にとって最高の榮譽なのよ。富も名声も思うがままだわ」

「この学院で学生総代を務めたつてのは、もう十分な榮譽だと思うぜ」

「それは、まあ……そうかもしれないけど」

「あいつは度を越してる。日輪ひぐるを陥れた連中とオルガはつながってる……はずだろ？」

つい先ほどまで、雷真たちは得体の知れない敵——《結社》と戦っていた。

エドマンドとゼカルロス兄弟はオルガとチームを組んでいた。ならば、オルガもまた、例の《結社》とやらにからんでいるのではないか？

日輪が死にかけても、オルガは怖おそじもせず、動うごじもせず、淡々としていた。もしオルガが《結社》と無関係だとしても、その計略を利用するくらいには冷酷だ。

ただの学生とは思えない、勝利への執着心が度を越している。

夜々よやが不安げに見上げてくる。雷真も嫌な予感を覚え、シャルに念を押した。

「オルガには気をつけてくれ。何が起こるかわからない」

「言われるまでもないわ。……でも、ありがと」

珍しく素直に礼を言う。赤らんだ頬がやけに可憐だった。

やがて、一同は塔の最上階に到達した。

既にロキとフレイが待っていて、シャルに気遣うような視線を投げて寄越す。

シャルは胸を張り、部屋中央へ進み出た。

フロアの真ん中で学生総代オルガが待っている。肩の上には赤い仔竜——シグムントの同型機ツールがとまっていた。

「いよいよ大詰めだな」

オルガは麗しく微笑み、シャルに語りかけた。

「君が勝てば、ライシン一派は勝ち進み、私とその仲間参加資格を失う」

「よく言うわ。負ける気なんてないくせに」

「それはお互いさまだろう？」

魔力が肩から立ちのぼり、オルガの金髪が逆立った。

オルガの魔力に反応し、何やら妖しい気配があたりに満ちる。

シグムントが目を見はり、いつにも増して厳しく言った。

「シャルよ、心してかかれ。気を抜けば、一瞬で敗北するぞ」

「言われるまでもないわ。私は魔王ワイルドマンになって、プリュー家を再興するんだから！」

それがシャルの戦う理由。魔王を目指す理由だ。

プリュー家は皇太子に重傷を負わせ、英国中の嫌われ者となった。その汚名を雪すすぎ、再び名誉を取り戻すために、これは負けられない戦い。

オルガの肩の上で、トールが皮肉っぽく笑った。

「よう、兄弟。結局はこうなっちまったな？」

「白々しいぞ、トール。初めからそのつもりだったのだろうか？」

トールは「けけけ」と笑っただけだった。

雷真ライマの胸に暗雲が垂れ込めた。今までにない不安を感じる。

可能なら、戦いを止めたいとさえ思う。だが、シャルが試合を放棄すれば、雷真たちは全員が夜会の参加資格を失う。そういう約束なのだ。

（今は信じるしかない。シャルとシグムントを）

祈るような気持ちでシャルを見守る。

やがて両者が同時に動き、魔剣と魔剣の戦いが始まった。

時代はさかのぼり、今から一二〇年ほど昔のこと――

産業革命の恩恵は、地方の山村にも届いていた。加工食品が食卓に並ぶようになり、村

人たちの衣類も量産された毛織物で、羊の飼育は今や村の主幹産業だ。

そんな村に今、時代にそぐわない危機が訪れていた。

「竜だー 人喰い竜が出たぞー」

ばさりと大きな羽音を立てて、巨大な影が舞い降りる。

巨大な体躯は象の倍ほどもある。間近で見れば、そのさらに倍ほどにも感じた。

鋼はがねのようなろこを持つドラゴン——（魔の山の暴竜）だ。

着地と同時に、鉤爪かぎづめで乳牛を倒す。圧倒的な迫力に、村人たちはそろって引っくり返った。

鎧よろいや猟銃りやうじゆを放り出し、我先に逃げようとする。この竜が吐き出す破壊の光は、幾度となく納屋を消し飛ばし、岩山を融解させているのだ。

そのとき、一陣の風を引き連れて、一人の若者が竜の前に立った。

純白のマントをなびかせ、細身の剣を竜に突きつける。

村人たちは唖然おげんとした。剣一本で立ち向かうなど、正気の沙汰さたではない。

だが、意外にも竜は交戦を避け、大地を蹴けって飛ばした。

突風が村人をなぎ倒し、砂塵さちんが巻き上がる。竜は巨体に見合わぬ敏捷性びんしやうていを発揮して、牛をつかんだまま、軽々と山へ飛んで行った。

「ああ……俺おれの牛が……っ」

「自分が無事だっただけマシだろー 嫁さんも無事だー」

「いや、どうやら無事じゃねえぞ。あの若者に惚れちまつたんじゃねえか？」

仲間たちが軽口を叩き、牛の持ち主を慰める。彼らの視線の先では、例の若者が剣を収め、男の妻に手を差し伸べたところだった。

その姿を見て、皆が「あっ」となる。

凛々しい若者に見えた者は、うら若い女性だった。

輝くばかりの金髪碧眼。肌は新雪のようになめらかで、妖精のような美貌だ。

よほど急いでいたのか、上着は羽織っただけで、白いコルセットが丸見え。寄せて上げた谷間もあらわで、何とも目のやり場に困る。

女剣士の手を取りながら、婦人がたずねた。

「あの、あなたさまは……？」

「名乗るほどの者ではない。私は放浪の騎士だよ」

騎士章を引っ張り出して掲げる。リボンが擦り切れてボロボロだが、一応は本物らしく見えた。ただし、本物の騎士章を村人たちは見たことがない。

そもそも、この時代に放浪の騎士など、時代遅れもいいところだ。

皆の困惑などおかまいなしで、自称騎士は話を続ける。

「（暴竜）の噂を聞いて、ふもとの街に宿を取ったんだけど——起き抜けにもの凄い咆哮が轟くじゃないか。それで、とるものもとりのあえず駆けつけた」

「ふもとの街だつて？ 徒歩なら二時間はかかるぞ！」

幾重にも折り返す山道だ。健脚な者でも、登ってくるのに二時間はかかる。直線距離を飛んできたと言うのなら話は別だが。

荒唐無稽すぎて、かえって信憑性が増す。話の通りなら、乱れた服装もうなずける。人垣を割って、屈強な体軀の男——村のまとめ役が顔を見せた。

「魔術師さまとお見受けするが、人形はどこだね？」

「自動人形は連れていない。私は精霊使いだからね」

村人たちがざわめく。機巧魔術全盛の今、精霊使いとは……。

「（暴竜）の噂を聞いて、わざわざ真偽を確かめにきなすったのかい？」

「確かめにきたんじゃない。討伐にきたんだ」

「やめとけ——」「無茶だ——」「死んじまうぞ——」

人の好い村人たちは、うさんくさい魔術師の身を氣遣って、口々に叫んだ。

「こんな村だ。おまえさんが竜を退治しても、何の御礼もできねえぞ？」

「礼など無用。困っている者を助けるのは騎士の務めさ」

天真爛漫な笑みを浮かべ、氣負ったふうもなく言つてのける。

まるで丘を吹き抜ける春風のような、爽やかな笑顔だ。誰もが見とれる中、まとめ役の男はなだめるように言つた。

「まあ、聞きな。この山はかつて、ドレイクさまが治めていらした。だが今は、あの凶暴な竜と、リザードマンが棲んでいる」

「竜と爬虫人？ それはその、いささか時代錯誤じゃないか？」

「あんたが言うな。馬鹿げた話と思うだろうが、本当だ。二本足で歩く、うろこびつりの爬虫類だよ。頭はトカゲ……いやワニに似ているか」

「ふうん……見てきたように言うんだね」

「見たんだよ。二〇年も前の話さ。ドレイクさまの館で俺は見た。ちっちゃな竜の赤ん坊が、ワニ男のまわりに群がってるのをな。五、六匹はいたと思うぜ」

「竜の赤ん坊？」

「ああ。さっきの〈暴竜〉はワニ男のしもべってわけさ。十中八九、ワニ男は魔術師だ。それも、あんな竜を操るほどの、おっかねえ野郎だよ」

「なるほど……いや、安心してくれ。そのワニ男とやらの正体も私が突き止める。そして悪しき者ならば、きちんと法の裁きを受けさせるからね」

凛々しく宣言し、山に向き直ったところで――

ぐぎゅるー、と騎士の腹が鳴った。

端正な横顔が見る見る赤くなる。

村娘が苦笑しながら、パンと干し肉の包みを騎士に差し出した。

「騎士さま、どうぞお弁当を。ダンナのもので恐縮ですが」

「か、かたじけない」

恐縮しつつ受け取る。服装は乱れているし、実にしまらない出征だ。

騎士は早速パンにかじりつきながら、ひよいひよいと山道を登って行った。

騎士を見送ると、村人たちは軽口を言い合った。

「つかみどころのない人だな」

「ひょっとして、少々おつむが弱いんじゃないか？」

「そんな感じだな。美人なんだけとなあ、もったいねえ！」

この女騎士が、のちにこの丘陵地一帯——自分たちの村をも治めることになるうとは、村人たちには想像もできない。

時代遅れの自由騎士にして、絶滅危惧種ぜつめつきぐしゆの精霊使いじん・マスタ。

彼女の名は、エレイン・ブリューと言った。





## Chapter 1 魔剣使い



### 1

雷真と仲間たちが見守る中、シャルの戦いが始まった。

「本気でいくわよ。ラスターカノン！」

シャルの魔力を受け、シグムントが口から強烈な光を放つ。

雷真はひやりとした。あの出力では、壁に穴があくのでは？

だが、光は一五メートルを過ぎたあたりで急速に減衰し、壁の表面を舐め溶かすにとどまった。シャルはきちんと射程を制御している。

光はオルガとトールをのみ込んだが、ダメージを与えることはできなかった。

オルガは涼しい顔で立っている。その正面で、空気が水面のように光っていた。

（光の粒子……ラスターカノンを受け止めた？）

ラスターシエルとかいう魔術だ。ラスターカノンを受け止めることもできるらしい。オルガはすぐさま反撃に転じる。

「ラスターシエル——（ファランクス）——」

光の（甲殻）<sup>（シールド）</sup>がザクロのように弾けた。爆散する光の粒を、夜々<sup>（ヤヤ）</sup>が身を盾にし、日輪<sup>（ヒル）</sup>が式神を召還し、ロキのケルビムが火炎を噴いて防御する。

「ラスターカノン——」

シャルは光の大砲で対抗した。光と光が衝突した瞬間、凄まじい爆発が起こった。

シャルは衝撃で弾き飛ばされ、壁に叩きつけられてしまう。

シグムントが珍しくあわてて、シャルの元に飛んでいった。

「シャル、無事か？」

「平気よ……このくらい……」

「オルガには返し技がある。不用意なラスターカノンは危険だ」

「わかってる。甲殻をどう崩すか……ね」

シグムントを腕にとまらせ、シャルがオルガをにらむ。オルガは笑って、

「闘志はまだまだ十分か。だが、この護りをどう破る？」

トールの全身から大量の光が噴き出し、蛍のように飛び交った。

またしてもラスターシエルだ。雷真は焦りを覚え、誰にもなく言った。

「結局、あれは何なんだ？ どうやって、あんなことを」

「う……たぶん、だけど」

フレイが空中に目を凝らし、緊張した声で答える。

「精霊術、だと思う。風の精霊や光の精霊が、手を貸してるみたい」

「精霊……だって？」

「フレイさまのおっしゃる通りです。意志を持つ存在が光を保持しています」

日輪も同意する。二人には精霊が視えているらしい。

「じゃあ、オルガは〈魔剣〉を操りながら、同時に精霊まで操ってるのか？」

複数の自動人形を同時に操ることさえ、普通の魔術師には荷が重い。まして、魔術回路に頼らない、原始的な魔術と組み合わせるなど――

秘術や機巧装置に頼っている様子もない。オルガは実力でそれができるようだ。

「雷真、このままでいいんですか……!?」

夜々が雷真の手を引っ張る。シャルとシグムントの身を案じているらしい。

雷真は歯噛みしつつ、それでも手は出さずに、シャルの戦いを見守った。

ふと、シグムントの表情が、意外なほど穏やかなことに気付く。

窮地にもかかわらず、シグムントは遠い目をして、じっとオルガを見つめていた。

「この支配力……エレインに似ている……」

まばゆい光の中、シグムントのつぶやきが聞こえた。

一二〇年前のその日、シグムントは岩場に潜み、浅い眠りを繰り返していた。

じっとしていると、銅色のうろこは岩肌のように見える。鳥や虫が岩と間違えるくらいには、風景に溶け込んでいる。

体力の消耗を抑えるため、身じろぎもしない。ただひたすら、時間をやり過ごすように一日を過ごす――それがシグムントの生活だった。

不意に何者かの接近を察知して、まぶたを開ける。

斜面の下、ドレイク邸の門のところに、先ほどの女騎士が立っていた。

「おやおや……これは想像以上にすごいね」

門の向こうで背伸びして、邸を眺めている。

「長らく放置されて、ずいぶんくたびれてしまっているけれど……。こんな山中にロココ調の典雅な館とは恐れ入る。ドレイク殿はよほどの趣味人だね」

ひとり言を言いながら、ガンガン門を叩く。

「誰か、いないか！」

返事がないとわかると、騎士は勝手に門扉を開き、前庭に入った。

前庭には豚や牛、鹿や熊など、おびただしい骨の山が積み上げられている。だが、騎士

は警戒する素振りも見せず、とことと跡に近付いてきた。

——それ以上、進ませるわけにはいかない。

シグムントは斜面を蹴り、飛んだ。

猛禽さながらの急降下で騎士を襲う。巨大な鉤爪の一撃を、騎士は身軽にかわした。

シグムントは地響きを立てて地に降り立ち、咆哮をあげて威嚇する。

森が揺れ、鳥が一斉に飛び立つ。さすがの騎士も耳を押さえ、腰をかがめた。

「竜よ、そう吠えずに話し合おう。おまえ、人語を話すんだろう？」

意外な言葉を投げかけられ、面食らってしまう。

少し迷ったが、隠すことでもないと判断し、シグムントは口を開いた。

「……命知らずな人間よ。竜の縄張りに入り込み、あまつさえ会話を試みるか」

「勇気は騎士の美德だよ。だが、入り込んだというのは人間きが悪いぞ。私としてはぜひ、客人として扱って欲しいな」

「愚かな……。その骨の山を見ろ。おまえも喰われないのか？」

「いや、おまえは人を喰わないよ」

「——何だと？ 何を根拠にそう断じる？」

「その山の中には、人間の骨が見当たらないからね」  
にこりとして言う。シグムントは言葉に詰まった。

「ふむ……観察力はあるようだ」

「推理力もあるよ。新しいのは豚や牛、古びた骨は鹿や熊だ。察するに、ここいら一番の獣を獲り尽くし、やむなく家畜に手を出した——そんなところだろう？」

今度こそ、心の底から驚く。そして、素直に感心した。魔竜に偏見を持つこともなく、少ない材料から真実を言い当てた。博物学の知識もある。

一見、阿呆ムロのように見えるが、実は聡明ソウメイな人物だ。

「なぜ人間を喰わないのかと考えて、ピンときたんだ。おまえは見てくれこそ生き物だが、その正体は別のもの——つまり自動人形オートマタだね？」

「……くだらぬ。人形が肉を喰うと言うのか？」

「喰う者もいるさ。珍しい話じゃないよ——禁忌、人形なら」

「……その秘密を知った以上、おまえを帰すわけにはいかぬ」

「本当かい？ よかった、追い返されるかと思ったよ」

目を丸くするシグムントの前で、騎士はさっさとリュックを下ろした。

荒れ放題の庭から枯れ枝を集め、勝手に野営の準備を始める。

「私も手ぶらで帰るわけにはいかないんだ。おまえを何とかすると、村人たちの前で宣言してしまったからね。おまえも私を帰したくないと言うし、ここはひとつ——」

リュックの中から酒瓶サウヴィンを取り出し、楽しげにワインクをする。

「夜を徹して、語り明かそうじゃないか？」

「……馬鹿げている」

「その図体で下戸か？ まあ、無理強いはいしないよ。これは高い酒だからね」

心の底から嬉しそうに栓を抜き、手酌でワインを飲み始める。

シグムントは困惑した。この人間をどう扱っていいのか、まるでわからない。

身ひとつで〈魔の山の暴竜〉を討ちにきて、酒盛りを始めた。優れた知性を持っているかと思えば、何やら噛み合わないことを言う。

「……不愉快だ、人間。おまえの意図がまるで読めない」

「言ったじゃないか。おまえと語り合いたいのさ。教えて欲しいんだ。おまえがなぜ村人たちを苦しめるのか。本当は心優しく、誇り高いおまえがね」

「……何も知らぬくせに」

「おや、違った？ この庭の風や花たちが、そう言ってるんだけどね」

小鳥と戯れるような手つきで、何もない虚空を示す。

屈託のない笑顔が美しく、そして気高く見えた。

つかみどころのない、まるで風のような女性――

急速に惹かれていくのを感じながら、シグムントはたき火の前に腰を下ろした。

エレイン、というシグムントのつぶやきに、シャルではなくオルガが反応した。さっと光の甲殻レインが割れ、中からオルガの顔がのぞく。

「術の本質に気付いたようだな。それはそうだ。彼女は君の主あるじだったのだから」シャルはあわててシグムントを振り向いた。

「どういうこと？ エレインって、私のご先祖さまよね？」

「うむ……君の曾曾曾祖母おやのおやのおやのそばに当たる」

「シャルロットは知らないのか？ 本当に？」

オルガが驚き、少々失望した様子で、冷ややかな目を向けた。

「プリューの名が泣くぞ。私のこれは（魔剣使い）エレインが考案した混成魔術戦闘技法コンボリットタクトイカス——（グラム・バニア）だ」

羞恥しゆうちと屈辱で、シャルは耳まで赤くなった。父や祖母ではなく、他家のオルガに魔剣の扱い方をバカにされるなんて。

「シャル……エドガーは君を戦場に出したくはなかったのだ」

シグムントが慰めてくれる。だが、今となつては父の愛が恨めしい。けけけ、とツールが不愉快な笑い声を出した。



「何だ？ 教えてやらなかったのか、兄弟？」

「シャルはエレインではない。エレインを真似る必要はない」

「つくづくお人好しだな、おまえは！」

光の甲殻が炸裂し、再び光の散弾が飛んできた。

シャルはとつさにラスターカノンでなぎ払う。滅元素と滅元素が衝突し、大爆発を引き起こした。シャルは爆風に吹っ飛ばされ、またも外壁に叩きつけられた。

こふつ、と空気の塊が喉から漏れ、息が詰まる。

「シャル、その対応は得策ではない」

「なら、打つ手がないわー 教えてー エレインさまは貴方をどう使ったのっ？」

「それを知ったところで、今の君では無理だ。せめて、ロッテが……」

途中で口をつぐむ。だが、何を言いかけたのか、シャルにはわかつていた。

「せめて、ロッテがここにいれば」

彼女が今でもシャルの友達なら……と、シグムントはそう言いたかったのだ。

怒りのような、悲しみのような、名状しがたい感情がシャルの胸を揺さぶった。

「シャルよ、己を見失うな。君には君の戦い方がある」

「——そうね。そうよねー」

無理やり気持ちを立て直し、光の向こうのオルガをにらむ。

オルガはシャルの出方を待っている。あるいは、シャルを試しているのかもしれない。シャルは覚悟を決め、全身全霊の魔力を体内で練り上げた。

「あれをやるわ。私にはもう、それしかないから」

「だが、塔を破壊してしまうぞ。塔の外壁に穴を開けては――」

「開けないでー 壊しちゃだめー」

「……無茶を言う。だが、それでこそ、君らしい」

シグムントは苦笑して、シャルの右腕にとまった。

膨大な魔力がシグムントのボディに流れ込む。それは魔術回路（魔剣）を通して、巨大な質量に変換された。

「目覚めよ力、ファフニール――（暴虐の王）――」

刹那、フロア全体を暗闇が包み込んだ。

光という光をかき集め、のみ込み、吸収して、濃い闇が生じる。その闇の中から、太い腕が、たくましい脚が、巨大な翼が飛び出してくる。

限界を超えた巨大化だ。雷真が危険を察知して、仲間たちに叫んだ。

「つぶされるぞー 下の階へ逃げるー」

そうは言っても、シグムントの膨張は速く、逃げる余裕はない。ロキがケルビムに魔力を飛ばし、ブレードで床を焼き切って、一同を呼んだ。

「こつちだ！　ここから飛び込め！」

「助かるー！」

夜々と日輪を両手に抱え、言われるまま床の穴へ飛び込む。仲間たちもそれにない、次々と下のフロアに脱出した。

だが、結論から言えば、それは無駄だった。

シグムントの手足はますます肥大化し、ついには床を突き破ってしまう。フロアが崩れ落ち、大きな瓦礫が降りそそいだ。

既に魔力の余裕はないはずだが、雷真たちは金剛力や熱風操作など、それぞれの魔術を駆使して身を守る。シャルは唇を噛み、心の中で謝った。仲間たちには申し訳ないが、今さらシャルにも止められない。

やがて床の崩落が収まったとき、塔はシグムントの体で埋め尽くされていた。ほとんど箱詰め状態。収まりきらない首が今にも天井を破りそうになっている。

シグムントの角につかまって、シャルはオルガを見下ろした。

「床をぶち抜いちゃだめ——なんてルールはなかったわよね？」

「……正気か、シャルロット？」

さすがのオルガも驚愕したようだ。声が上がっている。

返事の代わりに、シャルはさらに魔力を高め、シグムントに送り込んだ。

シグメントがどうにか下を向く。その牙のあいだから、ちらちらと光が漏れた。

「魔剣の出力は魔竜の質量に比例するわ。貴女の（甲殻）は確かに鉄壁だけど、果たしてこの一撃を受け止め切れるかしらね？」

「……消滅反応は爆風を呼ぶ。塔が粉々に吹っ飛ぶぞ？」

「貴女が加減すればいいじゃない？」

破滅的な威力を予感させる、不穏で剣呑な大気の振動。

「せいぜい死なないで頂戴。ラスターカノン——（グライアス）——」

シャルの号令と同時に、巨竜の口から濁流のごとき光がほとばしった。

## 4

圧倒的な光量で、視界のすべてが真っ白に染まる。

あらゆる抵抗が無意味に思える。雷真は夜々と日輪を抱え、目を閉じた。

シャルは仲間のことも忘れていない。雷真たちがいるフロアのふちは、きちんと安全圏になっている。それでも、凄まじい爆風が押し寄せてきた。

猛烈な圧力。内臓が口からはみ出るんじゃないかと思う。

光がおさまってみると、足もとに恐るべき空洞が生まれていた。

底の見えない大穴が、はるか下まで続いている。

破滅の光はシグムント自身の尾や手足、胴の前面を舐め溶かし、下のフロアを焼き尽くし、舞台を消滅させ、岩盤を十数メートルも貫いていた。

さすがのオルガでも、これを受け流すのは骨だったようだ。フロアのへりに座り込み、荒い息をついている。相当な魔力を消費したらしい。

そのオルガの近くに、トールの姿は見当たらなかった。

「甘えなあ、シグムント」

全然別のところから、トールの声が聞こえる。

（上……か？）

目を回している夜々を抱え、雷真は朦朧とした頭を上に向ける。

シャルは——いた。シグムントの角にしがみついている。だが、今の衝撃で気絶しかけているらしい。ぐったりと角に体重を預けている。

そのシャルの帽子の上に、赤い仔竜がしがみついていた。

トールだー 大口を開け、魔剣の光でシャルを消し飛ばそうとしている！

シグムントが気付き、大声で叫んだ。

「よせ、トールー シャルを狙えば、君の主も失格になるぞ！」

「甘えって、兄弟。この一二〇年で、すっかり膝抜けちまったようだな。夜会なんぞ知る

かよ。オルガは〈結社〉の人間だぜ?」

シグムントは息をのみ、大きな目を見開いた。

「魔剣を所有し、エレインの術を使う——オルガはセト家の者か! では、キンバリー女史が危惧した通り、あの〈ニールングの呪い〉はセトの呪術——」

「何……? 何の話を……してるの?」

シャルは状況が理解できていない。ほんやりシグムントにたずねる。今まさに頭を吹き飛ばされそうになっているのに――

雷真は必死にあがく。だが、先ほどの爆風は想像以上のダメージで、三半規管が狂い、立ち上がることもできない。

雷真がもたついているあいだに、トールは魔力の充填を終えた。

「最後に教えてやるよ。ブリュンヒルドが死んだのは、敵に殺されたからじゃない」

「何……だと?」

「俺が喰ったのさ。この胸には二本の魔剣がある!」

その瞬間、シグムントの眼に凶暴な光が宿るのを雷真は見た。

巨大な頭部を振り、シャルとトールを振り落とす。トールがシャルから離れ、宙に浮いた一瞬に、シグムントは大顎でトールを噛み潰し、のみ込んだ。

雷真はよろめきながら立ち上がり、落ちてくるシャルを受け止める。魔力で肉体を強化

したものの、魔力切れて踏ん張れず、右膝の韌帯が嫌な音を立てた。

それでも、どうにかシャルは受け止めることができた。

ほっとした瞬間、シグムントの胸が吹き飛んだ。

銅色の胸をラスターカノンの光が破る。その光にまぎれ、血だらけの仔竜が飛び出してきた。――どうやら、内部からシグムントの腹をぶち抜いたようだ。

「ほらな？ 主を氣に入った奴から死んでいく」

トールはにたりと笑って、もう一度、自分の魔術回路を起動した。

「あばよ、人間の犬！」

吐き出された閃光が、今度は外部からシグムントの胸を射抜く。

その一撃がシグムントの何を貫いたのか、雷真は感覚的に把握した。かかしのように立ち尽くす雷真を、夜々が下から揺さぶる。

「雷真ー どうなっただんですか!？」

「シグムントの……」

「雷真!？」

「心臓がやられた!」

変化は既に生じていた。うろこがはがれ、肉が千切れて落ちてくる。シャルが雷真の腕を飛び出し、シグムントに向かって手をのばした。

死んだ鳥のように落ちてくる相棒を、念動で引き寄せる。シャルの手に戻ったときにはもう、シグムントは仔竜のサイズに縮んでいた。

「シグムントー しっかりー しっかりしなさいー」

必死に呼びかける。シグムントは虚ろな眼でシャルを見たが、返事をしなかった。

「負けを認める、シャルロット」

汗の玉を光らせながら、オルガが降伏を迫る。

シャルは唇を噛み、涙目でオルガをにらみつけた。

……耐えている。必死に。

本当は今すぐ負けを認めて、医務室に駆け込みたいはずなのに。

雷真はたまらなくなつて、シャルに怒鳴つた。

「もういいー 負けを認めて、早くシグムントの手当てをしろー」

「……………」

「遂つてる場合かー シグムントが死んじまうぞー」

シャルは返事をせず、ただ可哀相なくらい震えていた。仲間との友情と、シグムントへ

の愛情——その狭間で板挟みになっている。

どうすればいいのか……。悩む雷真の真後ろで、いきなり外壁が吹っ飛んだ。

巨大な蛇型自動人形が、壁を破つて突っ込んでくる。



二〇メートル近い大蛇。大人をひとのみにできそうな威容だ。バスタブほどもある頭部に、女子学生が一人、優雅に腰掛けていた。

大きく胸元が開いた、中世の貴婦人をおぼせる変形制服を着ている。縦巻き、盛り髪の手な髪形には、雷真も見覚えがあった。

「……何の真似だ、ソーネチカ？」

オルガが大蛇を見上げ、とがめるような口調で言った。

刹那、ソーネチカの冷徹な瞳に、激しい怒りの炎が閃いた。

「この痴れ者！ それはこちらの台詞ですわ！ 実力で圧倒しておきながら、無用の殺戮を行う——一体何の真似ですの、オルガ！」

怒声と同時に、強烈な魔力が飛んできて、雷真の手足がびりびり震えた。

「貴女に誇りが一片でも残っているなら、今すぐ舞台を降りなさい。この勝負、わたくしソーネチカ・スニートキナが預かりますわ」

「何だと？ 何を勝手な——」

「去りなさい！ わたくしが自制しているうちに——」

発散された魔力が、瀑布のごとくのかかる。昂と六連が身をすくめ、フレイはびくつとなり、ロキでさえ苦しげに顔をしかめた。

オルガはソーネチカの大蛇を見上げ、考え込むような顔を取った。

シャルの特大ラスターカノンを防いだために、魔力を大幅に減じている。ソーネチカと今から一戦交えるのは、どう考えても分が悪い。

オルガは構えを解き、シャルの方を振り向いた。

瀕死のシグムントを一瞥し、ふっと微笑む。

「この決着は後日としたいが、異論は——ないようだな」

血まみれのツールを呼び寄せ、颯爽と階下へ降りていく。

呆気ないほどあっさりと、オルガは去った。

「シャルロットー 何を呆けているのです！ 魔竜の忠義に報いなさい！」

ソーネチカの怒声が飛ぶ。シャルは我に返り、雷真たちもそれぞれに動き出した。

「フレイ！ 悪いがシャルを医務室まで連れて行ってくれ！」

「う、わかった！」

フレイはガラム犬を集め、怪我がないのを確かめてから、セントバーナードにシャルをつかまらせた。自らはラビにまたがって、半壊した階段に突っ込んでいく。

雷真も痛む体に鞭打って、夜々の手を借り、塔の外へ飛び出した。

「雷真！ そんな体で、どこへ行くんですか？」

「硝子さんと呼んでくる！ 硝子さんなら……シグムントの命をつないでくれるはずだ。

ラビの命をつないだみたいに！」

一縷の望みを賭け、駆け出す。

痛めた腿が激痛を訴えたが、雷真は無視して走り続けた。

## 5

オルガが塔を出て、観客の前に姿を現したとき、客席は騒然としていた。

ソーネチカの乱入もさることながら、魔剣同士の壮絶な決着に観客も動揺しているようだ。拍手と歓声も聞こえてくるが、それ以上にざわめきが大きい。

オルガは軽く一礼し、おさなりに挨拶した。

その表情が訝えないのに気付き、トールが茶化すように言う。

「どうした、浮かない顔だな。罪悪感でも持つちまったのか？」

「けけけ、と笑いながら、腫をのぞき込んでくる。

「魔王になるのが唯一おまえの生きる意義。そのためならば、その手が血で染まることも怖れない——だろ？」

トールの首を握りつぶしたい衝動に駆られたが、オルガは耐えた。いつも通りの穏やかな口ぶりで、心中は決して穏やかではなく、皮肉を言う。

「躊躇なくやったものだ。魔剣の急所はわきまえているということか」

「あいつもつまねえ挑発に乗ったもんさ。間もなくボディが白壊を始める」

「魔剣の魔術回路は心臓と一体——分かつことができないと聞く。魔術回路を無力化するには、心臓を砕くしかなかっただろう。……しかし」

観衆の視線から逃れるように、足早に舞台を降りる。

「魔剣は貴重な魔術回路だ。破壊してしまつて……よかつたのか？」

「惜しいと言えば、惜しいな。だが、魔剣を三本も抱えるには、このボディは貧弱すぎる。つぶしておけば、俺の希少価値も跳ね上がるしな」

「そうではなく……シグムントは君の兄弟なんだろう？」

トールは目を丸くした。そして、愉快そうに笑い出した。

「（金色のオルガ）にも人間の血が流れてるつてことか。なに、ためらう必要などないさ。俺たちは本質的に不滅だ」

「それは……どういう意味だ？」

「……おっと、こいつはしゃべりすぎか。この先は竜王に訊くがいいさ。いつかおまえがあの世に行ったときにでも、な」

けけけ、と享乐的に笑う。オルガは目を伏せ、皮肉っぽく微笑んだ。

「……あの世か。そんなものが、本当にあればいいのにな」

もし本当に魂が不滅なら、どれだけ大きな慰めとなるだろう？

死ねば無。ゆえに人は皆、死を怖れ、別離に苦しむ。

不意に誰かの気配を感じて、オルガは林道で足を止めた。

「——誰だ？」

気が立っているせいで、殺気がほとばしる。こちらの敵意を感じたのか、存外素直に、隠れていた者が姿を見せた。

木陰から現れたのは、体格のいい男子学生だった。

知っている顔だ。彫りの深い、整った顔立ち。それを台無しにする、だるそうな表情。背が高く、肩幅が広い。野生動物を思わせる、しなやかで発達した筋肉。

「（下から「番目」、オーガスト・ヴェイロンか」

ヴェイロンの背後には機械人形が控えていた。中世の騎士甲冑を思わせる意匠で、全身が金属——おそらく魔鉱——で構成されている。

彼が自動人形を連れているなど珍しい。怪訝に思いながら、探りを入れる。

「我らの協約に参加しなかった君が、コロセウムの近くで夜の散歩か？」

ヴェイロンは答えなかった。オルガは重ねて、

「協約に参加してくれる気になったのか？」

「……そのつもりはねえ。俺は面倒ごととは嫌いなんだ」

ようやく返事をする。肩をすくめて、いかにも面倒くさそうに。

そのまま立ち去ろうとする背中に、オルガは思わず声をかけた。

「待て。……おかしなことを訊くが、ヴェイロンというのは本名か？」

ヴェイロンは足を止めた。肩越しに鋭い視線を投げてくる。

「……いや、突っ込んだことを訊いてすまない。忘れてくれ」

ヴェイロンはやはり応えず、あくびをしながら歩いて行つた。

トールが面白がるような目をして、意味ありげに笑った。

「あいつが気になるのか？」

「あの男のことを、私は知っているような気がする」

「ほう？ どういう縁だ？」

「……それが思い出せない。ひよつとしたら、彼も私と同じ使命を背負う——〈結社〉の者かも知れないな。ちようと、そんな匂い<sup>にお</sup>いがある」

「確信があるような口ぶりだな。なぜわかる？」

オルガは少し考え、そして、はぐらかすように笑った。

「風が教えてくれたのさ」

「風の精——すなわちシルフか。ゼカルロス弟も使っていたな」

「あんなまがいのものと一緒にするな」

苦笑してしまう。そう言えば、ゼカルロス兄弟はどうなったのだろうか？

先ほどシャルが放った特大ラスターカノンは、本当に危険だった。階下にいたのなら、ゼカルロス弟が巻き込まれた可能性はある。

もつとも、もしも死人が出たのなら、夜会執行部が黙ってはいないだろう。

（まあいい。彼は私の駒ではないし、彼の監督も私の任務ではない）

オルガに無断で行われた作戦だ。彼らの命など（結社）の幹部が気にかければいい。オルガにとって大切なことは、ただ一つ。

「ソーネチカの介入で勝負は持ち越しとなった。……が、魔剣の自動人形は失われ、ライシン一派はもはや死に体。こちらの勝利は揺るがないだろう」

口元に麗しい微笑みを浮かべ、白い手袋をはめた手で、ぐっとこぶしを握る。

「いずれ私は魔王となり、そして自由を手に入れる」

「自由ってのが、そんなにいいもんかねえ」

トールがバカにしたように笑い、そして、星空を見上げてつぶやいた。

「なあ、兄弟。おまえはどう思ってる？」



## Chapter 2 ブリューとともに

### 1



「悪い知らせです。我が師、我が父にして我が母、竜王<sup>ドレイク</sup>よ」  
庭に巨体を横たえ、シグムントは怒越しに言った。

「ブリュンヒルドが破壊され、トールが敵の手に落ちました」  
ヨモギの香りがする書齋に、半竜半人の主<sup>あるて</sup>がいる。

シグムントの主ドレイクだ。主は安楽椅子<sup>あんらくいす</sup>から立ち上がり、  
「これまでのようだな。ブリュンヒルドを倒すばかりか、トールを捕獲するとは……。敵  
はもう〈魔剣<sup>マジツルム</sup>〉の対抗策を持っていると考えるべきだ」

「我が師よ、いかがされる？」

「おまえたちは下山せよ」

「――尾をまいて逃げろと？ 連中は貴方<sup>あなた</sup>の研究成果を狙<sup>ねら</sup>っていますー」

「なればこそ、逃げるのだ。資料をすべて手にすれば、彼奴<sup>きやつ</sup>らもこの地に用はあるまい。



なに、案ずることはない。彼奴らの前にヴァルハラワールハラの扉は開かれぬ」

「ですが……師よ、貴方はどうされる？」

「無論、私も逃げる。だが、秘法が解析できぬとなれば、彼奴らは必ず私を探さだろう。おまえたちと落ち合うのは、ほとぼりが冷めてからだな」

「……わかりました、我が師」

生命に従い、シグムントは一度、下山した。

だが、その夜のうちに戻ってきてしまった。シグムントにとって主は親も同然、簡単に見捨てられるものではない。

戻ってきたシグムントは、好き放題に荒らされた邸を目の当たりにする。

結局、大きな後悔だけが残った。

なぜ、あのとき、私は主の側に留まらなかったのか――

「どうした、竜よ」

女性の声で我に返る。

たき火の向こうに、エレインと名乗った女騎士が座っている。

エレインはあぶった干し肉をシグムントの鼻先に差し出した。

「遠慮せず、食べなよ。その巨体を維持するために、肉が必要なんだろう？」

香ばしい匂いには惹かれるものがあつたが、シグムントはぶいっと顔を背けた。

「そんな量では喰い足りぬ」

「それもそうか。では私が遠慮なくいただこう」

はむつと食いついて、嬉しそうに咀嚼する。

「竜よ。腹が減ったときは、腹が減ったと言えればいいんだ。言葉が話せるのに、なぜ村人たちに助けを求めなかった？」

「人間は信用できない。その上、私はこの図体だ。村人は恐れる。まして、一部の村人は竜王の異形を目撃している。私が何を言っても、信じてはくれまい」

「異形——なるほど、例のワニ男とは、ドレイク殿のことだったか」  
シグムントの体を観察し、見透かしたようにうなずく。

「その体は機巧部品で組み上げたものじゃないね。禁忌の技法で有機合成、あるいは変成したものだ。となれば、ドレイク殿の異形も……？」

「竜王は慈悲深い男だった。動物実験を嫌い、自らの肉体で試したのだ。我らが持つ禁忌の生体部品も、元を正せばドレイクの肉体の一部だ」

「——なら、竜よ。これ以上、ドレイク殿の名を汚すな」

シグムントは絶句した。冷水を浴びせられたような気分だった。

「汚す？ 私が？」

「おまえがしていることは、主への冒涇だ」

血液が逆流し、めまいがするほどの怒りが込み上げた。

「小娘が知ったふうなことを……」

「知っているさ。ドレイク殿は動物実験すら厭われるお方だったんだろう？」

「――」

「私はこう見えて魔術師の端くれだ。ドレイク殿の名声は聞き及んでいる。こんな田舎に随分送られているとは思わなかったけどね」

荒れ果てた庭と、崩れかけた邸を見回す。

「ドレイク殿が考案された靈藥精製技術は、医学と化学に大きな進歩をもたらした。晩年は（魔劍）という、宇宙の神秘に迫る研究をされていたとか」

「それを奪ったのだ！ 奴らが！」

シグムントの吠え声がたき火を吹き飛ばし、かき消してしまった。

「再び攻めてくるかも知れんのだ！ ここに！」

竜の牙が眼前に迫っても、エレインは怯まず、淡々と応えた。

「魔劍が噂通りのものなら、悪しき者の手に渡ったが最後、民草の脅威となるのは間違いない。おまえが秘密を守ろうとするのも、正義のないことじゃない。でも、おまえが養う家畜は、決して格好ではない村人たちのものだ」

「おまえが盗賊に墮ちたと知れば、ドレイク殿は悲しまれるだろう」

「だが……ここは竜王の土地だ。なんびとたりとも、侵させはしない」

「甘ったれたことを言うんじゃない」

一喝する。その声は教会の鐘のようによく通り、シグムントを怯ませた。

「ドレイク殿は亡くなったんだろう？　なら、おまえが何百年ここを護り続けても、二度

とお戻りにはならない。おまえは村人を苦しめているだけだ」

これまで感じたことのない痛みが、シグムントの胸を貫いた。

それが「傷つく」痛みだと、生まれて初めて理解する。

その痛みが伝わったかのように、エレインの瞳もまた、悲しげに揺れた。

「おまえの忠義は尊い。だが、主に忠義立てしたいなら、仇を討て。この山に引きこもり、

近隣の村を襲い続けていても、それは叶わない」

「だが……敵は私の兄弟たちを……魔剣の竜を倒し、生け捕りにするような連中なのだ。

私一人の力では……倒せるはずもない」

「一人じゃないさ。こう見えて私は魔術師、その上、弱きを救う放浪の騎士だ。高貴なる

者の義務として、その仇討ちに手を貸そう」

シグムントは驚き、それから、冷ややかに言葉を返した。

「悔るな。そのようなことをしても、魔劍の秘密は渡さぬ」

「み、見損なうな！ いみじくも騎士を名乗る者が、そんな打算で動くものか！」  
エレインは本気で怒り出したが、すぐに怒りを鎮め、ばつが悪そうな顔をした。

「……でもまあ、私に見返りがないこともない……な」

「それ見たことか。見返りは何だ？」

「おまえが暴れるのをやめてくれれば、村の者たちが救われる」

「……ふざけるな！ そんなものは見返りではない！」

エレインは取り合わず、恥ずかしそうに笑っている。

田舎娘のような、あるいは聖女のような、清廉な笑顔だった。

シグムントはもう完全に毒気を抜かれ、覚悟を試すように訊いた。

「……本当に、手を貸してくれるのか？」

「騎士は約束を違えない。だが、出発の前に、おまえの主を弔ってやりたいな」

シグムントが護ろうとしていた邸、護ろうとしていた部屋を示す。

「そこにいらっしゃるんだろう？」

シグムントはうなずき、そつと道を譲った。

崩れた壁の穴から書齋が見える。

書籍の大半が持ち去られた書齋に、半人半竜の白骨死体がうち捨てられていた。

シグムントの巨体ではどうしようもなく、そのままにされていたもの。

主はここで奴らと戦い、そして最後は自死して果てた。

口では逃げると言いながら、主には逃げるつもりなどなかったのだ。

エレインはドレイクの前で手を合わせ、祈りを捧げた。

祈りを終えると、そっと床に手を触れ、語りかけるように言う。

「地に住まう者たちよ。住処を荒らすことを許せ。そして、手を貸してもらいたい」

石の床が抜け、土が見る間に割れていく。

「鉄の精よ。今だけは酸の呪縛を忘れ、往時の輝きを取り戻してくれ」

錆びたスコップがたちまち輝きを取り戻し、新品同然になる。

エレインはスコップを手にも、衣服が汚れるのも構わず、墓穴を掘り始めた。

主のために、見知らぬ女性が汗を流してくれている。

それはどこか神聖で、美しい光景だった。

やがて、シグムントは自ら魔術を解除した。

光を放ちながら手足が縮み、体が小さくなっていく。エレインが異変に気付き、こちら

を振り向いたときには、シグムントは仔竜の姿になっていた。

「……これは驚いた。おまえ、小さくなれたんだね」

「この姿であれば、魔力の消費を抑えることができ、肉も少しで足りるのだ」

ばさりと飛んで、エレインの足もと、土の上に着地する。

「だが……敵が再び攻めてきたらと思うと、この姿にはなれなかった」

「巨大化するには大きな魔力が——魔術師の助けが必要なのか」

「うむ。小さな体では獲物を仕留めるのも難しい。人間の腕力にも負けてしまう」

「そうか……つらかったな」

シグムントは無言で前足を動かし、エレインの作業を手伝った。

エレインの念動によって、ドレイクの遺体が墓穴へと運ばれる。

どこからか毒のつるが伸びてきて、季節外れの花が咲いた。

振り向けば、エレインが笑っている。——精霊術で咲かせたのだろう。

毒のベッドにドレイクの骨が安置されると、シグムントはその前に降り立ち、主の遺体を見つめながら言った。

「感謝する、エレイン。おまえが言った言葉……胸にこたえた」

ドレイクの胸に、そつと手を当てる。

「私の行いが、主を……悲しませていたのだな？」

「そうだ」

「私がここを護<sub>まも</sub>つていても……主には、二度と会えぬのだな？」

エレインは少しためらい、そして――

「そうだ」

ぼろり、とシグムントの眼から涙がこぼれた。

ぼろり、ぼろり、とガラス玉のようなしずくがドレイクの骨に落ちる。

長らくこらえていたものが、堰を切ってあふれ出す。

仔竜は天を仰ぎ、母を亡くした仔犬のように、うおんうおんと天に吠えた。

その姿を、エレインはいたわるような眼で、優しく見守っていた。

かくして、魔剣シグムントはエレイン・プリューの手に渡った。

ほどなくして、竜を従えた自由騎士——時代遅れのドン・キホーテは、英国のみならず大陸にまで武名を轟かせることとなる。後にエレインは男爵、次いで子爵位を与えられ、ドレイクの土地を受け継ぐ形で、小さいながらも所領を与えられた。

エレインは終生シグムントを側に置き、常に友人として扱ったという。

それから一二〇年、プリューの武名は常に魔竜とともにあった。

## 2

医学部一階の医務室で、自動人形の救命処置が行われていた。



執刀しているのは極東の人形師（花柳斎）硝子。フレイのラビを治療したときと同様、結界を作り、魔石を駆使して、何とか命を永らえさせようとしている。

医学部の廊下は重苦しい沈黙が支配している。雷真のとなりには青白い顔の夜々と日輪がいて、フレイは廊下のすみでラビにしがみついている。昂と六連はここにはいない。上の入院病棟に搬送され、本人たちが治療を受けていた。

そして、シャルは――

妹アンリに抱きかかえられ、仔ねずみのようにぶるぶる震えていた。

やがて、一時間にも感じる一〇分間ののち、医務室の扉が開いた。

雷真の頭から血の気が引く。硝子はまだ、シグムントの腹をあけたばかりのはずだ。

「シグムントはどうなった!? 硝子さん――」

「助からないわ。あきらめなさい」

何もかもが死に絶えたような、冷たい静寂が廊下に満ちた。

「そ……それは最悪の場合を言ってるんだろ？ 何とかしてくれたんだよね？」

「甘えないで。……私は神さまじゃないわ」

シャルはもう言葉もない。ただ泣き出してしまった。

硝子が顔を背け、いろりが目を伏せる。日輪はシャルに手を伸ばし、何か言おうとしたが、結局は何も言えなかった。

雷真も、夜々も、フレイも、アンリさえ、口をつぐんでいる。誰も、シャルにかける言葉を見つけれない。

そんなシャルに、ただ一人、声をかける者がいた。

「泣くな、シャル……」

シグムントだ。シャルは弾かれたように医務室へ飛び込んだ。

シグムントは治療台の上に横たわっていた。

最低限の縫合はされているが、もはや包帯も巻かれていない。手足は損壊されたままで、自動修復が始まっていなかった。心臓はほとんど機能していない。

シャルは治療台にしがみつき、泣き崩れた。シグムントは苦笑して、

「泣くな……。私はかれこれ一五〇年も生きている……。いつかは自分にもこの日がくると……わかっていたつもりだ……」

「だからって……嫌よー 死なないで！」

「肉体は朽ちても……遠くヴァルハラの地より……ずっと君を見守っている……」

「気休めはやめて！ 私をひとりにしないで……っ」

ふっ、とシグムントは小さく笑った。

「君はもう……ひとりではないだろう？」

静謐な視線が、雷真に、夜々に、フレイに、日輪に、そしてアンリに向けられる。

「私はここまでだ……。だが、幸い……。魔剣のコアは……。損傷が軽い。魔剣だけなら……この世界に……。這（の）せるかも知れん……」

シグムントはわずかに首をもたげ、硝子（しやうこ）に向かって言った。

「花柳斎殿……。新しい（エイブの心臓）を……。くれまいか？」

硝子は少し考え、着物の袖口（そでぐち）から魔石をいくつか取り出した。

てのひらで並べ替え、念を込めて握りしめる。

それだけで魔石はまばゆい玉となった。実体のない光の塊だ。（エイブの心臓）の中身と思われるが、容器に相当する外装がない。

「主（ま）、それは秘中の――」

何か言いかけるいろりを制して、硝子は光の玉をシグムントの鼻先に置いた。

シグムントはしばらく光を観察していたが、やがて満足げに目を閉じた。

「我が師よ……。ご命令に背き、魔剣を他者に譲る……。この身の罪を……。赦（ゆる）したまえ」

最後の力を振りしぼり、魔力を高める。シグムントからあふれた魔力が光の玉を包み、次第に甲殻（こうかく）のようなものを形作った。

ほんの十数秒で、光の玉は楕円形（だまんでんけい）の卵になる。

シグムントは荒い息をつきながら、雷真（らいしん）に向かって言った。

「雷真……。すまないが……。その卵は、君が解（か）してくれ……」

「どういうことだ？ 魔力を流せばいいのか？」

「おそらく……君でなければできん……シヤルには無理だ……」

言われるまま、そつと手に持つてみる。

ずずつと力を吸い出されるような感覚があつて、激しいめまいに襲われた。卒倒しそうになるのを、夜々がとつさに支えてくれる。

「気をつけてくれ……途中で魔力が途切れれば……魔剣が折れてしまう……」

——そうか、この中にあるのは魔剣の魔術回路だ。

硝子が与えた〈エイブの心臓〉に、自分の回路を移植したらしい。

「わかった。任せろ。俺が絶対、睨してみせる」

力強く請け合うと、シグムントは安心したように首を投げ出した。

「シグムント!? しつかりしてー」

シヤルが取り乱す。シグムントはぼんやりと視線をさまよわせた。

「アンリ……」

「ここにー！ ここにいるよー」

「己を卑下するな……。君は……君が思っている以上に……素晴らしい少女だ……。誰に恥じることもなく……自分の道を進むがいい……」

「うん……わかったよー！ ありがとう、シグムント……っ」

誰に

シグムントの眼が動き、今度はシャルを見た。

「シャル……」

「そんなの聞きたくない！ そんな遺言みたいなこと！ 死んじやだめ！」  
揺さぶろうとするシャルを、雷真は片手で抱え込んで止めた。

「やめろ、シャル。……わがまま言つて、シグムントを困らせるな」

「だって——」

「最期なんだ。……笑つて、見送つてやれ」

すう、とシャルの体から力が抜けた。

夜々と日輪は赤い目で、フレイはぼろぼろ泣きながら、無言でシャルを見つめている。  
皆の視線を背に受けて、シャルは治療台の前にしゃがみ込んだ。

「……お別れなのね？」

ほんのかすかに、シグムントが首を上下させる。

シャルはしゃくり上げそうになったが——我慢した。

制服の袖で涙をぬぐい、顔を寄せる。

「貴方は一二〇年、プリューとともにあった」

精一杯の微笑みを浮かべて——

「ずっと一緒にいてくれて、ありがと……っ」

こらえきれない涙が、いくつもいくつも、痛々しい笑顔の上をすべり落ちる。

シグムントは目を細め、我が子を見るようにシャルを見た。

「……立派な娘に成長したな」

「うん……うん……っ」

「君たち姉妹が生まれた目を……昨日のことに思い出す……」

輝きの失せた虚ろな瞳で、はるか遠くを見つめる。

「私の一生は……なかなか充実していたよ。エレイン……オズワルド……フレデリック……リチャード……イライザ……みんな、いいやつだった。無論、君の父エドガーも……」

だが……君といた一七年は……特に楽しかった」

「っ……私もー 私もよー」

「心残りと言えば……君の子に、産湯を……つかわしてやりたかったが……」  
包み込むようにシャルを見て、最後にそつと――

「さらばだ、シャル」

小さな頭が浮き上がり、四肢が突っ張った。

力が抜け、すぐに突っ張り、そしてまた脱力する。

やがて瞳孔が開ききり、シグムントは動かなくなった。

うろこが螢火のような燐光に包まれ、肉が粒子となって散っていく。

シャルの手が泳ぎ、光をかき集めようとする。だが、それは空しい行為だ。雪が逆さに降るように、光はシャルの手をすり抜け、天にのぼっていった。

最後の光が消えたとき、静まり返った校舎に、シャルの慟哭が響き渡った。

## 3

深夜になっても、雷真は医務室前の廊下に居座っていた。

長椅子の上で毛布にくるまり、卵を抱いている。最初は鶏卵くらいの大きさだったが、魔力を吸って大きくなり、大きな林檎くらいになっている。

疲労のあまり気絶しそうだ。ぐらぐら揺れる視界に、突然、カップが突き出された。湯気の立つミルクが注がれている。見上げると、夜々が刺々しく微笑んでいた。

「ふらふらですよ、雷真」

「……ああ。ありがとう」

片手で卵を抱いたまま、カップを受け取り、口をつける。

ミルクの甘みが喉をすべり落ち、少しでも力が戻った。

「すみません……夜々にも、お手伝いできたらよかったですけど」

「その気持ちだけで十分だよ」

「夜が明けたら、精のつくものを用意します。それとも、夜々の母乳を飲みますか？」

「脱ぐな。つか、出ないだろ」

着物をはだけようとした拍子に、夜々の眼からぼろっと涙がこぼれ落ちた。

夜々は涙を隠し、あわてて走り去った。

「ふん……何だよ、いいところだったのに」

反対側から声がかかる。振り向くと、仏頂面のクルーエル医師が立っていた。

「悪いな、先生。入院でもねーのに、ベッドを借りちまつて」

入院患者用のベッドを、今夜はブリュー姉妹が使っている。シグムントの機巧骨格――

真骸もそのまま安置され、形ばかりの霊安所になっていた。

「むさくるしい男なら叩き出すけどな。美少女に貸すなら大歓迎だ」

クルーエルは軽口を叩くように言った。それから、挑発的に雷真を見下ろす。

「暗い顔してんじゃねえよ。人形の嬢ちゃんもいいが、むしろ《暴竜》にエロ行為を働い

てやれ。案外、すんなり立ち直るんじゃないか？」

「何だって……!? こんなときに、あんなたつて奴は……っ」

「湿っぽいのは嫌いなんだよ。……傷の治りが遅くなる」

小声で漏らした言葉に、彼の本音が宿ったような気がした。

クルーエルが廊下を去ると、雷真は再び魔力を集中した。



魔力が追いつかず、やむなく紅翼陣（こうよくじん）を発動させる。

こんなヘロヘロの状態でも、グリゼルダが施してくれた（アリアドネの糸）の恩恵で、制御を失うことはない。だが、肉体の方が限界だった。不意に舌が痺れ、手足の感覚が遠のき、あっけなく気絶する——前に、すうつと意識がクリアになった。

顔を上げると、今度はグリゼルダが立っている。

「少しは楽になったか？」

グリゼルダの指から魔力の糸が伸び、雷真の体内に潜り込んでいた。

グリゼルダはそつと卵に触れ、残念そうにかぶりを振った。

「もう貴様の波長に同調している。今から代わってやるわけにはいかんようだ」

雷真の前にしゃがみ込み、包むように手を握る。

「その……貴様、大丈夫か？」

「……あんたらしくないな、そんな優しい言い方」

「弟子を氣遣って何が悪い！」

「俺（おれ）よりシャルの方が千倍もつらいさ」

「だからこそ、貴様もつらいのだろう？」

雷真を理解している言葉だ。その優しさに、どれだけ救われただろう？

「……正直、今日ほど自分をぶつ殺したと思ったことはねえ。撫子——妹や、おふくろ

をやられたとき、俺にはどうしようもなかった。だが、今夜は違う。俺にはあったんだ。シグムントを死なせず済む選択肢が！」

エドマンドの奸計を見抜き、何か対策を打てていれば。

そうすれば、シャルが戦う必要もなく、シグムントは死なずに済んだのだ。

「……貴様のせいではない。今夜のことはキンバリー女史に聞いた。貴様はよくやった。イザナギの姫たちを護り、〈結社〉の破壊工作を阻止したのだ」

「けどよー シャルに……合わせる顔がねえんだ……！」

じんわり涙がにじみ、視界がゆがむ。

グリゼルダはひたいを寄せ、雷真の頭を抱え込んだ。

「自動人形を失うのは、単に武器を失くすのとはわけが違う。魔術師でなければわからん感覚だろうがな。魂の半分を引き裂かれ、肉親を亡くすようなものだ」

「俺たちは……シャルはこれから、どうすりゃいい？」

「貴様はどうしたい？ いつものように、代わりに戦ってやるのか？」

「それは……」

「シャルロットがオルガに勝つには、エレイン・ブリューに倣うしかあるまい」  
エレイン——戦闘中、シグムントが口にした名だ。

「（魔の山の暴竜）を倒したっていう、シャルの『先祖さまか？』」

「そうだ。彼女はたった一人で魔の山の人喰い竜を退治した。相手は魔剣の禁忌人形——  
臨戦状態の巨竜だ。それを単身、自動人形も使わずに倒した」

「どうやったんだ？ あんたみたいに、剣でやったのか？」

「エレインは精霊術の使い手だったそうだ」

精霊術。日輪の《いざなぎ流》と同じ、機巧魔術以前の古い魔術か。

「その才能は代々のブリュエー家当主にも受け継がれている。伝説的な逸話が英雄譚として残っているぞ。《活殺結界》エドガー、《魔弓師団》イライザ、《千剣》オズワルド——彼らは魔剣を結界や軍隊のように操ったという」

比較すると、シャルの戦い方は単純で、せいぜい《大砲》といったところだ。

「……そういや、オルガは魔剣を生き物みたいに操ってたな」

「あれが本来の《魔剣闘法》なのだろう」

「そんな技があるなら、シャルは何で使わなかったんだ？」

「使わなかったのではない。おそらく、使えなかったのだ」

「——」

伯爵が教えなかったのか……。エドガー殿は戦争嫌いでは有名でな、ご自身も魔術回路や機巧設計に造詣が深い学者肌の人物だ。嘘か誠か、決闘を含む百余回の実戦を経ながら、ただの一人、ただ一体の自動人形も殺したことがないという」

「……マジかよ。とんだけ強いんだ、シャルの親父さん」

「その伝説も魔剣があればこそだ。……いずれにせよ、世界大戦が始まろうというときに、娘に戦闘技法を授けたくはあるまい。そもそも、精霊使いの素質があるにもかかわらず、シャルロットは精霊が視えんような——」

そこで何かに気付いたらしい。一人で納得して、小さくうなづく。

「何だ？ どうしたんだ？」

「私はもう寝るとしよう。明日から大事な仕事があるからな」

手を離し、立ち上がる。不満げな雷真を見て、グリゼルダは冷淡に言った。

「これが現実だ。大切な者が死んでも明日はくる。悲しみに暮れている私たちのことなど、おかまいなしにな」

その通りだ。奥歯を噛む雷真に、グリゼルダは優しく訊いた。

「体はどうだ？ だいぶ楽になったろう？」

「あ？ お……本当だ。ぐっすり眠ったみたい、体が軽い」

「魔力も少々わけてやった。それで朝までではもつだろう。切れかけの鞆帯もつなげておいた。だが、完治にはほど遠い。しばらく無理をするな」

「あ……ありがとう、お師匠さま」

雷真と会話しながら、魔力を分け与え、治療までこなしていたようだ。戦争を経験して

いるグリゼルダは、戦闘技術のみならず、医術にも通じているらしい。

改めて魔王の力量を知る。同時に、悔しさが込み上げた。

自分にもこれができていれば、救えた命もあったんじゃないか――

突然手刀が振ってきて、雷真はとっさに片手で受けた。

「いきなり何だ！」

「己を責めるな、バカが！ 子どもが責任を感じるなど、一〇年早い！」

「だからって攻撃するな！ 卵が割れたらどうすんだ！」

「割れない！ それは貴様が、死にゆく者に託されたからだ！」

理屈にもなっていない理屈が、雷真の胸を打った。

そうだ。割れない。割ってしまつて、いいはずがない。

グリゼルダが足早に立ち去ると、曲がり角から夜々が顔を見せた。どうやら、立ち聞きしていたらしい。雷真は相棒に優しく笑いかけ、

「夜々、おまえはもう休め」

「え？ でも――」

「お師匠さまが言つてたろ。こっちの都合なんかおかまいなしで、夜会は続いていくんだ。

おまえが疲れてちゃ、死にかけの俺なんかまともに戦えねえよ」

「……わかりました」

夜々は素直にうなずいて、仮眠室に向かった。  
遠ざかる背中、いつにも増して小さく見えた。

## 4

夢の中で、シャルは木陰に座っていた。

テキストを予習しようとするのだが、内容がまったく頭に入っていない。イライラしてテキストを閉じると、膝ひざの上で何かが動いた。

気がつけば、そこでシグムントが丸くなっている。

シグムントはシャルを見上げ、にやりと笑った。

「どうした、シャル。雷真のことが気になって、集中できないのか？」

「なっ——意地悪言つてると、お昼のチキンをひよこ豆に格下げするわよっ」

「私は小鳥ではないぞ。豆では身がもたない」

不意に理由のわからない不安にかられ、シャルはシグムントの翼を握った。

「ねえ……ずっと、一緒にいてくれるわよね？」

「急にどうした」

「いなくなったり、しないわよね？」

「また不安になったのか。まだまだ子どもだな」

シグムントは笑って、シャルを安心させるように、ゆっくりうなずいた。

「私はブリューとともにある。ずっと一緒だ」

シャルは嬉しくなって、テキストを投げ出し、シグムントを抱き上げる。

嬉しいはずなのに、なぜか涙が出た。

嬉しいはずなのに——なぜか寂しかった。

## 5

翌朝。早出の清掃員が掃除を終え、熱心な学生が研究室に向かう時刻。

静けさの中に、朝の活気が漂う。その気配を遠くに感じながら、雷真はまだ卵に魔力を送り続けていた。グリゼルダに回復してもらった体力も、わけてもらった魔力も、どちらも既に尽きている。この調子では、輸血が必要になるだろう。

それでも氣力を振りしほり、魔力を燃やし続けていると、かちやりと目の前の扉が開き、ネグリジエ姿のシャルが姿を見せた。

目元は腫れぼったいが、昨日の大泣きが嘘のように静かだ。

「よ………よう。気分はどうだ？ 飯、食えそうか？」

シャルは雷真の手の中、大きな卵を見つめ、不思議そうな顔をした。

「また変なことやってるわね。どうしたのよ、卵なんか抱いて」

「——どうしたって、おまえ」

「ダチヨウでも孵す気？ それより、シグムントを知らない？ また姿が見えないの」  
背中に氷を落とされたような気がした。

絶句する雷真の前で、シャルは腕組みをして、ふてくされた顔をする。

「勝手に出歩かないでっいつも言ってるのに。——私、ちょっと探してくるわ。アンリはもう少し寝かせておいて」

行こうとするシャルの腕をつかむ。シャルは驚き、振りほどこうとした。

「何よ！ 面倒な話なら後で聞くわー 私はシグムントを探しに行くのー」

「シグムントは……いない」

「馬鹿ね！ だから探してるんでしょー」

「シグムントは……死んだんだ」

「……何それ。シグムントが死ぬわけじゃないじゃない」

振り向いたシャルは、目を真っ赤に充血させて、今にも泣き出しそうだった。

「だって、言ったもの！ ずっと一緒にいるって……いてくれるって——」

「……この卵を遺して、死んだんだ。もう、どこにもいない」



「やめてよおっ！」

心の堤防は簡単に決壊した。シャルは耳を押さえて、はろはろと泣き崩れた。雷真はその手をつかみ、耳から引き離して、なおも言う。

「目を背けてる場合か！ シグムントはもういない！ しつかりしろ——」

「嫌っ……嫌ああああっ！」

子どものように泣き叫び、雷真の手を振り払って、廊下を駆けて行く。

追いかけてようとして、雷真はよろめいた。貧血で立ちくらみを起こしたらしい。大量の汗が噴き出して、猛烈な吐き気に襲われる。

「シャル………待て………」

「ライシンさん！ お姉さまは私が！」

騒ぎを聞きつけたのか、寝起きのアンリが部屋から飛び出してきた。

シャルを追いかけて、校舎の奥へ駆けて行く。

「……シャル………くそつたれ！」

動かない腕を振り回し、雷真は長椅子を殴った。

自分自身が情けない。もつとほかに言い方はなかったのか。

「今のは上手くなかったな」

傷口をえぐるような言葉が背中に浴びせられる。

いつからそこにいたのか、ロキが壁にもたれて立っていた。

顔色が悪い。(結社)の再襲撃を警戒して、寝ずの番をしていたらしい。

「銀河級バカが。貴様が行ってやらなくていいのか？」

「……優しい声出すな。かゆくなくなるぜ、宇宙規模バカ」

「バカは貴様だ」

「……そうだな、俺だ」

奥歯を噛む。そのとき、雷真の手で卵が揺れた。

中で何かが動いている。殻の表面に光がとまり、内部が透けて見えた。

兎のような生き物が、しつぽを抱えて丸くなっている、

次の瞬間、殻に大きな亀裂が走った。

## 6

足音を頼りに、アンリはシャルを追いかけた。

姉に続いて屋上へ出ると、冷たい風がアンリを包んだ。

抜けるような青空だ。秋の空は高く、寒々しいほど澄んでいる。

肌を切るような寒さの中、シャルはフェンスにもたれかかっていた。

かつての自分みたいに飛び降りてしまふんじゃないかと思つて、アンリは姉のもとへと走つた。華奢な背中に飛びついて、思いきり抱きしめる。

「後悔が……止まらないの……」

シャルはしばらく出すように言つた。普段は澄んでいる声が、涙で濁っている。

「チキンくらい……おなか一杯、食べさせてあげればよかった！ もっと素直に……助言を聞いていればよかった！」

ついにシャルはしゃくり上げ、その場にくずおれた。

「ごめんなさい、シグムント……私、もつといい子になるわ！ 貴方の言うこと、ちゃんと聞くわ……」 だから帰つてきて……帰つてきてよ……っ！

フェンスにひたいをこすりつけ、泣きじゃくる。

こんなにも弱々しい姉は初めてだ。

何か——何か言わなければ。姉のために、姉の力になることを。

「……こんなこと、私が言えたことじゃないけど」

アンリは姉を抱きしめ、強く言つた。

「シグムントの仇を討つて——」

シャルと同じように泣きじゃくりながら、一生懸命、言葉をつむぐ。

「負けたまんまじゃ悔しいよ……。私は魔術も下手で、頭も悪いけど……お姉さまは違う。」



学院の優等生で、才能もあつて、強い魔術師だから……だから」  
願いを込めて、訴える。

「勝つて！ 魔劍の本当の使い手はプリューだつて、証明して！」  
弱々しく震えるだけだったシャルの瞳に、一瞬、力が戻ったような気がした。  
そのとき、開け放たれた扉から、雷真が屋上に飛び込んできた。

「シャルー 卵が孵りそうだ！」

大事そうに抱えた卵に、大きなヒビが入っている。

「刷り込み……とかあつたらまずいだろ。あとはおまえが抱け！」  
慎重に駆け寄つてきて、割れかけた卵を差し出す。

シャルが受け取ると、殻の一部が砕け、小窓が開いた。

そこから、ちよこん、とクチバシのような鼻先がのぞく。

見覚えのある形だ。やがて卵は二つに割れ、銅色の仔竜が頭を出した。

濡れたうろこが見る間に乾き、閉じられていた目が開く。

仔竜が首をもたげ、不思議そうにシャルを見上げる。

顔つきはシグムントにそっくりだ。だが、決定的に違う点がある。

深い知性を宿していた瞳は、無邪気な好奇心に輝いている。

手足はたどたどしく空をかき、首の動きは雛鳥のように落ち着きがない。

そっくりだからこそ、わかってしまう。これは、シグムントではないのだ。

「……どうしたんだろう。じっと、お姉さまを見てる」

「たぶん、顔を覚えようとしてるんだ。シャル、名前をつけてやれ」

しばらくのあいだ、シャルは無言で仔竜と見つめ合っていた。

「——シグルド。貴方あなたの名前は、シグルドよ」

仔竜は翼を広げ、「ブイー」と鳴いた。

「笑ってる……氣に入ったのね」

シャルには仔竜の氣持ちがわかったようだ。

シャルが指で仔竜の頬ほを撫なでると、仔竜は猫のように目を細め、頬ほ擦すりりした。卵の殻を片付けながら、雷真が遠慮がちに訊く。

「シャル……おまえ、これからどうする？」

「……そんなの……わからないっ」

シャルは仔竜を抱えたまま、途方に暮れて泣き出した。

「私、どうしたらいいの……？ もうわからない……シグムント……！」

「メソメソするな、愚か者！」

いきなり怒声が聞こえ、何かが三人の前に降ってきた。

大砲が着弾したかと思う。それくらいの衝撃が屋上を揺さぶった。

頭丈な石材が割れ、瓦礫と化して階下に落ちる。幸い、下は薬品の保管庫で、怪我人はいない。後で叱られるだけだ――グリゼルダが。

となりの棟から跳んできたように見えた。一部始終を見届けていたらしく、グリゼルダは前置きもなくシャルを叱りつけた。

「人形使いが人形を失ったくらいで何だい！」

「いや……あんただって思いっきり泣いてただろ」

「黙れ！」

突っ込んだ雷真を蹴り飛ばす。屋上から放り出されそうになり、雷真は必死にフェンスにしがみついた。

雷真には見向きもせず、グリゼルダはシャルに向き直る。

「家族を護れなくて、悔しいかー」

シグルドを抱いたまま ぼろり、とシャルは涙をこぼした。

「……悔しい……ですっ」

「仇を討ちたいか！」

「討ちたい……ですー」

その途端、險しかったグリゼルダの表情がゆるんだ。

「ならば、一緒にこい」

驚くシャルに、グリゼルダは右手を差し伸べる。

「私の授業には、おまえの席も用意すると言っただろう。この私自ら、精霊術ジン・マスコリーのイロハを叩き込んでやる」

雷真が驚き、フェンスの上から問いかけた。

「あんた、使えるのか、それ。精霊術とかいうの」

「言うほど上手くはない」

「何だよー」

「精霊術は魔術ではなく魔法の一種、力量の大半は才能に依存する。だが、私にも基礎的な素養はあるし——私の〈糸〉が、シャルロットの成長を助けるだろう」

アンリには意味がわからなかった。だが、雷真は納得したようで、

「『明日から大事な仕事』って、そういう意味かよ……」

「すぐに出発するぞ。シャルロット、旅支度をしろ」

「ど、どこへ……?」

「決まっている」

グリゼルダはシャルの手を取り、引き起こしながら答えた。

「〈魔の山〉ウィルリントン・ヒルのふもと——プリュー伯爵はてしなくやしまの邸だ」





# Chapter 3

災禍の客人 まればひと



## 1

学院の正門を臨む安アパートで、高貴な身分の若者がくつろいでいた。

全身、黒一色の衣服を身につけている。仕立てはいいが、着こなしはラフ。ネクタイもつけず、シャツは胸元までだけ着ていた。

「報告します、エドマンド陛下<sup>陛下</sup>。エドガー・ブリューを見失いました」

一人の乙女が歩いてきて、びしっと敬礼を決める。

<sup>だいたい</sup>橙にも金にも見える鮮やかな髪が目<sup>め</sup>を惹く。瞳は碧玉のごとく赤い。瞳の色も髪の色も

西洋人のそれだが、鼻はそれほど高くなく、小さく整った顔つきはむしろ東洋人ふうだ。精緻なアンティークドールを思わせる、端正な容貌<sup>ようぼう</sup>だった。

軍服のような仕立ての衣装を身につけている。ただし、胸から腰までが大きく露出していて、へそも背中も丸見えだった。

乙女は感情の起伏を感じさせない、機械のような無表情で王子に言った。

「警備を壊滅させてよろしければ、追跡も可能と考えますが？」

「だめだ」

「では、薔薇の方々には「取り逃がした」と報告します。それが私の任務です」

「そうしろ」

気のない返事だ。乙女はエドマンドに近付き、警告のようにささやいた。

「薔薇の方々にはさぞや、お怒りになるでしょうね？」

「だろうな」

「陛下がひと言「やれ」とご命令くだされば、私は薔薇の方々を皆殺しにできます」

「そいつは無理だ。一人として倒せやしない」

無表情だった乙女の顔に、わずかに羞恥の色が浮かんだ。

「あくまで気持ちの問題です。私は陛下に従順だと申したいのです。私にとって唯一絶対の正解は陛下です」

「何だ？ おまえひょっとして、俺に惚れちまつてるのか？」

「はい」

桜色に頬を染め、祈るように両手の指を組む。エドマンドはあきれ顔になった。

「おまえは至高の自動人形だが、そういうところが心配だな」

「どのように改善すべきでしょうか。どうぞおっしゃってください。陛下色に染まりたく

思いま……おや、いかがされました？ 頭痛をこらえるような仕草を——もしや、お体の具合がよろしくない？ 確認いたしますので、どうぞお召し物を脱いでください」

「やめろ。何で下を脱がすんだ」

腰にまとわりつく乙女を、蹴飛ばして止める。

エドモンドはげんなりとして、ため息をついた。

「おまえのおかげで、若干、ライシンの気持ちがわかつちまったよ」

「お役に立てて嬉しく思います」

「皮肉も通じねえしな」

「皮肉……もしや、私はまたうざい感じになっておりますか？」

「ああ、うぜえ。そんなことより、こいつは賭けだぜ——聞いてるか？」

「き、聞いております……っ」

涙ぐみつつ、やはり無表情でうなずく。エドモンドは気を取り直して、

「伯爵が持ち出したあれを、作戦実行前に奪われちましたら、終わりだ」

「……学院の手に渡してはならないと？」

「ラザフォードだけじゃない。協会の夫どもや、他国の連中に渡るのもまずい。そして、

もつとも警戒すべきは（金色のオルガ）だ」

「え……オルガ・サラディーンですか？ 学生総代の？」

「ああ、なかなかイイ女だとは思っていたが——おい、どこに行く？」

「陛下がひと言『やれ』とご命令くだされば、私はその女を抹殺——」

「するな。どこまで面倒くせえんだ、おまえは」

「面倒……っ？」がーん！

「オルガの素性を知ったときは驚いたぜ。まさかあいつが金薔薇さまのご息女でいらしたとはな。素性を隠して夜会に潜入とは恐れ入る」

「ですが、金薔薇さまのご息女なら、結社の同志です。エドガー・ブリューが奪ったものは、オルガに回収させればよろしいかと」

「教父の予見は知っているか？」

乙女は困惑したが、すらすらと暗唱する。

「『七の七倍の夜、六つの種が芽吹くとき、人が神の名代となる。其は完全なる玉の如し。はじめに権威が覆り、異邦人を受け入れる。次いで支配のくびきが解かれ、浄化の歌が都に満ちる。やがて星の雨が降り、天地開闢の先触れとなる。ついに子どもはきたり、天の玉座に君臨す——彼の者を見よ、そのかたわらに神性機巧あり』」

エドマンドは皮肉めいた笑みを頬に刻み、くさすように言った。

「時系列は不明瞭で、よくわからない比喩ばかりだ。どうしても解釈できるな」

「一応、解釈が固定化されている部分もあります」

「そう、たとえば『七の七倍の夜』——聖書でよく見る表現だが、これは第四九回、すなわち今回の夜会だ。すると、後段の『天の玉座』ってのは魔王」

「逆に、解釈が割れているのは『子ども』が誰かという点ですね」

「セト家の出身なら、オルガも『異邦人』と言えるな」

「オルガを潜入させたのは、金薔薇さまの野心だと……？」

「ほかのババアを出し抜いて、神性機巧の秘密を独占できりや、結社を掌握できる」

エドマンドは楽しげに肩を揺すった。

「いいねえ、実にいい。野心のある奴は嫌いじゃない——考えが読めるからな。こいつをネタにババアどもを揺さぶって、内部抗争を誘うのも一興だ」

「……よくわかりません。一体、陛下は何をお考えなのですか？」

乙女の顔に緊張がにじむ。エドマンドはそれには答えず、

「ひとつ、俺も予言してやろう。三日後、俺はこの国の玉座に座ってるぜ」

「——それは、さすがに」

「できるとも。天は俺を帝王にしたいのさ。なぜなら、俺が帝王に相応しいから」

乙女はうつとりとエドマンドを見つめ、熱っぽくつぶやいた。

「ついて行きます、陛下。私は陛下に永遠の忠誠を捧げる覚悟です」

「ああ。それなりに期待してるぜ」

「ご存分にご期待ください。それで、エドガー・ブリューの方は？」

「何もしなくていい。放はなつておいても、俺の思い通りになる」

「実に頼もしいお言葉です。濡ぬれます！」

「濡らすな。離めくせえ」

乙女が涙ぐむ。エドマンドはあくびを喃み殺し、カーテンを閉めた。

「腹も減ったし、飯を食いに行くか。おまえもくるか、七號？」

「地の果てまでもお供いたします。たとえ陛下の寝室であろうとも」

「やっぱ、おまえは留守番だ」

乙女はめそと泣いて、小走りにエドマンドの後を追った。

その乙女の背中、腰骨の上あたりに――

墨で書いたように黒く、『花柳からやうしゅ斎』の銘が刺青いれずみされていた。

## 2

午前八時。学院の（ゲート）前で、シャルは雷真らいしんと日輪ひあわの見送りを受けていた。

「シャル……本当に大丈夫か？」

心配しているのか。雷真は何度もシャルの顔をうかがう。

「ちゃんと朝飯食ったのか？ 風邪ひいてねえか？ 腹痛とか——」

「平気よ。お父さまみたいなこと言わないで」

シャルは強がつてそつぽを向く。本当は、雷真らいしんの気遣いがとても嬉うれしかった。

「心配はいらん。シャルロットには私がついている」

グリゼルダが力強く言う。雷真はかえつて不安そうな顔をした。

「大体、シグルドを連れて行つていいのか？ 学生所有がくせいしゆりうの自動人形オトマツドシだぞ？」

「シグルドはまだ、シャルロットの人形として登録されていない」

「そりゃ、理屈りくつだけだよ。それつて、かなりグレーじゃねえか？」

「法の世界は理屈が正義だ。……そういう抜け道があると、教えてくれた人がいる」

——おそらくキンバリーだろう。学院の事情に明るく、ブリュー姉妹を気にかけてくれる大人おとなは、もうキンバリーしかないない。

「それに、今回は私が引率だ。警備もとやかく言うまいよ」

頭上を示す。〈ゲート〉上の警備は、こちらの視線に気付くと、銃を担いで銃礼した。

攻撃の意志はまったくない。

グリゼルダは白い機械天使二体を従え、先に立つてゲートをくぐった。

「行くぞ、シャルロット。モタモタするな」

「はい——」

「あ、あのー シャルロットさま……」

日輪ひろが何かを言いかけたが、途中でやめて、たぶん予定とは別のことを言った。

「……どうか、お氣をつけて」

「ええ。ありがとう」

シャルは微笑ほほえんで応える。シグルドがシャルの真似まねをして、「ビビー」と鳴いた。

雀すずめのような鳴き声を聞いて、夜々ややがつらそうに顔を背けた。シャルの目頭も熱くなる。

シャルは帽子で目を隠し、その上にシグルドをのせ、〈ゲート〉をくぐった。

駅前通りに差しかかったところで、グリゼルダが足を止めた。

進行方向の路上に、着物姿の艶あややかな女性が二人、並んで立っている。

花柳斎硝子からやうさいしょうこと、夜々の姉いろりだ。

硝子は艶然えんぜんと微笑み、グリゼルダに会釈した。

「ごきげんよう、ウェストン先生。坊やがいつもお世話になっているわ」

「……カリューサイ女史とお見受けする。貴女あなたとはぜひ一度、ゆっくり話したいと思っ

た。しかし、今は急ぎの身の上――すまないが、今日のところは」

すり抜けようとするグリゼルダの進路を、いろりがさり気なく阻む。

二体の機械天使が警戒し、臨戦態勢になった。

「お時間は取らせないわ。私も人形師として、中途半端な仕事はしたくないだけ」



硝子は穏やかに笑って、シャルの方に近付いてきた。匂い立つ……とでも言えいいのか、大輪の薔薇を思わせる美貌は、間近で見ると凄い迫力だ。

硝子は眼帯のレンズをいじり、シグルドをつぶさに観察した。

「……さすがは〈魔剣〉が遺した子ね。オリジナルは金属パーツも使われていたけれど、こちらは全身が有機体——より生物に近付き、魔力親和性が増している。ただし、禁忌の生体部品は失われてしまい、禁忌人形としての性能は大幅に低下しているわ。これまでのような使い方はできそうにないわね」

シャルはむかつとした。そんなふうに、品定めされるのは不愉快だ。

恨み言のひとつも言いたくなる。だが、シャルがそんな愚を犯す前に、

「起動テストをしてみましょう」

「——え？」

「忘れたの？ その子の心臓は私があげた特別製。魔剣に順応できたかどうか、確かめてみなくちゃ。もう誰も失いたくないでしょう？」

シャルは唇を噛み、右腕を胸の高さに持ち上げた。

シグルドは帽子の上から動かず、小鳥のように首を傾げた。

……シグムントなら、すぐに腕に飛び移ってくれた。そもそも、この手順を教えてくれたのはシグムントだ。

もう、俺はシャルを導いてはくれない。

これからは、シャルが俺を導き、育まねばならないのだ――

「いい、シグルド？ 私がこうしたら、貴方は腕にとまるのよ」

優しく言いながら、魔力で《強制支配》して、シグルドを腕にとまらせる。

初めて支配される感覚に、シグルドは気持ち悪そうに身をよじった。だが、逆らうことはしない。子が母を慕うように、シャルを信頼している。

「そうよ。いい子ね」

優しく笑いかけると、「ビー」と鳴いて、誇らしげに首を上げた。

いろりが不憫そうにシャルを見る。一方の硝子は表情を変えず、上空を指差した。

「さあ、お得意の魔剣を撃ってごらんなさい。ただし、空に向けてね」

シャルは左手でシグルドの背に手を触れ、手渡しで魔力を渡した。

回路を手動で制御し、慎重に減元素を生成させる。それを蓄え、流れを作り、シグルドの体内でぐるぐる回転させ、少しずつ加速させていく。

シグルドが気持ちよさそうに身震いする。その首を斜め上に向かせ――

「ラストーカノン」

その瞬間、空気が裂けた。

いろりが目をみはり、グリゼルダが反射的に身構える。

凄まじい閃光と衝撃が雲を吹き飛ばし、ドーナツ状の輪ができた。

シャルは杲然と空を見上げた。手加減して撃ったはずの一発が、かつて学院の時計塔を破壊したときのような、大威力を示した。

くらつとめまいがして、バランスが崩れる。

前のめりに倒れそうになるのを、硝子の豊かな胸が受け止めてくれた。

圧倒的なポリウムに言いようなない劣等感を覚えながら、その温かき、やわらかき、優しい匂いに安らいでしまう。

硝子は目を細め、そつとシャルの髪を撫でた。

「魔剣は無事に受け継がれたようね」

「今のは……一体……？」

「私が提供した心臓は、そこらの量産品とは格が違うのよ。花柳斎ブランドの特別製——夜々や、このいろりと同じもの」

雪月花に使っているものと同じ——これほどの性能差があるのか。

「つまり、この仔竜は私とシグムントの合作ね。今までよりもじやじや馬だから、魔力の配分には気をつけなさい。気を抜くと、力を食い尽くされるわよ」

言うだけ言うと、そつてなく身を離し、立ち去ろうとする。

シャルはあわてて、遠さかる背中を叫んだ。



「あの、ありがとう！」

「——おれなら、あの忠実な竜に言うことね」

ほんの一瞬、硝子の声に感情が宿ったような気がした。

からんころんと下駄を鳴らし、いろりを連れて去って行く。

「ふむ……何とも不思議な女性だな。人とも思えぬ……まるで神仙のような」

グリゼルダが感想を漏らす。それから、駅舎の方を向き直った。

「行こう。今は一分一秒が惜しい」

「はい……。でも、なぜ私の家に？ あれはもう政府の土地ですけど……」

「おまえが捨てたものを取り戻しに行く」

シャルははっとした。

グリゼルダは知っているのか。シャルの心に残る傷痕、わだかまりの正体を？

胸が苦しくなり、シャルの足取りが重くなる。だが、グリゼルダは構わず、どんどん先に行ってしまう。

シグルドが「ピ？」と鳴いて、不思議そうにシャルを見上げた。

「……大丈夫よ。行きましょう」

シャルは再びシグルドを帽子にのせ、グリゼルダを追って歩き始めた。

## 3

シャルの出發を、雷真は（ゲート）の手前で見送った。  
背後で、ぐすつ、と日輪が鼻を鳴らす。

「どうした、日輪」

「……シャルロットさまは、こんなわたくしをお友達だと言ってくださいました。なのに、わからないんです。こんなとき、どんな言葉をかけて差し上げればいいのか」

「伝わってるさ、おまえの気持ちには」

「でもー わたくしが……っ」

ぼろっと涙のしずくが落ちる。日輪はあわてて涙をぬぐった。

「す、すみません！ 自分が嫌になります……。こうなったのは全部、わたくしのせいなのに……わたくししたら、泣けば許されるとでも思ってるみたい……っ」

「阿呆。そんな誰（だれ）も思（おも）ってへんわ」

木立（きだち）で昂（たけなす）の声（こゑ）がする。病衣姿（びやくさ）の昂（たけなす）と六連（むつれん）が、松葉杖（まつばづえ）をついて立（た）っていた。

「おまえがどんな気持ちか、皆さん——ボケ雷真（かみなりまこと）かて——わーつとるがな」

「昂（たけなす）の言う通りだ。それに、シグムントのことはおまえのせいじゃない。俺（おれ）が——」

「こんの……ド阿呆（おほう）がああああ！」

雷真かみまの言葉をさへきつて、昂さかが松葉杖まつばづえを投げつけてくる。心身ともに弱っている雷真はかわすことも防ぐこともできず、杖づえは後頭部を直撃した。

「済んだことをグダグダグダグダ……何犯人探ししとんのやー 辛気臭しんきくさいわー」

「まーまー昂、そう興奮しなはんな。傷聞きますよ。ほしたら、夜会に参戦できひん」  
六連むつれんが取り成すように言う。雷真は驚いて、

「昂……出でくれるのか？」

「おまえのためちやうわー 俺おれが降格枠かくかく使つかおて、その上で戦闘サボれば、シヤルロフトちやんが今夜の（最上位）ゆうことになるやろ？」

「シヤルには戦場待機義務がなく——欠席しても参加資格が維持できる？」

「そういうこっちゃ。……ま、今夜だけはな」

明日になれば、さらに上位の者が参戦してくる。その者が舞台に姿を見れば、昂にもシヤルにも戦場待機義務が生じる。サボり続けることはできない。

黙り込む雷真を氣遣ったのか、昂はぶっきらぼうに言った。

「心配すな。昨夜のことはお嬢が執行部に報告済みや」

「——そうなのか？」

日輪ひかりは赤い目を伏ふせ、うなずいた。

「ゼカルロスさまの妨害工作はお伝えしました。専門の教授が証拠を鑑定中とのことです。

詳細が明らかになれば、団体戦の取り決めは無効になるかと……」

「案外、オルガ嬢ちゃんの失格でケリつくかもわからんぞ」

「……そうは思えねえけどな」

学院がどこまで信用できるかわからない。オルガは学生総代で、アリスともつながりがあるようだ。ひょっとしたら、学院長の駒こまという可能性もある。

やはり、シャルには一刻も早く帰ってきて欲しい。

「シャルの家って、どのくらい離れてるんだ？ 夜々、知ってるか？」

「あ……アンリさんに聞いた話だと、鉄道と馬車で八時間以上かかるそうです」

「……けっこう遠いな」

だが、信じて待つしかない。

ひとまず、半べそ状態の日輪を鼻に任せ、雷真は夜々と二人、寮に戻った。今さらのように疲れを感じる。夜会の前に、少しでも回復しておきたい。

「あの、雷真……シャルロットさんの代わりに、夜々が戦うわけには……？」

ストリートを歩いているとき、夜々が言いくそうに言った。

「先に卑劣な手段に訴えたのはあちらですし、この際、夜々がオルガさんと……」

「駄目だ」

雷真は爪が食い込むくらい、きつくこぶしを握りしめた。



夜々の言う通り、代わりに戦ってやれたら、どんなにいいだろう。

だが――

「シャルの誇りを守れなければ、プリューの名は死んだも同じだ」

これはシャルの戦いだ。シャルロット・プリューという魔術師が、一流となるか、二流で終わるかの正念場と言っている。

「シャルは必ず戻ってくる。うんと強くなつてな。だから、信じて待つんだ」

「わかりました……って、雷真？ どうしたんですか!?」

不思議そうな夜々の顔が、ぐるりと横に倒れた。

――違う。横になつたのは雷真の方だ。

気がつくとき、雷真は石畳の上に突っ伏していた。

「しっかりしてください！ 怪我ですか!? 病気ですか!?」

「悪い、夜々……少し……」

「少しっ？ 少し、何ですかっ？」

「……寝る」

すう、と意識が遠のく。抗う術もなく、雷真は眠りの世界に落ちていった。

「……で、何なんだ、この惨状は？」

雷真が目覚めたとき、目の前はひといりさまだった。

夜々が運んでくれたのか、寮の自室で自分のベッドに寝かされている。シーツは乱れ、床には洗面器やらヤカンやらが散乱し、びっしり濡ぬれていた。

その真ん中で、夜々と日輪ひるわが涙目でにらみ合っている。

夜々も日輪も下着姿。素肌があらわになっている。

勝手に平たいと想像していた日輪の胸は、カップブケーキくらいの大きさだった。

初めて見る日輪の肌には、思わず鼻血を噴きそうになる。下着は洋装なのに、足袋は履いたまま——というのが何とも妙な按配あんばいだ。

「何で二人そろって半裸……いや、四分の三裸か？ とにかく服を着ろ！」

「聞いてください雷真！ この女狐めうつぎが、夜々の懸命な介抱を邪魔するんです！」

「違います雷真さま！ このどろぼう猫が、ぜ、ぜ、全裸で雷真さまに添い寝するなどと言いつたので——」

「おまえも対抗して脱いだのか！ ここは男子寮だぞ！」

散らかり具合から推察するに、どちらが雷真を介抱するかでモメたらしい。

二人がケンカしていたのに、目覚めなかった自分にあきれる。殺気を感じれば目が醒さめる、というのが取り柄なのだが、よほど疲労していたようだ。

おかげで疲れが取れた。本調子にはほど遠いが、魔力も半分くらい戻っている。何とか



今夜の夜会くらいはしのげそうだ。

「今何時だよ——つて、もう夕方じゃねーか！」

窓の外が暗い。夜々と日輪もはっとして、にらめっこを中断した。

「ええっと……今、五時半ですー」

「すぐに支度だ。俺たちには待機義務がある」

「はい！」『では、後ほどー』

夜々が片付けを始め、日輪も急いで着物を羽織り、帯も締めずに部屋を出て行く。

雷真も部屋を出て、眠気覚ましにシャワーを浴びた。

その後、食堂でサラミを焼いてもらって、パンに挟んでかぶりついた。

腹ペコだったせいも、そんな食事が無性に美味しい。ばくばくと三つほど胃に詰め込んで、交戦フィールドのコロセウムへと向かった。

コロセウムに続く林道を早足で進む。

途中、予想外の者に出くわした。

屋外灯の下に、貴婦人然とした女子学生が立っている。

コルセツトとパニエで作った大時代的なシルエツト。豪華絢爛な盛り髪と、苦しそうな谷間が恐ろしく目立つ。堅牢な金属の関節を持つ、単眼の機械人形を三体も従えている。

淑女と巨人の取り合わせは、一種異様な光景だ。

ソーネチカ・スニートキナ。(女帝)とあだ名される乙女だった。

「こちらへおいでなさい、(下から二番目)」

扇で雷真を手招く。自分からは寄ってこない。まさしく(女帝)の風格だ。

「学内に(暴竜)の姿が見えませんか。どうなりましたの？」

「——その前に、昨日は助かった。シャルをかばってくれて、ありがとう」

「質問に答えなさい。逃げた——とは思いたくないけれど」

「逃げちゃいない。シャルは必ず戻ってくる」

いささかの迷いもなく言い切る。力強い言葉に、雷真自身が驚いた。

どうやら自分は、シャルを信じているらしい。

その気持ちはソーネチカにも伝わったようだ。

ソーネチカはそれ以上の追及をやめ、すつと足もとに視線を落とした。

「オルガは……このわたくしが敵と認めた女です。オルガを上回る女はわたくしでなければなりません。わたくしはオルガをくだし、名実ともに(女帝)——最も優れた女であると証明するつもりでした」

言っているうちに感情が昂ぶったのか、ぐしゃっと扇を握りつぶす。

「その想いを、踏みにじられた！」

気性が激しい。彼女の怒りに呼応して、魔力の炎が噴き上がった。

「魔剣は戦略的のみならず、文化財としても価値のある自動人形。それをオルガは野人のように破壊した——いいえ、それはまだ許せます。許せないのは（魔姫）を陥れた姦策ですわ。イザナギのプリンセスは、わたくしの第二の敵でしたのに！」

「……敵、多いな」

「オルガがあんな……下策な手段に訴えるなど……」

急に勢いを失くす。ソーネチカはかなげに瞳を揺らし、切なげに雷真を見た。

「わたくしの絶望がおわかりになる？」

「……少しなら」

「まあ、それはまことですか？」

「俺も……心の底から尊敬していた人間に、裏切られたことがある」

ソーネチカの雷真を見る目が変わった。

ようやく焦点が合ったような感じだ。じっと瞳をのぞき込んでくる。

そうして間近で見つめられると、吸い込まれそうな瞳だった。なるほど、（女帝）と呼ばれる者は、尊大なばかりではなく、人を惹きつける魅力がある。

「貴方も、苦勞をされましたのね」

「……ま、人並みにな」

「貴方の武勇は聞こえていましたよ。機巧都市を叛逆の王子から救ったことも、憎き独国

から我が知己アリスを護つたことも」

雷真はむずがゆくなつて、軽口を叩くように言った。

「日露戦争で負けたつてのに、黄色い肌の日本人を評価してくれるのか？」

「肌の色などどうでもいい。人間はその才覚によってのみ評価されるべきです」

清々しいくらい、はつきりと言う。

「そもそも日露戦争は露国の敗北ではありません。内政に専念すべく、エサを与えて一時的に講和しただけですわ。貴方の勘違いは恥をかきますことよ？」

「それでこそ、北の大熊つてもんだ」

お互いに笑みがこぼれる。打ち解けたような空気が漂う中、夜々の周辺だけが暗黒星雲に包まれていた。

ソーネチカの紅い唇が、美しい三日月の形を描いた。

「わたくし、オルガに幻滅しました。ですから、オルガを倒す役、《暴竜》に譲って差し上げておかまいませんかとよ」

「手を貸してくれるのか？」

「わたくしは誰にも与しません。ですが、邪魔する者にはにらみを利かせていましょう。結果的に、貴方たちの助けとなるかも知れませんわね」

そつと扇で口元を隠し、小さく腰を折る。

「では、ご機嫌よう」

パニエでふくらませたスカートを持ち上げ、貴婦人のごとき足取りでコロセウムに向かう。その堂々たる歩みに、機械の巨人三体が親衛隊のごとくつき従った。

去って行くソーネチカを、雷真は爽やかな気分で見送った。

「付き合いにくい奴かと思つたが、話してみると、なかなかイイ女だな」

「雷真……いい加減、その好色の虫を圧殺しませんと……危険ですよ……ふふふ」

「そんな虫は飼つてないーつか、危険なのはおまえだー」

「絶対飼つてますー 養殖してますー」

しがみついてくる夜々をいなしつつ、雷真もコロセウムに向かった。

## 4

コロセウムには、大観衆が詰めかけていた。

半壊した塔（ジツグラト）は昨夜のまま残されている。アスラ一派は既に集まっていて、彼らとは塔を挟んだ反対側に、ロキとフレイ、日輪、六連が待機していた。

先ほどの宣言通り、ソーネチカがアスラ一派をにらんでいる。

昨夜の決着がどうなるのか。観客が固唾をのんで見守る中、主役のオルガがやってきた。



連れてくるのはただ一人、死霊使いのドロシーだけだ。

「今夜は二人しかいませんね？」

夜々がつぶやく。フレイがうなずき、ひそひそと雷真にささやいた。

「ゼカルロス兄弟とセドリツクは、登録が抹消されてた……」

「マジか。なら、オルガが強攻してくる可能性は低いな」

数で言えば五対二になる。正面からぶつかれば、こちらが有利だ。

だが、オルガは隠した様子もなく、堂々と歩いてきて、雷真に言った。

「シャルロットはどうした？」

「オルガお姉さまに怖れをなして、故郷に逃げ帰ったってわけ？」

ドロシーが嘲笑う。シャルが学外に出たことは知っているらしい。

「家族が死んだんだぜ？ 里帰りくらい、したっていいだろ」

「では、我が方の勝ち——ということでもいいのか？」

「いいや、勝つのは俺たちだ」

「……数を頼みに我らを倒すつもりか。それもいいだろう」

「そんなことはしない。あんたを倒すのはシャルだ」

オルガが眉をひそめた。一瞬、意味がわからなかったらしい。

「戻ってくる……と言うのか？」

「もちろんだ。そしてシャルは、あんたに勝つ」

「……君も同じ意見か、ソーネチカ？」

舞台の端に視線をやる。ソーネチカはオルガを見据え、冷ややかに応えた。

「わたくしは勝負を預かると言いました。これはシャルロットと貴女の勝負ですわ」

「オルガお姉さま。こんなドグサレ連中、私が――」

「いや。待とう」

あつさり了承する。客席にも聞こえたのか、観客たちがざわめいた。

「だが、長くは待てない。最後の夜は、もうすぐだ」

「大丈夫、シャルは気が短いんだ。すぐに戻ってきて、あんたをぶっ飛ばすさ」

「楽しみにしておこう」

オルガは背を向け、舞台のすみに下がった。

――結局、その夜は戦闘にならなかった。

一時間を過ぎたあたりでオルガが去り、アスラ一派も順次舞台を降りて行った。無論、雷真たちもそれにならう。ほどなくして、舞台上には誰もいなくなつた。

舞台を降りると、雷真は仲間たちと別れ、寮に急いだ。

さっさとベッドに潜り込み、体力と魔力を回復させなければならぬ。

トータス寮に続く林の小道。その中ほどで、おかしい気配に気がついた。

林の中で、誰かが苦痛にあえいでいる。

結社の連中だろうか。厄介事はごめんだが、敵を放置するわけにもいかない。わざと足音を立てて、そちらに近付く。だが、相手は逃げようともしない。

不審に思いつながらのぞき込むと、草むらに男が横たわっていた。

年の頃は四十かそこら。手足の長い、すらりとした男性だ。

大切なものを隠すように、左手で右手をかばっている。

(……右は義手か？ 魔力の流れが少し違うな)

男は疲労しているようだ。まぶたは重たげで、目は落ち窪み、無精ひげを生やしている。そんなみすばらしい状態でも、顔立ちはどこか高貴だった。

魔力の波長が誰かに似ている。瓜二つと言ってもいいほどに。

「——あんたは、まさか」

雷真はほぼ本能で、新たな厄介事の到来を悟った。

## 5

それからわずか一五分後、雷真は再び夜道を駆けていた。

アンリの手を引いて、グリフォン女子寮からトータス男子寮へとひた走る。

「ライシンさん！ 今のお話、本当なんですかつ？」

「それを今から確かめるんだ」

林の小道に飛び込む。刹那、足もとを黒い影がかすめた。

「きゃっ……ライシンさん！ 黒い——変な生き物がいますー」

「大丈夫、日輪の式神だ。出入りを見張ってもらってる」

「見張り？ どうして見張りなんか……？」

「寮が襲撃されるかもしれない」

「え……それって、どういう意味……ですか？」

「俺の直感だけだな。あのオッサン、口が重くてよ……詳しい話はこれからだ」  
話しているうちに、寮の真下に到着した。

エントランスには向かわず、寮の裏手に回り込む。

自分の部屋を見上げると、ちょうど、夜々が窓を開けてくれたところだった。金剛力の魔術を自分にかけ、アンリを抱き上げて、一気に四階まで跳躍する。

空中でアンリを夜々に渡し、自身も窓枠にしがみついて、窓から自室に入った。ベッドに座っている男を見て、アンリは飛び上がった。

「お父さま！」

さすがにシラを切るのは無理と判断したか、男は観念した様子で微笑んだ。

「綺麗きれいになったね、アンリ。見違えたよ」

アンリは涙ぐみ、たまらなくなったように、男の胸に飛び込んだ。

男の胸でむせび泣く。溜たまめ込んでいたものを吐き出すように。

親子が抱き合う姿を見て、雷真らいしんの視界がぼやけた。

この光景を、シグムントにも見せてやりたかった。

たったひと晩だ。たったひと晩、シグムントの死が遅れていたなら――

……いや、今は感傷に浸っているときではない。

雷真は窓際に立ち、外の様子をうかがいながら、男をにらんだ。

「やっぱりあんた、エドガー・ブリュー伯爵はげしきだったんだな」

「……すまない。名乗れば必ず、迷惑がかかる」

「今さらだぜ、まったく」

直接的ではないにしろ、『迷惑』をかけられたのは、これが初めてではない。

陸上戦艦ダイダロス――あの飛行艦艇を設計したのが、この男だ。エドマンドが遅れていた自動人形イカロスも、元は伯爵のコレクションだと聞いている。

エドガーは雷真を見て、低い声で言った。

「今度はこちらが言い当てよう。君がライシン・アカバnekんだね？」

「……俺おれも有名になったもんだ。なぜ知ってる？」

「私は（結社）の人間だからだ」

夜々が反射的に身構える。雷真も警戒を強め、油断なく注意を向けた。

「バカ王子のバックにいるっていう、あれか？」

「そうだ。君の情報も回ってきたよ。マークすべき対象としてね」

「……ま、そんなところだろうと思ったよ」

「雷真——最初から疑ってたんですかっ？」

夜々がぎょっとする。雷真はうなずいた。

「プリュー家没落の原因を作ったのはバカ王子だ。でもって、オルガは魔剣を持っている。プリューと結社、そして魔剣は、いかにも因縁がありそうだろ？」

「……なるほど。噂通り勘がいい」

エドガーが感心したように言う。雷真は矢継ぎ早に訊いた。

「結社ってのは何だ？ 指導者は誰だ？ 目的は？」

「魔術結社（薔薇の師団）。その目的は、権力の抑止だ」

雷真にはピンとこない名前だったが、アンリは両手で口を押さえた。

「ほんとう……なの？ それって、ドラゴンとかと同じ、伝説上の……」

「魔の山にドラゴンはいただろう？ 同じことだよ」

エドガーは優しくアンリの頭を撫で、雷真にもわかるように言った。

「存在が明るみに出たのは中世末期だが、設立は約二千年前に遡る。機巧魔術よりよほど古い——最古の魔術結社と言えるだろう。そもそもはネロ皇帝の弾圧を逃れるため、地下に潜ったキリスト教徒の集まりだったと言われている」

「……途方もねえ話だな」

赤羽一門の成立よりよほど古い。雷真には想像もできない大昔だ。

「彼らは怪しげな秘術を実践し、のちの魔術世界の礎を作った。初期にはローマ、中期にはカトリック教会、後期にはハプスブルク家の支配を脅かし、今は——」

言葉を切る。ややあつて、エドガーは冷え切った声で言った。

「列強の支配に対抗しようとしている」

「……全然わかんねえな。それと、回答がひとつ抜けてるぜ。指導者は誰だ？」

「いない。議決権を持つ幹部は《薔薇》と呼ばれ、実在が確認できただけでも十数人いる。その大半は、私も顔を見たことがない」

「ちょ——ちよつと待ってください！」

混乱した様子で、夜々が割り込んできた。

「話が見えません！ 王子さまが結社の人でエドガーさんも結社の人なら、お二人は味方のはず……それがどうして、爵位を剥奪されるようなことに？」

シャルが学院に入る前、皇太子に重傷を負わせたかどで、ブリュー家は爵位を剥奪され、

一家離散の憂き目を見ている。

「あれは殿下の狂言だ。私を結社に引き入れるためのね」

「――1?」

「殿下は自らアルフレッドを支配して、自分に重傷を負わせたんだ。国を追われた私が生きて行く道は結社の軍門にくだるしかない」

放心するアンリを左腕で抱き寄せ、エドガーはすまなそうに言った。

「君のせいじゃないんだよ、アンリ。もっと早くに伝えられていればよかったんだが……このことで、君がどれだけ苦しんだか」

「ああ、そうだ。アンリは、それを苦にして飛び降りたんだからな」

「空気を読んでください雷真！ 事実を歪曲わい曲してますし、今そのお話は……っ」

全然言い足りなかったが、雷真は自制して、先をうながした。

「エドマンドの狂言ってのは、どういう意味だ？」

「結社の命令を受け、私たちを陥れたんだ。大事なお世継ぎに重傷を負わせたとなれば、事故調査が入る。その調査官に殿下の息がかかっていれば……どうだね？」

「――一国の王子が、ガキの頃ころから、あんな組織に入ってたってのか？」

「英国と結社は縁が深いんだ。新教徒たちがカトリックと争っていたとき、イギリス国教会の庇護ひごを受け、旧教支配に抵抗しようとした歴史がある」



違ふ。雷真が疑問に思つたのは、そんなことではない。

エドマンドの考えていることが、存在が理解できないのだ。

結社は明らかに反政府組織だ。列強国の王子に生まれた者が、なぜそんな連中に与してゐるのか。黙つていれば、いずれ玉座は手に入る。

そもそも、やり方が狂気じみている。自分に重傷を負わせるなんて……。

正直、気味が悪い。だが、雷真は無理やり気持ちを切り替え、話を戻した。

「結社の目的——『列強の支配に対抗』ってのは、どういう意味だ？」

「言葉通りの意味だよ。今は世界大戦の回避を目的としている」

「……可能なのか？ そんな、歴史の流れを変えるようなことが？」

「彼らはできると考えている。そもそも、彼らはその設立当初から、権力の制御を試み、実際にそうしてきた。権力の暴走を止める——それが彼らの正義だ」

「それは、政治を裏から牛耳るって意味だよな？」

皮肉のつもりで言つた言葉に、エドガーはあつさりうなずいた。

「……そうかよ。おかげでよくわかつたぜ。連中が気に食わないってことがな」

ざわざわと首筋に悪寒が走り、怒気が勝手に立ちのぼる。

「日輪は殺されかけた。俺の師匠は……可愛がつていた人形を殺された。シャルもアンリも、友達の子も結社には泣かされてんだ。正義のためなら女も子供も平気で泣かす——」

殺す。そんな正義なら、俺はそれを否定する」

「ああ。私も同じ意見だ」

意外な言葉だったが、それは同時に、腑に落ちる言葉でもあった。

「そうか……それで、あんた……逃げてきたのか」

「ほとほと嫌気が差してね。あんなやり方で世界平和が護れるものか」

アンリが恐る恐る、父の上着をつかんだ。

「お父さま……逃げてきたって、大丈夫……？」

「しばらくはね。今は彼らも、私や君、シャルに危害を加えるわけにはいかない——そういう理由があるんだよ。切り札はこちらが握っている」

「それは何だ？ 今も持ってるのか？」

エドガーは口をつぐんだ。……明かすつもりはないようだ。

「そんなものを持つてるなら、それを材料に学院と取り引きを——」

「駄目だ。エドワード・ラザフォードは野心ある男。あの男の手に渡れば、結社の代わりにあの男が利用する。それだけの話だよ」

「なら、協会の庇護を求めるってのは？」

「それも、駄目だ。彼らは知識に対しては貪欲なんだ。教会が禁忌に指定した研究さえ、魔王の免状があれば平気で踏み込めるだろう？ それに……」

エドガーは声の調子を変え、おそらく、言いかけたこととは別のことを言った。

「ともかく、私には追っ手がかかっている。すぐにも出発しなくては」

「ご心配なく。ここは、わたくしの式が護つております」

突然、この場にはいないはずの少女の聲が割り込んできた。

床に黒い水たまりのようなものができ、その中から、すうっと日輪が現れる。

「いざなぎ流は西洋魔術とは少々系統が違います。相手が本当に《薔薇の師団》で、凄腕の魔術師ぞろいだとしても、容易には対抗魔術が用意できないでしょう。外部からの接近はわたくしが確実に察知できます」

エドガーが目を見開き、興味深そうに式神と日輪とを見比べた。

「見たことのない——実に見事な魔術だね。こちらのお嬢さんは？」

「申し遅れました。わたくしは雷真さまの妻、土門日輪と申します」

「そ、そのネタを横取りするなんて……この女狐……っ」

夜々が涙ぐみ、両手を振り上げて怒る。

「雷真の妻は夜々です！ 肉体の先住権を主張します！」

「では、日輪は魂の領有権を主張します！」

「騒ぐな二人とも。また、となりにどやされるぞ」

そう注意した途端、タイミングをはかったように、どんと壁が揺れた。

「ほらみろ！ また壁ドンされて——」

強烈な殺気を感じ、雷真は壁から飛び退いた。

いきなり壁が砕け、気だるげな男子学生が突っ込んでくる。

右腕に黒く輝く手甲をはめ、背後には甲冑のような自動人形を従えている。自動人形には右腕がなく、察するに、人形の右腕が使い手に装着されているようだ。

「……うるせえんだよ、毎晩毎晩。安眠妨害だぜ、この野郎」

「わ、悪かった。だが、何も壁を壊すことはねーだろ。口で言ってくれれば——」

問答無用で、こぶしが雷真の横っ面に炸裂した。

金剛力を起動したのに、踏ん張りがきかず、反対側の壁に叩きつけられた。

「雷真!? 今助けますー」

「違う……! こいつの狙いは……俺じゃない……!」

今になって、雷真は己の失敗を悟った。

確かに、日輪の結界は優秀だ。外部からの接近を見逃さないだろう。

だが——初めから内部にいたなら?

「親父さんを護れ! こいつが追っ手だ!」

叫んだときにはもう、襲撃者はエドガーに飛びかかっていた。



## Chapter 4

### 妖精の庭で



#### 1

学院きつての天才マグナスには、専用の工房が与えられていた。

作業場のみならず、書齋兼リビングも与えられている。ソファやテーブル、暖炉が設置され、壁の棚には機巧材料やマテリアル、書籍が整然と収納されている。

そのリビングで、マグナスは古びた本を読んでいた。書名は『デ・オルガナムに関する所見』とあり、どうやら禁書の注釈書のようなだ。

火垂<sup>はたき</sup>はしばらく無言で控えていたが、やがて意を決し、主<sup>あそび</sup>の前に進み出た。

「マスター」

マグナスはページに目を落としたまま、顔も上げずに「何だ？」と応<sup>こた</sup>えた。

「質問があります。なぜ、あの男にこだわるのですか？」

「……（下<sup>セカンドラウンド</sup>から二番目）のことを言っているのか？」

「イエス、マスター。我らはあの男の詳細を知らされてはおりません」

「計画に必要なからだ。紅翼陣が完成しなければ、俺の計画は頓挫する」

「ですが、その奥義ならば、マスターが……」

それ以上を語る気はないのか、マグナスは黙って読書を続けている。

火垂は思わず眉をひそめ——そんな自分に愕然とした。

この私が、マスターに不満を抱いている？

（あの男に嫉妬……？ 馬鹿な！）

思い浮かんだ単語を否定する。自分は自動人形、術者を募るのは自然だが、嫉妬となる  
と行き過ぎだ。そんな感情を抱くのは間違っている。

「質問を重ねることをお許しください。我らは〈計画〉の全容も知りません」

「その通りです。我らは何のために、何を目的として存在するのですか？」

背後から別の声が割り込む。姉妹の一体、蜜蜂だった。その後ろから、玉虫や姫蜘蛛も  
ぞろぞろと姿を見せる。

「私にも教えてくださいマスター」「なぜ、我らを用意されたのですか？」

「神を造るためだ」

「——神とは？」「神性機巧と考へてもよろしいのでしょうか？」

「今日は饒舌だな、おまえたち」

マグナスは苦笑して、読んでいた本を閉じた。

いつの間にか、マグナスの周りには六体の姉妹が勢ぞろいしている。

マグナスは一章を見回して、言い聞かせるように言った。

「おまえたちにはいづれ語ろう。だが、今はそのときではない」

「……イエス、マスター。御心のままに」

火垂は腰を折る。姉妹たちもそれにならい、一礼した。

何者かの気配を感じ、姉妹が一斉に振り返る。

鋭敏な感覚が、誰かの接近を感じた。それも、ただものではない気配を。

マグナスは動かない。数分もしないうちに、三人分の足音が聞こえてきた。

足音は建物に入り、廊下を渡り、この部屋の前で止まる。

ノックは三回。返事も待たずに扉が開く。

「邪魔するぞ、マグナス」

最初に顔を見せたのは若い女——学院長の秘書官アヴリルだった。

抜き身のサーベルを腰にぶら下げている。火垂は自分の武器を意識した。いざとなれば、空間転移能力を持つ鎌切が得物を取り寄せてくれる。

「突然すまんな、マグナスくん」

アヴリルが開けたドアから、口ひげをたくわえた偉丈夫が入ってくる。

一九世紀最強と謳われる魔術師、学院長エドワード・ラザフォードだ。

好々爺然とした笑みを浮かべているが、秘めた實力は隠しきれない。過去に人間を殺めた者だけが身にまとう、危険な凄みが発散されている。

最後の一人は白髪頭の枯れた老人、医学部長バーシヴァルだった。杖をつき、腰も少し曲がっているが、身に帯びた魔力は学院長にひけをとらない。

火垂たち（戦隊）は一条乱れぬ動作で礼をした。

マダナスは席を立ち、自ら三人にソファを勧めた。

「学院長と教授総代がいらっしゃるとは、ただごとではないご様子」

「うむ。厄介なことになりそうだね、ぜひとも君の意見を聞きたい」

学院長はにこやかに言う。細められた目の奥に、銃火のような光が散った。

「近日中に星が降りそうな状況だ。下手をすれば、学院が壊滅しかねん」

また戦闘になるのか。火垂の全身を熱いものが駆け巡った。

（高揚している……？ 私は戦いが好きなのだろうか？）

——いや、違う。好きでもなければ、嫌いでもない。

ただ、主の役に立てる。それが嬉しいのだ。

「詳しくうかがいましょう。星が降るとは、何かの比喩でしょうか？」  
マダナスにうながされ、学院長はゆっくりと語り始めた。



そいつが追っ手だ――

あるいは予期していたのか。雷真の警告に、日輪はすぐさま反応した。

襲撃者は一瞬でエドガーに迫る。もとより狭い室内だが、瞬間移動したような速さだ。

重いこぶしが烈風を生み、シーツを引き裂いてしまった。

だが、エドガーには当たっていない。エドガーとアンリの姿が消え、日輪の後ろに出現する。式神（間土里）を使って、転移させたようだ。

攻撃をかわされ、襲撃者は舌打ちした。その顔を見て、日輪が息をのむ。

「（下から）『番目』―― ヴエイロンさまー」

「こいつが？」

雷真は改めて襲撃者を見た。なぜだか、急に親しみがわく。

「よう。おまえ、俺より成績悪いのか？」

「学力試験のことか？ あれは白紙で出したんだ」

「え……じゃあ、実質……最下位は俺？」

「雷真！ それどころじゃありません！」

落ち込む雷真を夜々が叱咤する。言葉通り、ヴエイロンは次の攻撃に移っていた。

一瞬で雷真の前に迫り、鉄拳を繰り出してくる。

とっさに金剛力で受け止め――きれない！ たやすく吹っ飛ばされ、壁にめり込む。壁は予想外にもろく、雷真は空中に投げ出されてしまった。

（こいつ……強えー）

何が（下から一番目）だ。数か月前の雷真なら、一瞬で始末されていただろう。空中ではなす術もなく、まっ逆さまに落下し、地面に叩きつけられる。

「雷真！ 無事ですか？」

すつつ、ととなりに夜々が着地した。

「……大丈夫だ。親父さんはどうした？」

「そちらも大丈夫です。日輪さんが移動させました」

「そうか。やっぱアテになるな、日輪は」

「夜々だって……お役に立ちます……ふえ……つつ」

「泣くな！ おまえのこともアテにしてるよ！」

ヴェイロンが眼前に降り立ち、聞こえよがしに舌打ちした。

「伯爵は逃げたのか。おまえらをぶっ飛ばさないことには、確保は無理だな」

やはり、エドガーを追っているらしい。（結社）の手の者か？

すうっと天に人差し指を突きつけ、呪文のようなものをつぶやく。

「スレイブニル、(フオーマル・ユナイト)」

呼びかけに応じて、甲冑型自動人形が飛んできた。

主と同様、一瞬で現れる。甲冑の隙間から内部をのぞき、雷真はぎょつとした。

「この自動人形、中身がねえ！ からっぽだ！」

甲冑の内側はがらんどろ。ボディを支える骨格も、関節を動かすためのシリンドラーも、動力を伝えるギアも、信号を伝えるコードもなかった。

甲冑はその場でバラバラになり、ヴェイロンの体にまとわりついた。

胸当てだった部分は胸を、足甲だった部分は足を覆う。ほんの数秒で、術者ヴェイロンは全身をフルブレードの甲冑に覆われてしまった。

「自動人形を、着やがった……!?」

遅れて気付く。これは恐ろしい機能だ。術者と人形が常に接触状態にある。

ヴェイロンが魔力を燃やすと、たちまち甲冑が同調した。触れている部分から、魔力が直に流れ込む。一瞬で間合いを詰められ、とつさに夜々が蹴りで迎撃した——ものの、手ごたえがなく、衝撃がまるで伝わらない。

反撃の裏拳がくる。夜々は弾き飛ばされ、樹木に叩きつけられた。

(どういう魔術だ……？ 理屈がわからねえ！)

初めてシンと戦ったとき、その動きが読めず、威力に翻弄された。圧倒的な耐久性に手

を焼き、初めて夜々が力負けするのを目の当たりにした。

あのとくと似ている。だが、根本的に違う。

シンのボディは硬く感じたが、ヴェイロンの甲冑は手ごたえがない。

シンの動きに対応できなかったのは、予測の裏をかかれたからだ。ヴェイロンは常識的な動きしかないし、慣性の影響も受けている。ただ、圧倒的に速い！

こちらの攻撃は全然効かず、あちらの攻撃は恐ろしく効く。

（金剛力こんごうりきを上回る、力の魔術……か？）

筋力に特化した魔術なら、この速さを説明できる。こちらの攻撃が威力を発揮しないのは、命中の瞬間、ごく短い距離を高速で後退していると考えればいい。後方に相手の力を逃がすのは、格闘技の高等テクニックだ。

「ど、どうしましょう、雷真……!?」

「俺が訊ききたいぜ。血さえ足りてりゃ、しのぐ方法もあるんだが」

「そんな方法はないさ。今から〈必殺技〉ってのを見せてやる」

ヴェイロンが左手をこちらに伸ばし、右のこぶしを後ろに引いた。

ヴェイロンの姿がはやけ、かすんで、見えにくくなる。

遠近感が狂う。一歩も動いていないのに、ぶつかるくらいに近く感じた。

「〈覇者バシヤの一点イチテン〉」

こぶしを繰り出す。当たる距離ではなかったが、雷真は紅翼陣を展開し、ありったけの魔力を夜々に送り込んだ。夜々を跳躍させ、自らも横っ飛びに跳ぶ。

本能が回避を命じたらしい。結果的に言えば、その判断は正しかった。

雷真と夜々が立っていた場所を、ブラズマの閃光が吹き抜ける。

こぶしが生み出した衝撃波なのか、不可視の鉄拳が大地をえぐり、林をなぎ倒す。雷真と夜々は土砂ごと巻き上げられ、上空へとはね飛ばされてしまった。

夜々の肘関節が逆に曲がる。衝撃波にかすつたらしい。金剛力をフルに適用してなお、腕を折られた。直撃していたら、胴体が吹き飛んでいただろう。

大地に叩きつけられながら、雷真は理解した。

下馬評でヴェイロンがマグナスに匹敵すると言われた理由は、これだ。

彼には必殺と呼べる一撃がある。マグナスの《戦降》を一撃で倒せる技が。

折れた腕をかばいながら、それでも夜々は歯を食いしばって立ち上がる。雷真も起き上がろうとしたが、落下のダメージが思いのほか大きく、まだ身動きが取れない。

そんな二人を、ヴェイロンは冷徹な眼で眺め、再びこぶしを引いた。

（まずい……！ 次は殺られる……！）

もうかわしようがない。さすがの雷真も死の予感に震えた。そのとき――

「おいたはそこまでだ。不良学生ども！」

開き覚えのある声がして、雷真の前に白衣姿の女性が現れた。苦虫を噛んだような顔で、キンバリーが立っていた。

## 3

時間は少し戻り、その日の夕刻。

シャルとグリゼルダは無事、ウィルリントンの街に到着した。

人口二万人に満たないが、近郊では一番の都市だ。近代化された表通りは商店で賑わい、家々からは煮炊きのいい香りが漂ってくる。

ストリートを折れて路地に入ると、密集した民家が軒を連ねていた。

色濃く残る中世の趣き。シャルが子どもの頃、駆け回った坂道だ。

路地を抜け、ゆるやかな坂道を登りきれば、立派な邸宅が見えてくる。

旧ブリュール伯爵邸。瀟洒な三階建ての館で、外観はグリフォン女子寮に似ている。

鉄の門は固く閉ざされ、広い前庭を自動人形が巡回していた。軍や警察が見張りに使う安価な量産モデルだが、人間の警官よりは攻撃力がある。

グリゼルダは平然と門に近付き、ひょいっと跳び超えてしまった。

いきなりのことでシャルは仰天した。だが、本当に驚くのはここからだった。

自分の機械天使を手元に引き寄せ、〈完全統制振動〉を行使する。

機械天使は剣に変形し、自ら宙を飛んで、警備の自動人形に斬りかかった。哀れ、警備の人形は真つ二つに割られ、あつさり機能を停止してしまう。

「おい、今のは何の音だ？　どうかしたのか？」

使い手が自動人形の異変に気付き、こちらに駆けてくる。

「誰だ！　貴様——」

最後まで言わせてもらえない。グリゼルダが指先から赤い魔力の〈糸〉を放つと、警備員はたちまち白目をむき、泡を噴いて昏倒した。

「せ、先生!?　いきなり何を……!?」

「静かにしろ」

グリゼルダはシャルを黙らせ、あたりの様子をうかがった。

——応援がくる気配はない。緊張をゆるめ、吐き捨てるように言う。

「警備は一人だけか。戦時なら簡単に占領されるぞ、バカが——」

今は平時です、と突っ込むべきか悩んだが、疑問の方が先に立つ。

「こ、こんなことしていいんですか？　この人、軍の制服を着てますけど……」

「よくない。早々に用事を済ませて、ずらかるぞ」

盗賊のようなことを言う。実際、やっていることも盗賊だ。

警備からベルトをはぎ取り、後ろ手に縛り上げ、錠束を奪う。

「何をほさつとしている。行くぞ」

シャルは覚悟を決めた。やつてしまったものは仕方がないし、正規の手続きを踏んでいては、入館の許可を得るのに何日かかるかわからない。

シングルドを頭にのせ、鉄柵を乗り越える。

前庭はあの頃と同じように、手入れが行き届いていた。懐かしさが込み上げ、胸が一杯になる。本当に、ほんの数年前まで、シャルはここで暮らしていたのだ。

両親と。祖母と。アンリと。たくさんの自動人形たちと。そして――

思わず嗚咽が漏れそうになり、シャルはあわてて息を止めた。

「ふむ、いい邸だ。霊的にもかなり強化されているな」

玄關に入ったところで、グリゼルダが感心したように言った。

「〈庭〉は……こちらか」

目的の場所をすぐに嗅ぎ当て、迷いのない足取りで中庭に向かう。

その後ろについて歩きながら、次第にシャルの胸が苦しくなってきた。

「シャルったら、そんな顔をして、どうしたの？」

そんな声が鼓膜の奥に甦る。

「お高くとまってるわね。いつものことだけど」



くすくすと笑う声。思い出すだけで震えてしまう。

シグルドが落ち着きをなくし、帽子の上で羽ばたいた。主の不安を感じ取ったらしい。シャルはそつと帽子から降ろし、シグルドを胸に抱いた。

「大丈夫、怖くないわ。ここはもともと、私の家だったんだから」

「ピ……？」

「そうよ、おうちよ。またいつか、みんなで暮らせたらいいわね」

不安げなシグルドを見ているうちに、シャルの胸に勇気がわいてきた。

護るべきものがあると、人は強くなれる。ひよつとしたら、シグムントはそこまで計算して、シグルドを遺してくれたのかもしれない。

胸が温まる。不思議だ。これまでも、ずっと一緒だったのに――

（いなくなつてからの方が、貴方を近くに感じるわ……シグムント）

シャルは顔を上げ、グリゼルダの背中に呼びかけた。

「あの、どうしてご存知だったんですか？ 私が精霊感應力を失つてること」

「……多くの子どもが精霊や妖精と交信できるが、大人になれば視認できなくなる。なぜだかわかるか？」

「それは……魔術師でもなければ、魔力は自然と低下しますし」

「そうじゃない。精霊は自然現象に近く、人間の尺度では理解しがたいような、残酷さや

冷酷さもあわせ持っている。人間の子どもと同じだな」

「子ども——」

「大人になるにつれ、人間はその残酷さを否定する。あるいは無意識のうちに避けるようになる。そのとき、精霊との交信も終わってしまうのさ」

シャルはどきりとした。思い当たることがあったから。

「才のあるものは普通、否定する力よりも、視える現実の方が勝り、何だかんだで精霊と折り合いをつけていく。支配することによってな」

「……私は」

支配なんて、考えたこともなかった。

だって、彼女は、私にとって一番の友達だったから——

やがて目の前が明るくなり、中庭を囲む回廊に到着した。

ガラス越しに月明かりが差し込み、中庭の生垣が見える。広さはせいぜい一〇メートル四方といったところ。生垣の向こうには小さな噴水と、花壇がひとつあるだけだ。

「ここだな。入れそうか？」

「大丈夫です。おばあさまのルーンがあります」

シャルは背負っていたカバンを置き、中から小箱を取り出した。祖母の形見のひとつ、ルーンが刻まれたペンダントを取り出す。

「用意がいいな。魔寄せのルーンか」

グリゼルダはうなずき、シャルの緊張を見透かしたように笑った。

「もしものときは、私が（魅了）を解いてやる。全力でぶつかってこい」

「はい！」

シャルは表情を引き締め、ペンダントを首にかけた。

シグルドを帽子にのせ、薔薇の生垣に近付く。敢えて目を閉じ、ルーンに意識を集中。

そうして、生垣の切れ目から中に入ってみると――

いつの間にか、目の前には美しい庭園が広がっていた。

薔薇が咲き乱れるイングリッシュ・ガーデン。頭上には大樹が枝を広げ、屋根のように天を覆い尽くしている。夜間のはずなのに、木漏れ日が降りそそいでいた。

あるはずのない場所。見えるはずのない光景。

永遠に終わらない午後――それがこの庭だ。

鼻歌が聴こえる。誰かを悼むような、哀切を帯びたメロディ。そちらを見ると、大樹の枝から白いブランコが吊るされ、美しい乙女が座っていた。

文字通り、妖精のような美貌だ。長い金髪が風にそよぎ、きらきらと木漏れ日を弾く。かすかに透ける白いワンピースからは、はだしの素足がのぞいていた。

鼻歌が途切れ、乙女がシャルに目を向ける。

シグルドが帽子に爪を立てた。乙女が「人ならざる者」と察したらしい。

乙女はシャルを見て、薔薇のつぼみが開くような、可憐な笑顔を見せた。

「久しぶりね、シャル」

シャルはうなずき、もう何年かぶりで、彼女の名を口にした。

「……久しぶりね、ロツテ」

## 4

「私はバカが嫌いだ」

雷真とヴェイロンのあいだに割り込み、キンバリーは毒づくように言った。

「学内での私闘は禁じられていない——が、施設を損壊すれば話は別だ。見ろ、バカども。寮を壊し、林をあんなにして、修繕にいくらかかると思っている」

頭上ではトータス寮の外壁が崩れ、雷真の部屋が丸見えになっている。学生たちが騒ぎを聞きつけ、窓という窓から首を突き出し、こちらを見物していた。

「何か申し開きはあるか、〈下から二番目〉？」

「ある！ 俺は正当防衛だ。こいつが壁をブチ破って、襲ってきやがったんだよ」

「ほう？ そうなのか、〈下から一番目〉？」

「そいつが女子を連れ込んで騒ぎやがるから、腹に据えかねたんだ」

「だからって壁を破るか!?」

「寝不足で精神を病んでんだよー」

「勝手に喋るなー 最低成績コンビがー」

雷真とヴェイロン、二人そろってぶっ飛ばされた。

よるめきながら、雷真は仰天した。念動力で殴られたー

「女子を連れ込んでいたというのは本当か？」

キンバリーが冷たい声で質問を続ける。雷真はしらばつくれようと思ったが、思いとどまった。すぐにバレる嘘についても、立場が悪くなるだけだ。

「……本当だ」

「そういうことだ。つまり、悪いのは俺じゃない。俺は帰らせてもら——」  
立ち去ろうとするヴェイロンの肩を、がしつとキンバリーがつかむ。

「君のストレスは理解したが、壁を破ったのはやりすぎだ。まして、このバカを四階から突き落としたんだぞ？ そこの二回生なら死んでいた」

大地を引っくり返したような、あたりの惨状をあこで示す。

「おまけにこのありさまだ。本当に、そんな子どもの喧嘩が原因なのか？」

心の底まで見透かすような視線。見慣れている雷真でさえ、たじろいでしまう。

ヴェイロンは自動人形の装着を解除し、無造作に雷真の方へと近寄ってきた。

「俺たちは子どもだ。ガキみたいな連中だ。なあ、〈下から二番目〉？」

ぽんぽんと親しげに雷真の肩を叩く。

「子どもの喧嘩だったよな？」

「……ああ、そうだよ、くそつたれ！」

やぶれかぶれで肯定する。真実を語れば、エドガーの存在が明るみに出てしまう。

キンバリーの眼光が、ますます鋭くなった。

「子どもの喧嘩なら、仲直りできるな？」

「ハイ」「……ハイ」

「では、握手したまえ」

試しているのか。雷真とヴェイロンは互いににらみ合いながら、お互いに殺気を殺して、引きつった笑顔で、やらせくさい握手をした。

キンバリーはため息をついて、つれない調子で言った。

「この件は上に報告するぞ。いずれ厳しい処分がくだる。もつとも——その前に、寮監に殺されるかも知れんがな」

ヴェイロンは苦い顔になり、面倒くさそうに戻って行った。

「ときに、〈下から二番目〉。私は今、迷い猫を探しているんだが」

キンバリーが一方的に話しかけてくる。無視して魔力を集中し、夜々の骨折を修復していると、キンバリーは雷真の肩に腕を回し、顔を寄せてきた。

キンバリーの胸が当たり、柑橘系の香水が香る。一瞬、思考が麻痺したが、夜々が怨念のようなものを漂わせたので、雷真はたちまち平常心を取り戻した。

「猫？ 学院の教授さまが猫探しか？」

「血統書つきの高貴な猫さ。伯爵と呼ばれる猫でね、この付近に逃げ込んだそうだ」

「何か知っているなら、吐いた方が身のためだぞ？」

「知らないな」

すつとほける。キンバリーは「ふん……」と笑って、足早に立ち去った。野次馬たちも首を引つ込め、あたりに静寂が戻ってきた。

静かになると、カーテンを開くような音とともに、日輪が林の中に現れた。

エドガーとアンリもいる。あまりに見事な隠形の魔術に、雷真は目を見張った。

「すげえな、日輪……。忍者かよ」

「（衛真奇）という式です。平安の世において、隠形は陰陽師の重要な素養でした」

「そ、そんなことよりー」

誇らしげな日輪を隠すように、夜々が身を乗り出してくる。





「警戒してください雷真！ さっきのは明らかに襲撃でした！」

ちらつとエドガーを見る。エドガーはすまなそうに頭を下げた。

「すまない。早速、迷惑をかけてしまったね」

「あんたは何も心配しなくていい。俺が絶対、シャルに会わせてやる」

それがたぶん、シグムントにしてやれる唯一のことだ。

「でも、今夜はどこに泊まるんですか？ お部屋は壊れちゃいましたけど」

「そ、そ、そういうことでしたら、ぜひ日輪のところへ！ グリフォン女子寮はもとも二人部屋で、わたくしは一人で使っております！」

「甘言に惑わされなくてください雷真！ 女子寮は今夜にも倒壊します！」

「させる気か？ まあ、日輪の部屋でもいいんだが……」

雷真はあごに手を当て、メリットとデメリットをてんびんにかけた。

「やっぱり、俺と親父さんは別の部屋に行こう」

「別の部屋って……泊めてくれそうな人に、心当たりがあるんですか？」

「ああ。あいつの部屋、一度入ってみたかったんだよな——って夜々？ 何でそんな真っ暗な目を……日輪も落ち着け！ おまえら絶対誤解してるから！」

今にも暴走しそうな夜々と、泣き出しそうな日輪をなだめつつ、雷真はエドガーを連れ、移動を開始した。

「——で、なぜオレのところにくるんだ」

青筋を浮き立たせ、ロキは忌ま<sup>い</sup>忌ましげに言った。

ラファエル男子寮の一室だ。

高級ホテルを思わせる内装で、ゆったりとしたソファに、セミダブルのベッド、大きな勉強机を置いてなお、広々としている。雷真は室内を見回して、

「完全個室だつて聞いてたからさ。……想像以上に広いな」

トータス寮とはひどい格差だ。安宿とスイートくらいの違いはある。

ロキは椅子<sup>いす</sup>に、エドガーはソファに、雷真とアンリはロキのベッドに座っている。壁には大剣形態のケルビムが、美術品のように飾られていた。

壁一面の参考書を眺めながら、雷真は軽い調子で言った。

「この寮、優等生しか入れないんだろ。中がどうなってるか、興味あったしな」

「そんなくだらん理由で——ああそうか、つまり殺されたいのか」

「殺すなよ!? 今回ばかりはすまん、頼む!」

手を合わせて拝む。ロキは毒氣<sup>どくけ</sup>を抜かれ、舌打ちしながらそっぽを向いた。

「ロキさんのお部屋、すごく綺麗きれいですね。掃除が行き届きといてます」

アンリがベッドをさすりながら、感心したようにつぶやく。

「潔癖症けつぺくしやうつか、神経質なんだよな、ロキは」

「黙れ。貴様の吐き出す二酸化炭素が神経に障る」

「俺おれは謎なぞの病原体か！」

「……すまない。世話をかけるね」

背中を丸めて、エドガーが申し訳なさそうに言った。

「君たちはシャルの学友なんだろう。春からこちらのことは、いろいろと伝え聞いている。父娘おやこ三人、迷惑をかけるばかりで心苦しい」

アンリもすまなそうな顔をする。気まずい空気が立ちこめた。

「お茶が入りました♡」

夜々よよが給湯室から戻ってきて、空気がやわらぐ。雷真らいしんは茶をすすりながら、

「とりあえず、さっきの寮よりは安全だ。セキユリティも固かたそうだし。……で、先に確認させて欲しいんだが、ヴェイロンは何者なんだ？」

エドガーがカップを置き、深いため息をついた。

「（結社）の手の者だろうね。あらかじめ入学させておいたようだ。夜会が神性機巧マシンドール誕生の舞台となることは、世界的にも知れ渡っている」

「ゼカロス兄弟もそのクチか。学生に敵がいるんじや、気が抜けないな」

雷真は頭痛を覚えた。シャルが戻るまで、エドガーを防衛できるだろうか？

「そういや、シャルは何しに行ったんだ？」

「（妖精の庭）に入り、精霊と講和を結ぶのだろう」

「妖精の……何だつて？」

エドガーとアンリが顔を見合わせる。ややあつて、アンリが控えめに訊いた。

「蔵の奥に知らない地下室があったり、お庭の一角がものすごく広かったり——そういう経験、ライシンさんにもありませんか？」

夜々が困惑した顔で雷真を振り向く。雷真はうなずいた。

「ある」

「本当ですか雷真？ 赤羽さんちに、そんな秘密が？」

「ある日、廊下に引き戸を見つけてさ。開けてみたら、知らない爺さんと婆さんがいて、茶菓子をおわしてくれたんだ。今にして思えば、夢でも見たんだな。間取りを考えりや、そんな部屋がおさまるはず——って、まさか！」

こくん、とアンリはうなずいた。

「そこが（妖精の庭）です。地霊や家屋の精霊が作る異空間と考えられています」

「そういや、お師匠さまが言ってたな。シャルには精霊使いの素質があるって」

「だが、彼女が精霊を従えているところは見たことがない」

ロキが冷静につぶやく。エドガーの眉間に深いしわが刻まれた。

「……ちよつと、関係が上手くいかなくてね。シャルはもう精霊を視ることができない。でも、〈妖精の庭〉は特に精霊力の強い場所——靈感の弱い者も精霊と交流を持てる。今のシャルでも、精霊と会話が出来るはずだよ」

「じゃあ、シャルはそこで……？」

「自分の守護精霊と和睦し、絆を取り戻すつもりだろう」

「それは……簡単にできるのか？」

「君にもいるかな。昔、誰よりも親しくて、今は憎しみを抱くような誰かが」  
真つ先に兄の姿が浮かぶ。

「その誰かと仲直りすることは、簡単なことかい？」

答えられない。雷真は祈るような気持ちで、はるか遠くの空を見つめた。

（頑張れ、シャル……！）

## 6

林の中に身を潜め、ラファエル男子寮をにらむ。

監視を続けるキンバリーの頭上に、不意に誰かの気配が立った。

「シワが増えるぞ、鶯の同胞」

「……その発言はご婦人方の不興を買いますよ、山鳩の同胞」

ただでさえ虫の居所がよくない。キンバリーはむすつとして頭上をにらんだ。

枝の上に男がいる。身にまとうのは、金糸で縫い取りのされた、フードつきの黒マント。魔術師協会の実働部隊（灰十字）の装備だ。

男はフードの下から金色の瞳をのぞかせ、いたずらっぽく笑った。

「先日から機嫌が悪いな。教父の方針がよほど気に食わんと見える」

「めっそうもない。……と、言いたいところではありますがね」

「若いな。伯爵はあの部屋に？」

「ええ。強襲すれば、できないこともないでしょう」

「しかし死人が出る——かな？」

キンバリーは薄く笑った。（灰十字）の戦士に死人を出せるというのなら、あの悪ガキたちもずいぶん偉くなったものだ。

「こちらは結社の動きを把握した。伯爵は力尽くで逃げてきたようだな。——すごいぞ。結社内部はてんやわんや、魔女狩りの様相を呈している」

「まさか。どうせ我らを欺くための偽情報でしょう」

「そんなことのために、幹部を二人も肅清するか？」

「二人？ 薔薇の魔術師を二人も、ですか？」

「幸運にも同胞が死体の一部を手に入れ、検視した。確度の高い情報だよ。そして、その混乱——結束の綻びが、核心的な情報をくれたのだ」

男は枝に腰を下ろし、くつろいだ姿勢で話を続けた。

「ここ数年、ブリュー伯爵はフランス南部に潜伏していたらしい」

「聞いています。イオネラがもたらした情報でも、イカロスを提供し、ダイダロスの設計を担当したと……その裏が取れたのですか？」

「取れた。結社は仏議会に相当食い込んでいるな。——本題はここからだ。ブリュー伯爵の逃亡と同時に、魔術回路（万物流転）が失くなった」

「な……結社の秘法が行方不明ですって？ 伯爵が奪ったのですか？」

「そうらしい。逃亡と奪取、いずれも氏の力だけでは実行できない」

「結社内部の誰かが、手引きをした……？」

「薔薇のご婦人方もそう考えたようだ。伯爵が夫人を見捨て、独りで逃げるはずもないからな。幹部の誰かが発言力を増そうとしたか、あるいはのつとりを仕掛けるべく、伯爵に命令を与えたのではないか……疑心暗鬼を呼ぶというやつさ」

その結果、幹部二名が肅清される騒ぎとなった。

キンバリーはカサカサに乾いた唇を舐め、さらに訊く。

「伯爵の、あるいは背後にいる者の目的は何でしょう？」

「氏はわざわざ英国を訪れた——この意味がわかるだろう？」

試すような視線を寄越す。キンバリーは素早く思考を働かせた。

伯爵は英国を追放されたも同然の身。おまけに、ダイダロスは機巧都市を壊滅させようとした。このタイミングで英国に入れば、投獄、あるいは殺害される危険もある。

死の危険を冒してまで、ドーヴァー海峡を渡った理由は。

「……テロリストに宗旨替え、というわけですか」

「もとより《結社》はテロリズムの体現者だ。恐怖によって世界を裏から支配する。人形使いが生まれるはるか昔から、連中は傀儡のエキスパートだよ」

痛烈な皮肉。男は枝の上で立ち上がり、淡々とした声で告げた。

「教父のお言葉はこうだ。『こたびの事態、傍観者たるべき我らも看過はできぬ。判断をあやまれば、人類に未曾有の大災厄が降りかかるだろう』」

「いくら伯爵でも、《万物流転》を単独で起動できるとは思えません」

「相手はあの《活殺結界》エドガーだ。侮ることはできない。現実には《時空スライド》が引き起こされてからでは遅い」

「……では？」



「伯爵を捕獲、もしくは排除する」

予期していた命令だったが、それでも、ため息が漏れた。

「……（下から二番目）は、抵抗するでしょうね」

「その点についても教父は触れておいでだ。『彼をあきらめてもよい』とね」

キンバリーの苦りきった顔を見て、男は小さく笑った。

「そんな顔をするな。彼が本当に予見の（子ども）なら、ここでは死なんさ」

「ですが、あいつは運命を変えます。ひょっとしたら、自分が助かる運命さえ……」

「詳細は明日話そう。寮は我らが見張る。今夜はもう休め——美容のためにね」  
意外なほど優しく言うのと、現れたときと同様、闇に溶けて見えなくなる。

一人になると、キンバリーは自制できず、近くの樹を殴った。

「……すまん、シャルロット。育ての親を失くした君から、我々は実の父をも奪い去るつもりらしい」

「いやいや、大した連中だよ、実際」

完全な不意打ちだったので、キンバリーは反射的にダガーを抜いた。

背後の木陰にクルーエルが立っている。ほんの一〇メートルしか離れていない。魔術師でもない男が、こんな距離まで接近していたとは——

恐るべきは戦場爆り。年数で言えば、クルーエルの方が実戦経験は豊富だ。

キンバリーはクルーエルにタツタルをかまし、ダガーを喉もとに突きつけた。

「このバカ医者がいー消されたいのかー」

「刃物をしまえー おまえさんが消す気かいー」

白衣の汚れを落としながら、クルーエルはぶちぶち文句を言った。

「ったく……俺は一応、協力者の扱いだろ。こんなことで消されちゃかなわんぜ」

「金に目がなく、口が軽く、おまけに女好きの協力者など百害あって一利なしだ」

「女好きは関係ねえだろー」

「どうかな。君はハニートラブに喜んで引つかかるようなバカだ」

「否定はしねえ」

「しろー」

「何をビリビリしてるんだ。キンバリー教授らしくもない」

クルーエルは苦笑した。口元に蔑みのようなものがにじんでいる。

「本気で《暴竜》のババさんを殺す気かい？」

「……大勢の市民を護るためだ」

クルーエルの手が閃き、キンバリーの肩をつかんだ。

かわす間もない。どんっと乱暴に、樹に押しつけられる。

「肉親を失くすつてのは、精神に与えるダメージがハンパねえんだー 恋人に振られたと

言って自殺する奴がいる。肉親の死はその倍のストレス強度があるんだぞ！ 嬢ちゃんはドラゴンを亡くしてる。立て続けに痛めつけるのか!?」

「……それでも、やらなければならぬ」

キンバリーは力なく答えた。らしくないほど弱々しい。

クルーエルも戸惑ったのか、肩をつかんでいた手を離す。

「……さっきの話、パパさんが何をしでかすっていうんだ?」

「時間制御魔法、というのを知っているか?」

「時間? 魔術で時間を止めるとか? 男子の夢だなオイ」

普段の三倍ムカつく。思わず、クルーエルの腹にこぶしを叩き込んでしまう。

悶絶しかけるクルーエルに、感情を殺した声で説明する。

「たとえば、学院長の〈レメゲトン〉。あれがこの世に出現するのは数十年後だ。将来的に得られるはずのものを、過去の我々が得ている」

「……嘘くせえ。そんなことが、本当にできるのかよ」

「偶然、できたのだ。あるいは、未来の大魔術師が贈ってくれただけか……詳しいことは判明していない。時間旅行者にしろ、オーバーツにしろ、そのたぐいの与太話は腐るほどあるからな。魔剣と同じく、宇宙の真理に関わる秘法だ」

「さっきの〈万物流転〉ってのも、それか? パパさんが使うって?」

キンバリーは答えない。守秘義務があるからだ。

だが、言ってしまったも同然だ。クルーエルは信じられない、という顔で、

「時間なんつーもんが操作できるとして、何が起こるってんだ？」

「予見の刻を——神性機巧誕生の瞬間を早めようというんだろう」

「つまり？」

「神性機巧は結社の手に渡る。……いや、それは受け入れられる。いずれかの勢力が手に入れるのは歴史の必然だ。問題は……機巧都市に〈星の雨〉が降る」

「——は？」

「この街に流星が降りそそぎ、火の海になると言ってるんだ」

黒眼鏡の奥で、クルーエルの目が大きく見開かれた。

「おい待て！ 教父の予見ってやつは、そんな危険な内容だったのか！」

「危険？ 流星群など珍しくもないさ。そんなものは毎年いくつも観測されている」

「だが、都市が壊滅したなんて話は聞いたことがねえ！」

「対抗魔術が間に合うからだ。特定の時間、特定の範囲にのみ作用する強力な結界がな。

古代の占星術師たちが、なぜ血眼になって天を眺めていたと思う？ 彗星を凶兆と見なし

たのは、彗星の軌道が流星群を生むと知っていたからだ。彗星から剥落した塵は、世間で

言われているほど小さくもなく、容易に燃え尽きもしない」

クルーエルはむしろキンバリーの頭を心配するような、氣遣わしげな顔をした。

キンバリーは構わず、さらに言う。

「星読みと星紋（ほしご）いは魔術師協会の重大な役目だ。世界中の人々は協会の恩恵を受けているのさ。望むと望まずとにかかわらずな」

「……それが、人形嫌いのエイミーちゃん（エイミーちゃん）が協会の犬になった理由か？」

「護れる命がある。それを見殺しにするのは、殺人と同じだ」

「それは矛盾だ！ 嬢ちゃんのパパを殺そうってんだろ！」

「腰の重い傍親主義者が、ようやく災いを防ごうと言うのだ！ 邪魔をするな！」  
ダガーを振り回す。クルーエルはあわてて飛び退き、捨て台詞（ざいし）のように罵った。

「くそつたれ！ ロクな死に方しねーぞ！」

「……私の死に方など、一五年前から決まっている」

走り去るクルーエルの背中を眺めながら、冷たい夜風をそつと吸い込む。

「たった一人、誰にも愛されずに、戦死だ」

夜が深い。

慣れているはずの闇が、いつになく暗く思えた。



## Chapter 5 鏡の中の乙女

### 1

瀟洒な邸宅の庭先で、幼い少女が笑っている。

「まあ、綺麗——これ、みんなが咲かせたの？」

薔薇の生垣に話しかけ、それから宵後を振り向いて、はしゃいだ声を出す。

「え、そっちにも？ 見たいわ！ 見せて！」

誰かと手をつなぐような仕草をして、ちょこちょこと駆けていく。

天使のようなその姿を、白いベンチに腰掛けて、若い夫妻が見守っていた。

夫はプリュー家当主エドガー。妻ミレイユは胸に赤子を抱いている。

ミレイユはフランスで舞台女優をしていたという、異色の経歴を持つ伯爵夫人だ。身に

つけたものや控えめな化粧の仕方に、都会的で洗練された美しさがあった。

「シャルは誰と話しているのかしら？」

「妖精が視えるんだ。……花の精とか、風の精とか、水の精とかね」



「えつ、本当に？ まあ……」

「……氣味が悪いかい？」

「いいえ！」

夫の不安を見透かしたように、ちゃんとエドガーの鼻を突つく。

「お伽話みたいで素敵だわ。——ねえ、シャル。お母さまとアンリにも教えて。妖精さんは何て言っているの？」

時間がゆつたりと流れる、穏やかな日々。

あの頃、シャルはいつも手鏡を持ち歩いていた。

## 2

翌日の夕刻、雷真たちはコロセウム前に集合していた。

相棒の夜々、フレイとロキの姉弟、日輪、昴、六連のいざなぎ流三人が顔を並べている。

エドガーはロキの部屋に残り、いろりが護衛についていた。

「結局、シャルは間に合わなかったな。……どうする？」

雷真が仲間たちを見回す。重苦しい沈黙を破り、ロキが返答した。

「誰かが参戦してくれば、シャルロットには戦場待機義務が生じる。義務を果たせなければ

ば、逃亡扱いで失格だ」

「……なら、やるしかねえな」

「えっ？ どうするんですか雷真？」

夜々が雷真を見上げる。雷真はその小さな頭に手を置いて、

「俺たちで今夜の挑戦者を潰す。そいつがいなくなれば、条件は昨日と同じだ」

「ほな、俺も引き続きサボり続行……ゆうわけか」

昂は気が重そうに言った。舞台に上がれないのでは、日輪を護れない。

「おまえは気にせず休んどけ。それで、今夜の相手は——」

いつものくせで情報通のシャルを探してしまつて、雷真は頭をかいた。

「誰か知らないか？」

六連が肩をすくめ、日輪も夜々もかぶりを振る。

誰も発言しないのを見て、フレイが遠慮がちに手をあげた。

「う……順当に行けば、四回生のマルコフ先輩」

「知ってるやつか？」

「史学部で一緒。戦史、戦術史に詳しい」

「戦術家か。厄介だな」

「でも、いちばん厄介なのは……先輩がアスラ陣営ってこと」



暗い顔をする。予想していたこととは言え、雷真も渋面になった。

六連が顔を引きつらせ、嫌そうにつぶやいた。

「僕らがマルコフはん狙おたら、アスラはん、やっぱし……」

「当然、戦闘になるな。アスラは仲間を見殺しにはしない」

それでも、マルコフは倒さなければならぬ。

かつてない緊張を強いられながら、雷真たちは連れ立って舞台に向かった。

舞台上では、既にアスラ一派の人形使いが勢ぞろいしていた。

「フレイ。マルコフつてのは、どいつだ？」

「う……まだ、きてないみたい」

フレイが小首を傾げる。アスラの取り巻きの中には、いないようだ。

「あの真ん中に突っ込んで、標的を倒さなくちゃならないわけか。一苦勞だな」

「やりましょう雷真さま！ シャルロットさまはわたくしのお友達です！」

「私も、やる。シャルは友達だから」

日輪とフレイが意気込んで言った。二人がその気なら、六連やガルド犬に異論のあろうはずがない。

ちらりとロキを見ると、ロキは顔を背け、億劫そうに言った。

「最初に団体戦を了承した時点で、とっくに運命共同体だ」

「……恩に着る。ならひとつ、締まって行こうぜ！」

一同がうなずく。怪我を負っている者もいれば、魔力が回復していない者もいる。それでも、ともに戦えることが心強いと思う。

舞台に足をかけたとき、ふと、昂の声が背中にかかった。

「雷真。その……お嬢のこと、よろしゅう頼む」

「ああ、任せろ」

「怪我したら末代まで乗るえ。夜々ちゃんにあることないことチクるえ！」

「それはやめてくれ！　つかそれ、チクリじゃなくて流言飛語な！」

昂を除く全員で舞台に上がる。ずらっと居並ぶ雷真陣営——そのただならぬ気配、覚悟の決まった様相を見て、観客席が静まり返った。

ついに全面戦争が起きるのかと、期待している様子だ。

突き刺さる視線をうざったく思いながら、マルコフの訪れを待つ。

だが、一五分が経過しても、マルコフは現れなかった。

アスラ一派に目立った動きはない。……落ち着きすぎている。

さらに言えば、執行部も静かすぎた。マルコフの到着を待っているような素振りが——入場ゲートを気にする様子がない。

既視感を覚える。確か、以前にもこんなことがあったような……？

ラビがふんふんと鼻をひくつかせ、フレイの膝に鼻先を押しつけた。

「どうした、フレイ？ ラビのやつ、何か気にしてるな？」

「……ひょっとして」

日輪に視線を向ける。日輪は鋭く察し、そつと印を結んだ。

「——急々如律令。きたりま征」

式神を降ろす。いきなり客席から呪符が飛び出し、黒い準に変化した。

（客席に仕込んでおいたのか！）

意表を突かれながらも、アスラの反応は速い。魔力の収束で念動の盾を生み出し、準の進路を阻む。準は簡単に壊れたが、標的にはかすっていたらしい。べろん、と皮がはがれるように、虚空から男子学生と自動人形が現れた。

魔術で姿を隠していた！ 最初から舞台にいたのだ！

「あれがマルコフ先輩！」

フレイが叫ぶ。アスラは苦笑を浮かべ、床机を蹴って立ち上がった。

「戦わずして（暴竜）を排除できる——かと思っただけだね」

「あんたがそんな小狡い手段に訴えるとは、ちよつと意外だったぜ」

「マルコフは僕の同志だ。護らなければならない」

「……なら、お互いに退けないな」

両者の視線がぶつかる。

観客たちの望み通り、戦いの火蓋が切つて落とされた。

## 3

ブリュ―伯爵<sup>はせくろく</sup>邸にはかつて、近隣の子ともたちが頻繁に訪れていた。

シャルは大勢の友達に囲まれていた。だが、一番の友達は人間ではなかった。

「今日は何をして遊ぶ？」

毎朝、目覚めるとすぐ、輝くような美少女がシャルにたずねてくる。

自分とそっくり同じ姿、同じ性格の少女——ロツテ。

二人はいつも一緒だった。シャルはロツテを双子の姉妹のように思っていた。

だが、幸福な時間は長くは続かなかった。

七歳になったばかりの頃、シャルは人間の友達とケンカをした。原因は覚えていない。人形を取り合つたとか、そんな程度の些細なケンカだ。

もちろん、すぐに仲直りできた。わだかまりも残らない。だが——

その夜、ロツテは言ったのだ。

「今日是不愉快だったわね。街娘風情が、私たちと対等なつもりかしら」

シャルはびつくりして、しばらく口がきけなかった。

「ロツテ……？　それ、本気じゃない……わよね？」

「あら？　貴女も同じ気持ちだと思つたのに、違つた？」

普段通りに微笑む。そのとき、シャルは初めてロツテを怖いと思つた。

その日を境に、ロツテの言動はシャルの理解を超えていく。

友達やアンリと遊ぶたび、ロツテはシャルにしか聞こえない声でささやくのだ。

「みつともない子ね。獣みたい」

「この子、いつも手が汚いわ」

「バカに生まれると可哀相ね」

「アンリつたら愚図ねえ。一緒にいるこつちが恥ずかしくなつちゃうわ」

ロツテは誰にも視えないし、悪口もシャルにしか届かない。だが、シャルは息苦しさを覚え、何度も喘息の発作を起こした。

日増しにロツテとの乖離は激しくなり、シャルの精神は圧迫されていく。

「もうやめて！　どうしてそんなひどいこと言うの！？」

「あら？　貴女も同じ気持ちでしょう？」

「違うわ！　私はそんなこと思わない！」

「そうかしら？　私は貴女、貴女は私——私たちは同じものよ」

「違う！ 違うわ！」

ロツテは無邪気に笑うばかりで、シャルの苦痛など理解しようとしもない。

シャルはロツテをさけるようになった。しかし、ロツテは鏡の精——光を反射するものがあれば、どこにでも現れる。逃げ場など、どこにも存在しなかった。

苦痛にまみれた五年間を経て、シャルは寄宿学校に進学を決めた。

「それじゃ、アンリ。留守のあいだ、アルフレッドをお願いね」

「うん！ 任せて！」

出発の日、シャルはお気に入り的大型自動人形オートマトンをアンリに託した。

それから、久々に手鏡を持ち出して、中庭に向かった。

シャルの意図を理解して、シグムントが慎重な声を出す。

「ロツテに会うのか？ それは賛成しかねる。もう少し時間をおいた方が——」

「嫌よ。今日、決着をつけるわ」

シャルは意固地に宣言し、植え込みをくぐって、（妖精の庭）に入った。

「あら、シャル。私にも挨拶あいさつにきてくれたの？」

ロツテは大樹の根に座って、挑発的に微笑んでいた。

「でも、おあいにくさま。寄宿学校の鏡の中にも私はいるわ。逃げてても無駄よ」  
意地悪く笑う。同じ顔の少女にそんな表情をされるのは、ひどく不愉快だった。

「さっきの、聞いたわよ。「お願いね」なんて、さぞや気分がいいでしょうね。アンの顔じゃ、あの学校は無理なものねえ?」

返事の代わりに、シャルは手鏡を投げつけた。

「うんざりだわ! 二度とその顔を見せないで! 未来永劫、この世から消えて!」

「……やつと本音が出たわね」

砕けた鏡の破片を見下ろし、ロツテはせせら笑った。

「本当の自分を捨てちゃつて——後悔するわよ、シャル」

くすくす、くすくすと、感じの悪い笑い声を残し、ロツテは消えた。

シャルは涙で頬を濡らしながら、しばらく肩を上下させていた。

そんなシャルを、シグムントはただ、何も言わずに見守っていた。

その日を境に、シャルはロツテの影に悩まされることはなくなった。

その代わり、花の精を視ることも、風の精と話すことも、二度となかった。

ついに、アスラ一派との戦端が開かれた。

兩陣営の人形使いがそれぞれに魔力を高める。真つ先に動いたのは――

「ケルビム」

[I'm ready]

ロキだ。ケルビムが両手のブレードを抜き、敵陣に斬り込む。

四、五体の自動人形が散開し、ケルビムを押し包むように包囲する。……反応が素早く、対応も適切だ。これまで相手にしてきた連中とは練度が違う。

ロキもただちに戦法を変える。翼状のコンテナを展開させ、敵のと真ん中で短剣を射出した。八方に飛んだ短剣はしかし、ただの一発も直撃しない。

ある者は叩き落とし、ある者はかわして、短剣を見事にやりすこす。

（――できる！）

雷真は敵の技量を悟った。さすがに夜会の上位組、戦闘技能も卓越している。のみならず、こちらの戦法を研究しているようだ。

大きな提棒を担いだ巨人型人形、鉄パイプのような針を持つ蜂型人形など、直接攻撃が得意そうな面々が、一斉にケルビムを狙う。

たちまち、チャンバラを思わせる剣戟が始まった。

ケルビムの身動きが封じられている。ガラム犬が援護のために（音の砲弾）を放ったが、敵はいともたやすく砲弾をいなしてしまった。



「ちょ……何か、きはりますよー」

六連の警告に合わせたかのように、敵陣の中央で魔力の炎が噴き上がった。

アスラが凄まじい魔力を燃やし、自分の自動人形を起動させている。

いかめしい甲冑をまとい、鉄アレイから剣が生えたような（独鉈の剣）を持っている。鎧の装飾はオリエンタルで、インドの仏像みたいな外見だ。

「一刀万砕、降魔調伏、魑魅惡鬼ことごとく焼滅せしめよ——インドラー」

インドラが剣を掲げる。刹那、切っ先から閃光がほとばしった。

閃光が空を裂き、天で反射して、雷が降ってくる。

数億ボルトにも達する電流が、雷雨のごとく降りそそいだ。

日輪の式神が身を盾にする。だが、すべては防げず、一発が夜々を直撃した。

「夜々！ 平気か!？」

「だい……じょぶです……っ」

夜々は金剛力で耐えていた。肌の表面を電気のスパークが流れ、少しは痺れたようだが、電紋も火傷もできていない。筋繊維も内臓も無事だ。

「ちよっと……気持ちいいですっ」ぴりぴり。

「余裕かましてる場合か！ くるぞー」

インドラが独鉈の剣を振りかぶり、夜々に斬りかかる。雷撃を帯びた一撃を夜々は両手

で受け止めた。夜々の足もとが崩れ、三〇センチも沈み込む。

（重い！ 雷を使うだけじゃなく、腕力まであるのかよ！）

夜々の金剛力に負けていない。自動人形の性能もかなりのものだ。

「くそ……光焰——六結——」

「はい！」

夜々が剣を突き、インドラに連続攻撃を見舞う。鋭い突きを、蹴りを繰り出し、相手に防御を強制する。その隙に、本命の雷真がインドラの頭上を取った。

頭を破壊しようと、宙返りしながらの蹴りを叩きつけ——

——られない。膝が勝手に曲がり、蹴りを中断してしまった！

「な……!?」

驚愕した一瞬に、インドラの剣がきた。顔面を割られる寸前、夜々が雷真をかつさらい、離れた場所に着地する。冷や汗をかきながら、雷真は抗議した。

「おい、アスラー！ 術者を殺したら反則だぞ！」

「今のはあくまで反撃だ。顔を潰した程度では、失格にはならないさ」

——本気で言っているようだ。雷真の背中に畏怖めいたものが駆け抜けた。

その覚悟も見事だが、魔術の制御技術にも目をみはるものがある。

人間の筋肉は神経を走る電流によって制御されている。その上、金剛力を使っても、

微弱な電流は流れる。先ほど夜々に浴びせたとき、その特性を見抜き——外部から雷真の神経系に干渉したのだろう。

強敵だ。そして、アスラのもつとも恐ろしいところは——

アスラの後ろから、複数の自動人形が飛び出してきた。

「夜々！　かわせ！」

指示しながら、自らも飛ぶ。飛んだ先には別の自動人形がいて、雷真に金棒を振り下ろした。舞台に叩き落とされ、衝撃で骨が悲鳴をあげる。

「雷真!?　大丈夫ですか!」

「あいつには……仲間が……いやがる！」

マグナスにはなくて、アスラにあるもの。それが仲間の存在だ。

「（下から一番目）を狙え！　今なら取れる！」

アスラの号令で、彼の同志たちが一斉に群がってきた。

だが、そう上手くはいかない。敵の集中攻撃を、灼熱の火炎が阻んだ。大剣形態のケルビムが、炎を噴きながら回っている。

ハーファマントをひるがえし、ロキが雷真の横に立った。

「気を散らすな。あいつは、後だ！」

——そうだ。今夜はまだ、アスラを倒す必要はない。

雷真は少し冷静になり、今夜の標的を探した。

問題のマルコフは、アスラの背後で薄笑いを浮かべている。その傍らに、ワニともサメともつかない、凶悪な頭部を持つ自動人形が控えていた。

「日輪、前線を頼む！」

「お任せくださいませ！」

汗ばんだ顔で日輪が応じる。次々と式神を召喚して、敵集団を包囲した。

このレベルの敵が相手では、式神は簡単に破壊されてしまう。時間をかけている余裕はない。雷真は夜々と二人、敵陣のど真ん中に突っ込んだ。

「マルコフが狙われる！ 防衛しろ！」

アスラがインドラで雷撃を降らせる。だが、雷はただの一発も命中しない。日輪が大量の鶴を召喚して、防衛を一手に引き受けていた。

雷真が目前まで迫ると、マルコフは背中を向け、舞台の外へと駆け出した。

「あつかーん！ もう一時間経つとった！ 逃げられたら、しまいですよ！」

六連が悲鳴をあげる。六連が危機した通り、マルコフは自動人形を脱出させようとしていた。舞台を蹴らせ、観客席へと跳躍させる。

そのとき、舞台を割って、ケルビムの短剣が飛び出した。

マルコフの自動人形を空中で貫き、スクラップにしてしまう。

冷静ぶっていたマルコフの表情が壊れた。

「なぜだ!? 足もとを何かが動いてるような気配はなかった!」

アスラ陣営に戦慄が走り、誰もが床下に注意を向けた。

雷真は嬉しくなり、ロキの背中をばしばし叩いた。

「抜かりねえな、おい! 腹黒すぎるぜ!」

雷真にはカラクリがわかっている。手品のタネは開幕直後——ロキが突出し、苦し紛れにまき散らしたように見えた、あの短剣攻撃だ。あれからロキは短剣を使っていない。敵が逃亡するのを計算に入れ、ずっと床下に待機させておいたのだ。

「く——下がれ! 態勢を立て直す!」

アスラが指示を飛ばす。だが、それは無意味だ。

陣形を整えるアスラたちを尻目に、雷真たちはそろって舞台から飛び降りた。

「悪いな、アスラ! 俺たちは帰って寝るぜ!」

開始から一時間が経過している。もはや、雷真たちには戦う理由がない。

観衆が呆気にと取られたように沈黙し、数秒遅れて大きな拍手が起こった。

だが、客席の興奮も雷真たちには無関係だ。

そろそろと入場ゲートに戻り、疲れきった体を壁にあずける。

「やれやれ……どうにか、今夜は乗り切ったか……」

雷真はその場に座り込み、乱れた呼吸を整えた。

体力の限界だ。誰も口にはしないが、皆が共通する想いを抱えていた。

明日はもう——もたないかもしれない。

「ラビとフレイがマルコフに勸付いてくれて助かったぜ。……フレイ？」

フレイは乳房のあいだに手を当て、ひ、ふ、ひ、ふ、と浅い呼吸を繰り返していた。

ガラム夫たちが落ち着きなく主の周りを歩き回る。

「フレイ……どうした、おい——」

いきなり体を（く）の字に折って、前のめりに倒れる。

フレイはそのまま手足を縮め、猫のように丸くなった。

## 5

「どう、シャル？ 貴女が私に何をしたか、思い出せた？」

ロッチはくすくすと、シャルの神経を逆撫でするような笑い方をする。

「ひどいことを言ったわよねえ。消えろとか何とか。今さら、私に何の用——ああ、言わなくていいわ。わかつてるから。精霊の力を借りたいのよね？」

妖精のような美貌に、ときつい悪意が満ちる。

「身勝手な女ねえ。友達とあんなひどい別れ方をしておいて、いざ必要になったら、てのひらを返したように会いにくるのね。厚かましいにもほどがあるわ」

シャルはシグルドの首を撫でながら、黙ってロッテの言葉を聞いていた。

「貴女はいつもそう。外面と世間体だけ大事にするの。私は高潔な人間ですって顔をして、下々の者を見下してるのよね。そんな態度だから孤立するのよ」

「……………」

「貴女はそんなに綺麗きれいな人間？ 心の中は醜い嫉妬と独占欲でいっぱいじゃない。たとえば——そう、夜々ややなんて本当はいなくなればいいと思ってるのよね？」

「……………」

「ライシンにべったりくっついて、邪魔よねえ？」

「……………」

「ビノワのことも、本当は鬱陶うつとうしいのよね？」

「……………」

「あんな子がライシンの婚約者だなんて頭にくるわ。何の苦勞もなく嫁よめよ花よと育てられて、おめでたいったらないわね」

「……………」

「貴方あなたは独りぼっちが嫌で、話し相手が欲しいだけ。だから二人に我慢しているの」

「……そうね、そうかもしれないわ」

ロツテは目をむいた。だが、すぐに元通りの嘲笑もやうしやうを浮かべる。

「あら、そんなこと言っちゃっていいの？ 貴方の『高貴な』誇りはたもてるの？ ねえ、いい子のシャルロツトちゃん？」

かつてのシャルなら、傷つき、心を乱されたかもしれない。

だが、シャルは腹を立てるでもなく、穏やかな気持ちでロツテと向き合っていた。だって——すべてが、小さなことだ。

シグムントの死に比べたら、何もかもが小さい。

「……何とか言いなさいよ。それとも、認める気になったのかしら？ 本当は卑しくて、下品で、浅ましい、見てくれだけの女だって！」

シャルはくすり、と微笑ほほえみんだ。

「責め方がぬるいわよ、ロツテ。私、もつとひどいことを言われたわ」

アリスがアンリを人質に取り、シャルに時計塔を破壊させたとき——

「私、アンリを譲りたくて必死だった。なのに、私がアンリを大事にするのは、優越感に浸るためだって言われたの。悔しかった……でも、言い返せなかったわ。それはきつと、心のどこかで、そうかもしれないと思ったから」

シグルドを抱きしめ、優しく微笑む。



「貴女あなたの言う通りよ。私はずつと、いい子でいたいと思つていた。ずつと綺麗きれいなままで、汚い感情を追い出して、安っぽい誇りを護まもろうとしていた。でも——」

目線を上げ、ロツテを正面から見つめる。

「ねえ、貴女はどう思っているの？」

「どう……つて？」

「シグムントは死んだのよ。貴女は、そのことをどう思っているの？」

くしゃり、とロツテの顔が歪ゆがんだ。

「……つらいわ。心から、つらい」

「お小言ばかり言つて、理屈っぽくて、口やかましかったのに？」

「そうよ！　口うるさかったけど、シグムントは優しかったわー」

「そうね……つらいわね。私も同じ気持ちよ」

「嘘よー　シグムントのことなんて、貴女はどうでもいいんだわ！　便利な道具がひとつ

減つたから、損をしたと思つてるだけ！」

「……そうね。いつの間にか、私はシグムントを道具もぐみたいに扱つていたのかもしれない。

私の甘い判断が、シグムントを死なせてしまった」

あふれそうになる想いおもいをこらえ、シヤルはロツテを見つめ続ける。

「でも、この気持ちは本当よ」

「嘘つきー つらいと思うなら、貴女はどうして泣いてないの!？」

叫んだ瞬間、ロツテの目から涙のしずくが飛び散った。

「どうして平気な顔をしていられるの!? そんな、取り澄ました顔ー」

「シグムントが大好きだから」

ロツテが怯む。シャルは一步踏み出し、ロツテとの距離を詰めた。

「だから、私は立ち止まっているわけにはいかないの。泣いているわけにはもう一步。さらに一步。少しずつロツテに近付いていく。」

「私はシグムントの仇を討つわ。このシグルドと一緒に」

「……つらいから復讐? おめでたいわねー くだらない自己満足ー そんなことをしてシグムントが甦るの? 喜ぶと思うの? 貴女は言い訳が欲しいのよ。私はシグムントのために頑張ったって——そうして、自分を慰めたいだけなんだわー」

「そうかもしれない」

「……………っ」

「でも、間違えないで。私はオルガに復讐したいわけじゃない」

「だったら、誰に復讐したいの!？」

「弱い私に復讐するの。弱いままの私じゃ、シグムントに申し訳ないから」  
ロツテがはっと息をのむ。シャルは胸元に手を当て、誓うように言った。

「私は強くなりたい。シグムントが誇ってくれるような、一流の魔術師になりたい。立派な娘に成長したなって、心から言ってもらえるくらい」

ロッテの頬を、大粒の涙がすべり落ちた。木漏れ日を浴びて、涙は星のまたたきのように光る。ぬぐってもぬぐっても、後から後から涙があふれ、止まらない。

「私も……っ、同じ気持ちよ……シャル！」

この気持ちだけは、裏も表もない——

二人をつなげる、本当の気持ちだ。

シャルは腰をかがめ、泣きじゃくるロッテに目線を合わせた。

「貴女が言う通り、私は卑しくて、弱い女の子だわ。でも、そんな私を友達だと言って、支えてくれるひとたちがいるの。なぜだかわかる？」

「……わからないわ！」

「それはね、私にもきつと、いいところがあるから」

「——」

「貴女が言ったこと、確かに私の一面かも知れない。私は綺麗ただけの人間じゃない——同じように、汚いだけの私でもないわ。それに」

くすつと笑って、言い添える。

「貴女が存在を否定するなんてバカげてるわよ。貴女がいなくなつて私、夜々とケンカし

たり、ヒノワに嫉妬したり——フェリクスを恨んだりしたもの」

ロツテは手の甲で涙を払い、泣き濡れた眼でシャルを見上げた。

「私を……受け入れるのね？」

「貴女は私、私は貴女よ」

「……大人になったのね、シャル。……今の貴女なら」

どちらからともなく手を取り合い、指をからめる。幼い日にそうしたように、少女二人は至近距離で微笑みをかわし、互いのひたいをくつつけた。

やがて、二人の影がひとつに重なる。

自分の中に入ってくるロツテを、シャルはシグルドごと抱きしめた。

幸せな午睡から目覚めたような気分で、シャルはゆっくり目を開けた。

永遠の木漏れ日の代わりに、たき火の明かりが見える。あれほど広大だった庭は、薔薇の生垣で囲まれた、小さな中庭になっている。

夜空はいつしか白々として、夜明けが近いことを告げていた。

一晩中、立ち尽くしていたらしい。体は冷え切り、筋肉がガチガチになっている。でも、不思議と心は暖かかった。

シグルドがあくびをする。シャルはシグルドを帽子にのせて、生垣を出た。



中庭のすみでグリゼルダがたき火に当たっている。機械天使の姿が見えないが、状況をたずねる前に、グリゼルダが携帯炊事具のカップを差し出した。

「飲め。温まる」

「あ……ありがとうございます」

カップの中には熱いミルクが注がれていた。シャルはふうふう冷まししながら、シグルドと分け合ってミルクを飲んだ。

「どうやら、無事に精霊感應力を取り戻したようだな」

「はい」

自分でもわかるくらい、自信に満ちた声だった。

事実、シャルの目にはもう視えている。たき火に宿る炎の精、踊る風の精に、歌う薔薇の精。魔術師として成長した今、子どもの頃よりも鮮明に知覚できた。

「少し休憩したら、鍛錬を始めるぞ。時間をかけてはいられない」

——そうだ。もう夜が明けようとしている。かなり時間を使ってしまった。

みんなはどうしただろう？ オルガは勝負の決着を待ってくれただろうか？

「心配無用、あちらは上手くやっているそうだ。むしろ、こちらの方がまずい」

「え……どういう意味ですか？」

「不法侵入したことが当局にかぎつけられたようだな。夜が明けたら、おそらく第三波が

やってくる」

「三波つて……第二波は既に蹴散らした後っ？」

機械天使がここにいない理由を悟る。見張りに立たせているのだ。

「幸い、この屋敷の精霊たちはおまえに好意的なようだ。感覚をつかむにはもってこいの練習相手となるだろう」

厳しくも優しい視線をシャルに向け、強く言う。

「今日中にものにしてみせろ。プリューの名を継ぐ者よ！」

「はい！」

シャルは居住まいを正し、凛々しく応えた。

（もう迷わない。私は——）

私たちは、もっと強くなる。

大好きな竜に、誇ってもらえるくらい。



## Chapter 6 帰還



1

「貧血だ」

クルーエルの声は、どこか投げやりに聞こえた。

医務室の中から、廊下の雷真<sup>らいしん</sup>たちに診断結果を告げている。

彼らが交わす会話を、ロキはベッドサイドで聞いていた。目の前にはフレイが寝ていて、ガラム犬が忠実な護衛のように取り巻いている。

「そういうことだから、心配しないで寮に戻れ。クソして寝ろ」

「……ならいいけどよ、あんたのその顔はどうしたんだ？ 火傷<sup>やけど</sup>？」

「どうもこうもねえ！ 聴診器当てようとしただけで、ロキの野郎<sup>やろう</sup>が——」

「オレたちの心臓は機巧だ。心音などどうでもいい。ことさら胸に当てる必要もない」  
思わず口を出してしまう。雷真の声が若干、硬くなった。

「そうか……フレイの胸に妙なことをすると、ケルビムに焼かれるのか……」



「……どうしてビビってるんですか雷真？」

「び、ビビってねえー」

「そんなにもみたいなら夜々のをもんでくださいー 夜々のをー」

「もみたいなんて言ってないだろー」

「もう！ 自分でもみますーっ！」もにゅもにゅ。

「や、やめろバカ！ はしたない！」

「雷真さまが反応を!? ひ、日輪だつて……日輪だつて……っ！」

「あかんー やめえ、お嬢！」

「こ……こう……すれば、よいのでしょうか？」ふにょん。

ぶばっ、と血が噴き出るような音がした。なぜか三人分。

「は、鼻血なんて……夜々にはもう、噴いてもくれないのに……っ」

うちひしがれたような夜々の声が哀愁を誘う。

「ああもうおまえら、バカやってないで爆りやがれ。あとライシンは爆発しろー」

「俺の体も限界だぞ！ 少しは気遣えよ！」

クルーエルが一同を追いつ散らす。仲間たちはしばらく医務室の様子をうかがっていたが、やがてあきらめたらしく、ぞろぞろと戻って行った。

彼らが去ると、ロキはフレイの胸に手をかざし、意識を集中した。

魔力を張り巡らせ、そつと内側を探る。

クルーエルがドアを閉め、鼻血を拭きながら寄ってきた。

「どうだ？」

「……処置は上手くいったようだ。血栓は先ほどの念動で破碎されている」

「そりゃよかった。手術しちまったら、フレイちゃんの夜会が終わっちゃうからな」

やれやれというふうに嘆息し、横目でロキを見る。

「わかってるんだろ、〈剣帝〉くんよ。血栓は人工心臓の宿命だ。血が減って血流が滞れ

ば、血栓のリスクはますます上がるぜ。……例の裏技、控えた方がいい」

「……わかってる」

「なら、いい」

うるさく言わず、クルーエルは病室を出て行った。

ラビがビスビス鼻を鳴らして、ベッドの上にあごをのせる。フレイは目を開け、愛犬の

頭を撫でてやった。

「気分はどうだ、バカ姉貴」

「……大丈夫。ありがとう」

「一昨日、血を使いすぎたな。これ以上無茶をすれば、心臓の制御を失うぞ」

「うん……でも、勝つためだから」

ロキは胸が苦しくなり、イラついた声で言った。

「自分のことも満足にできないくせに、他人の重荷を背負おうとするな」

「……それは違うよ。私は弱いから、みんなの足を引っ張って、迷惑かけないと、生きていけない。だから、みんなのために……できることをするの」

そう言った姉の口元には、幸福そうな微笑<sup>ほくそ</sup>みが浮かんでいた。

「弱いから、みんなのために、頑張るの……」

すう、と力が抜け、静かになる。

「——姉貴？」

反応がない。代わりに、小さな寝息が聞こえてきた。

ロキは奥歯を噛<sup>か</sup>んで、こぶしを握った。

「……あんたは強いさ。オレよりも、ずっと」

もちろん、技能で言えば、ロキの方がはるかに優秀だ。

ロキは決して自分を甘やかさない。学業も、魔術も、戦闘訓練も、すべてに手を抜かず、徹底的に磨き上げてきたつもりだ。だが、それは決して苦痛ではなかった。

なぜなら、ロキは自分の才能を疑っていない。磨けば伸びる。鍛えれば強くなる。その確信があり、報われるとわかっている努力なら、さほど苦にはならない。

だが、姉は違う。努力はしているのに、勘が鈍く、空回りばかりだ。



もし、自分がその立場なら、早々にあきらめていただろう。

愚直なまでの姉の努力を、ロキは知っている。

だからこそ、この姉を護りたいのだ。

寮に戻ろうと、腰を浮かせた途端、よろめいた。

フェニックス戦のダメージがまだ回復していない。一昨日も、ゼカルロス兄を倒すために無茶をした。もともと、姉弟の体はそれほど丈夫ではないのだ。

「……この点ばかりは、あのバカの体がうらやましいな」

苦笑してしまう。雷真が持つ頑健な体——疲れ知らずの健康的な肉体。あれが自分にもあれば、もっと上に行けるだろう。

ロキは心の中でおやすみを言って、姉の病室を後にした。

## 2

夜が明け、日が落ち、再び夜会が始まる時刻となった。

この時間になっても、シャルは戻ってこなかった。

雷真はロキの部屋で身支度を整え、コロセウムへと出発する。

「じゃあ、いりり——今夜も頼む」

「お任せください」

いろりは気負った様子もなく、いつも通りの落ち着いた声で応じた。

「悪いな。硝子さんの護衛もあるのに」

「主のことはご心配なく。小紫がついております」

それから、ふと表情を曇らせて、夜々の顔をのぞき込んだ。

「夜々……その……大事ないか？」

「夜々は平気です」

「……そうか。気をつけて行け」

そつと夜々の頬に手を触れる。……何か言いたげだ。雷真は怪訝に思ったが、いろりが黙ってしまったので、聞いただすようなことはしなかった。

出がけに一度だけ振り返り、エドガーに念を押す。

「なるべく早く戻る。キンバリー先生か、学院長か、あるいはバカ王子が攻めてきたら、

あんたはとにかく逃げ延びてくれ」

「もちろんだ。そのときは、頭を抱えて逃げるよ」

「——よし、行くぞ夜々」

「はいー」

気合十分の夜々を連れ、雷真は口キの部屋を出た。

コロセウムに向かう途中、ふと疑問がよぎった。

「雷真、どうかしましたか？ 景気づけに夜々のをもみたくなりませんか？」

「ならんー さっきの……何か、おかしくねえか？」

「え？ 何がですか？」

「シャルの親父さんだ。さっきの言葉……」

「気を散らすな。返り討ちに遭うぞ」

鋭い言葉を投げつけられ、雷真の意識が現実に戻ってくる。

コロセウムの前で、ロキとフレイが待っていた。

ロキはふんと鼻であしらい、入場ゲートの奥を親指で示した。

「今夜の標的は豪胆だ。逃げも隠れもしていない」

「そりゃ助かる。相手は誰だ？」

「その目で確かめればいいさ」

意味ありげな返答。ロキの表情は硬い。フレイの顔にも緊張がある。

雷真は急いで入場ゲートをくぐり、舞台の方をうかがった。舞台上ではもうアスラ一派がたむろしている。今夜の新たな挑戦者は――

「（下から一番目）――」

ヴェイロンだ！ 甲冑をまとった武装状態で、舞台の上に立っている。

観客も驚いているらしい。ひそひそと噂する声が、ここまで聞こえてきた。

「学院創設以来の劣等生って奴か?」「そりゃ白紙答案を出したからだ。実力はマグナスに迫るって話だぞ」「真偽のほどは、すぐに明らかとなるでしょう」

最低の成績を記録しながら〈十三人〉に抜擢された、真正正銘のダークホース。

「あいつ……アスラと同盟を結んだのか?」

「さあな。だが、明らかに貴様を狙っているぞ」

ロキの指摘通り、ヴェイロンの視線はいつしかこちらに向いていた。

冷たい殺気のようなものが飛んでくる。早く上がってこい、とでも言いたげだ。

雷真のとなりで夜々が体を強張らせ、気遣わしげに雷真を見上げた。

大丈夫だ——と簡単に答えてやることはできない。

日輪の魔力は戻っていないし、雷真とロキは満身創痍。六連の怪我も完治にはほど遠く、昂は不参加で、フレイは昨日倒れたばかり……。

はつきり言って、こちらは疲弊している。この状況で、アスラ陣営の妨害をかくぐり、ヴェイロンを倒さなければならぬとは。

「……やるしか、ねえ」

「当たり前だ」

ロキは平然と言った。呆気に取られる雷真に、ふっと笑って問いかける。



「マグナスを倒そうというバカが、この程度の連中に音を上げる気か？」

(……ありがとよ、ロキ)

口には出さないが、深い感謝を胸に刻み、雷真らいしんは一同を見た。

「なら、行こうぜ。戦いの舞台へ」

「はいー」「参りましょうー」

夜々と日輪ひりんが元氣一杯いっぱいに応じる。フレイもきりつとした顔でうなずいた。

舞台上上がる雷真たちを、大歓声が迎えてくれる。

会場は超満員。夜会の大詰めを感じさせる客の入りだ。

舞台のすみにはオルガが、その対角線上にソーネチカが立っている。

舞台中央で待つののはヴェイロン。その奥に、アスラとその同志たち。

広い交戦フィールドが狭く感じるほどの人数だ。大氣に熱氣と魔力が満ち、災厄の予感

めいたものが学院を支配していた。

### 3

「魍魎もうりょう惡鬼焼滅せしめよ、インドラー」

先手を打って、アスラが仕掛けてきた。

雷光が天に走り、稲妻が降りそそぐ。こちらが弱っていると踏んで、勝負を決めにきたようだ。

一瞬で落ちてくる高圧電流を、日輪の式神が遮断する。

式神は一撃で破壊され、呪符が次々と燃えていく。アスラは手をゆるめず、さらに稲妻を放つ。いつしか上空には雷雲が集まり、空は曇天となっていた。

日輪の召喚が追いつかず、押し切られそうになったとき、不意に雷がやんだ。見上げると、上空で大剣が回転している。

いかなる魔術か、ケルビムの噴き上げる炎が雷電を吸い寄せていた。

「アスラはオレが抑える。おまえたちは〈下から一番目〉をやれ」

一方的に宣言し、インドラにケルビムを急降下させる。

インドラが受け、鐔で迫り合う。その体勢では放電できないのか、雷撃がやんだ。

「盟主を助ける!」「アスラさまを援護する!」

アスラ一派が一斉に動き、静止状態のケルビムを狙った。しかし――

「みんな、ケルビムを護って!」

「がう!」

ガラムたちが一斉に吠え、アスラ陣営の進路を〈音の砲弾〉で塞いだ。

「雷真! きます!」

フレイを氣遣う暇もない。雷真のすぐ前に、落雷のごとき鉄拳が降ってきた。ヴェイロンのこぶしだ。生身で食らえば無事では済まない。

「……不意打ちとは恐れ入るぜ」

「甘えるな。おまえは舞台に上がった。つまり、自ら獅子の檻に飛び込んだ！」

突っ込んでくる。雷真は金剛力を全開にして、その一撃を受け止めた。

「自分で獅子とか言うな！ 最下位野郎！」

「黙りやがれ！ 実質最下位野郎！」

力と力が拮抗する。ここから熾烈な戦いが始まる——かと思われたが。

「雷真さま！ ロキさまのお部屋に、誰の気配もありますん！」

いきなり日輪の悲鳴があがった。耳に手を当て、遠くに意識をやっている。

動揺したのは雷真だけではない。夜々の腰が抜け、声が震えた。

「姉さまがやられたんですかっ!? そんな、まさか……っ！」

「落ち着け夜々。一緒に逃げたのかもしれない」

「いえ、それ以前に、わたくしの結界に触れた感じがしませんでした。誰かが入り込んだ

感じも、出て行った感じも……。急いで応援の式を向かわせま——」

言葉さえぎって、ヴェイロンの攻撃がくる。日輪はとつさに（婦守磨）を召喚したが、壁妖怪は一撃で粉碎され、鉄拳が日輪の影をかすった。

相当に、きわどい。下手をすれば、式神しきがみごと日輪がやられていた。

ヴェイロンはすぐさま反転し、今度は夜々を追った。

たちまち肉弾戦になる。だが、明らかに分が悪い。あちらの一撃は夜々に流血をもたらすのに、こちらの一撃はまるで手こたえがない。

（くそ……どうすりゃいいんだ……!?）

エドガーというりは行方不明。シャルはまだ戻らない。アスラの妨害は厳しい。こんな状況で、この怪物——ヴェイロンに勝たなければならぬ。

妙案など浮かぶはずもない。モタついてるうちに、ヴェイロンがこぶしを引き、膨大な魔力を収束させた。前の戦いで見せた（必殺技）だ！

だが、必殺の一撃が放たれる前に、ヴェイロンのかぶとが爆発した。

気がつけば、六連の榎葉蝶むくろはもようが宙を舞っている。さすがに無傷とはいかず、ヴェイロンはかぶとを碎かれ、爆ひらけたひたいに一筋、血が流れた。

ヴェイロンは雷真に背を向け、ゆっくり六連に向き直る。

「——まずい！ 逃げろ六連！」

警告したが、間に合わない。あるいは、殺氣に当てられ、足がすくんだのかもしれない。六連は反射的に式神を呼び出し、防衛の態勢を整えた。

それを見たヴェイロンは薄く笑い——

そのまま、こぶしを繰り出した。

両者の距離は十数メートルもあった。こぶしが当たるはずのない距離だ。六連は式神を  
 三体も呼び出し、盾にした。それなのに――

「がつー」

何かが六連の肩に当たり、六連は枯れ葉のように宙を舞った。

砕かれた式神がむなしく消え、六連がのたうち回って苦しむ。

苦しみ方が普通ではない。肩の骨を砕かれたか……？

「六連ー」

日輪があわてて駆け寄る。しかし、もちろん、ヴェイロンの方が速かった。

一瞬で日輪に迫る。日輪は反射的に式神を召喚したが、それがヴェイロンの狙い通り。

ヴェイロンはにやりとして、式神ごと日輪を貫こうとした。

絶体絶命の危機を、大ぶりの大剣が救う。

燃える炎の剣がヴェイロンに振り下ろされる。カウンターを嫌ったのか、ヴェイロンは  
 攻撃をやめ、飛びずさった。雷真はほっとして、日輪のもとへ駆け寄った。

「ロキ、悪いー 助かったー」

「気を抜くなー 大爆発バカがー」

「す、すみませ……っ」

「お、おまえに言ったわけじゃない！」

泣き出す日輪に背を向け、ロキは六連を示した。

「隙を見せるな。さっきの一撃が有効なら、術者を壊されるぞ」

六連はまだ口もきけずにいる。それでも、執行部の違反警告はない。先刻のヴェイロン  
の攻撃——術者を狙ったようにも見えるあれば、アリだったようだ。式神を破壊した後、  
勢いあまって術者にも当たった……という扱いだろう。

正直なところ、手に負えない。

あのリーチにして、この威力。予測できない速さ。規格外すぎる。

「装着した人間を強化するっていう鎧……どつかの神話になかったか？」

「あつたとしても、あれは自動人形だ。破壊の方法はある」

「ああ、そうだろうさ。だが、すぐには思いつかねえー」

これほどの苦境は、夜会開幕以来、初めてかもしれない。

「こうしているあいだにも、親父さんが……！」

「行け」

さらりとロキは言った。

つい先日、日輪の身に危機が迫ったとき、言ってくれたのと同じ言葉を。

「たった今、戦線にイキのいいのが入った。貴様よりは使えるだろう」

「おお、わかつとるやないか、兄ちゃん」

昂が腕まくりをして、日輪のとなりに着地した。

「昂……おまえが上がつてきたら——」

「言うところの場合か！ 六連がやられよつた！ お嬢を護るモンがおらん！」  
ざらつと呪符の束を取り出し、苦しげに唇をゆがめる。

「……堪忍な。シャルロットちゃんには悪いが、俺はお嬢を見捨てられん」

「ああ……よく知ってる」

「さつさと往ね。おまえには——やらなあかんこと、あんのやろ？」

「雷真はん……ここは僕らで何とかしますよ……」

六連もあえぎあえぎ言う。立ち上がることもできなくせに、無理やり笑っている。

雷真はなおもためらった。

「ヴェイロンを倒せたとしても、シャルが戻らなかつたら……どうする？」

「優柔不断バカが。そのときは、スバルを始末すればいい」

「そうなるんかい！ ええとこなしか俺！」

昂がロキに突っ込み、やがて、あきらめたように嘆息した。

「ま、しゃーないわ。後生大事に資格持つとつたところで、俺が魔王なれる気イもせん。  
シャルロットちゃんが戻らんかつたら、大人しゅう降参したる」

「昂……恩に着る！ 行くぞ夜々！」

「はい！」

雷真は夜々を連れ、敵に背を向けて、舞台の外へと駆け出した。

「雷真さま、これをお持ちください！ 捜索のお役に立ちます！」

日輪が呪符を投げる。それは鳥のようになめらかに飛び、雷真の手に収まった。背後の戦鬨音に後ろ髪を引かれながら、雷真はラファエル男子寮へと走った。

## 4

「いろり！ いろのか!？」

寮の外壁を蹴って、ロキの部屋まで跳躍する。

窓に張りついて中をのぞくと、いろりは糸が切れたように倒れていた。

着物のすそがはだけ、まくれたベチコートからふとももがのぞいている。

血の気が引く。雷真は乱暴に窓を開け、中に飛び込んだ。

「いろり！ しっかりしろ！」

抱き起こす。肌がひんやりと冷たい。どういいうわけか、体内の魔力循環が滅茶苦茶だ。破壊されたのではないか——という不安はしかし、どうやら杞憂だった。



いろりは薄目を開けて、幸せそうにつぶやいた。

「ありがとうございます……人形にすぎぬ私を、雷真殿は女にしてくださいました……」

「寝ボケてる場合か！　つか、どういう意味だそれ！」

「姉さま……………ついにそこまで……………」

猛烈に狂う夜々を押しのけ、雷真はいろりに詰め寄った。

「親父さんの姿がない。何があった？」

いろりはすぐさま我に返り、その場に正座し、手をついて詫びた。

「申し訳ありません……。このいろり、一生の不覚にございます……」

「襲撃されたって感じじゃねえな。窓もドアも閉まつた」

「それが……何が起こったのか、まるでわからず……。気がついたときにはもう、雷真殿と一糸まとわず闇の中でして……」

「それ気がついてねえからな？」

つまり、一瞬で機能停止に追い込まれたのか。このいろりが？

魔力循環系を乱されたようだ。禁忌人形である雪月花は、使い手が側にいない状況では、自前の魔力で活動している。その流れを阻害されたことで、稼働レベルが（停止）に近いところまで落ちたのだらう。

魔力循環の妨害——それができるとすれば、並みの魔術師ではない。まして、この部屋

は日輪の結界で監視されていた。魔術を使えば、すぐにわかるはずだ。

（無警戒のところを結界の中から狙ったか？ それができる人物は——）

心配していた反動か、日頃の仕返しか、夜々はここぞとばかりに言った。

「姉さまったら、だらしがないです。普段、夜々には『気が抜けている』だの『たるんでいる』だのと、姑みたいな口やかましきのくせして」

「め……面目ない……っ」

正座したまま、めそつと涙ぐむ。こんないろりを見るのは初めてだ。ちよつと可愛いと思つた瞬間、夜々から強烈な冷気が漂ってきて、雷真はあわてて顔を背けた。

「とにかく、いろりはここから動くな。無茶して体を壊したら、硝子さんに申し訳ない。俺と夜々は親父さんを探す」

一方的に言い置いて、夜々と窓から飛び出す。エドガーの行き先に心当たりはないが、こうなることを見越して、日輪が呪符をくれている。

ふところから呪符を抜き出そうとしたとき、頭上——夜の闇を何かがかすめた。

「吹鳴八衝——」

「はい——」

夜々が地を蹴り、空中の相手に襲いかかる。

相手は俊敏だった。黒いマントをはためかせ、鳥のように身軽にかわす。のみならず、

空中で向きを変え、雷真めがけて急降下してきた。

まるで猛禽だ。相手が右手を向けただけで、途方もない恐怖が心臓を貫いた。

「山鳩の同胞！ お待ちを！」

相手が身をひるがえす。それで、死の予感が消えた。ばくばくという心臓の音を耳元に聞きながら、雷真は助けてくれた者を振り返った。

キンバリーだった。こちらも黒マントを羽織っている。

雷真は天を仰いだ。よりによって、魔術師協会にケンカを売ってしまったらしい。黒マントの男が洪い声でキンバリーに訊いた。

「どうする、鴛の同胞。排除するか？」

「……説得してみます」

「通じる相手かな？」

「こいつはバカですが、そこまでのバカではありません」

キンバリーは雷真の肩に手を置き、言い聞かせるように言った。

「よく聞け、〈下から二番目〉。これから機巧都市に隕石が降りそそぐ」

言われた意味がわからず、雷真はぼかんとした。

「隕石？ 何だそりや……誰が言ったんだ？」

「教父の予見だ」

「予見……って、予言みたいなもんか？ 根拠は何だ？」

「寝ぼけたことを言うな。魔術師の予知、聖職者なら預言や天啓と言うだろう。いずれにせよ、教父（時の翁）の予見は絶対だ。そして、予見と状況から導き出される推論はこう——ブリュー伯爵が今夜、機巧都市を攻撃する」

「……どうやって？」

「結社の秘法、〈万物流転〉を使つてだ」

——エドガーが言っていた「切り札」のことか？

「時空間制御魔術の代表格だ。もつとも、魔術師一人にできることはたかが知れている。伯爵の目的は因果の改竄や逆転ではなく、未来方向へのスライドだろう。すなわち、未来に起こるできごとをこの時間軸まで引き寄せて——」

「意味がわからねえ！ 劣等生の俺でもわかるように言ってくれ！」

「いずれ降る流星群を、今夜降らせようと言うんだよ」

「はあ？ そんなことをして……何の意味がある？」

「神性機巧の誕生を早めるつもりだろう。予見では、神性機巧が誕生する直前に、先触れとして星の雨が降ることになっている」

「馬鹿げてる……それは順序が逆だ！」

流星が降ることでは何かが起きて、それが神性機巧誕生のきっかけになるというのなら、

理解できる。だが――

「単なる前兆なら、早めたところで意味がない」

「それが魔術だ。君とは以前、〈呪い〉の話をしただろう。わら人形に釘を打ったところで、ダメージを受けるのは人形であって、人間ではない」

「だが、人形に釘を打てば人間にダメージが及ぶ――これが魔術の思考だ。つまり、人間の認識ではなく、世界の認識を欺く」

それが魔術的な思考。魔術世界の物理法則。

「理解できたようだな。今、流星群が降れば、機巧都市は壊滅する」  
今になってようやく、雷真は先刻覚えた違和感の正体に気付いた。

夜会に向かう前、エドガーは言った。「頭を抱えて逃げるさ」と。

エドガーは知っていたのだ。脅威が天から訪れるということ。

「わかったら、伯爵の居場所を吐け。君では伯爵を守れまい？ 魔術師協会が保護すると  
言っているんだ」

「保護って言えば聞こえはいいが、要は監禁するってことだろ？」

「……伯爵はダイダロスを設計した。黒太子の片棒を担ぎ、機巧都市を危機にさらしたのだ。結社とのつながりも暴かねばならない」

「そら、本音が出やがった」

雷真は笑って、キンバリーの手を払いのけた。

「シャルには今、親父さんが必要なんだ。簡単に渡すかよ」

「魔術師協会の庇護を失うぞ！ 伯爵を渡せ！」

「断る」

キンバリーはこめかみをひくつかせながら、仲間の男を振り向いた。

「私が間違っていました。やはりこいつは、ただのバカ者です」

「優れた馬鹿者だと思いがね。君をそこまで熱くさせるとは」

男は興味深そうに、にやにや笑って眺めている。

「今しばしお待ちを。私がじきじきに指導してやります」

「何だ、先生。またありがたい補講でもしてくれるのか？」

「おいたをする子どもには、折檻だ」

「体罰じゃねーかー」

雷真が飛び退き、夜々がとんほを切って距離を取る。キンバリーが黒マントを払うと、

内側には赤、青、金と、色とりどりの宝石がホルドされていた。

魔石——魔術回路か。キンバリーの専門は〈機巧物理学〉。魔術原理を研究する学問だ。

つまり、キンバリーは魔術回路のエキスパートと言っている。

「雷真、どうします?」

「……相手がキンバリー先生じゃ、ぶっ飛ばすのは気がひけるぜ」

「生意気を言うな。その気になれば、ぶっ飛ばせるみたいじゃないか」

「そう言ったんだ」

「では、立証したまえ!」

蒼い寶石を手取る。その途端、石の表面にバリツと雷電がすべった。

寶石をこちらに向けただけで、攻撃魔術（雷の矢）が生じた。

撃たれてからではかわせない。発動の寸前、夜々は姿勢を低くして狙いを外す。

「吹鳴 九 六衝!」

雷真の魔力を受け、夜々は紫電のごとき速度でキンバリーに迫った。キンバリーの正面に魔法陣が浮かび上がり、魔術の防壁となつて夜々を受け止める。

硬い。だが、夜々は以前、エドマンドの魔術防壁を突き破っている。このまま押し切れる——かと思つたが、魔法陣が角度を変え、夜々をいなしてしまった。

（上手い! そらした!）

エドマンドとは技量が違う。体勢を崩した夜々に、背後から稲妻をプレゼント。夜々はびくんと身をそらし、後方へ吹っ飛ばされた。

「夜々!」

「人形の心配をしている場合か」

というキンバリーの声は、雷真のすぐ真後ろで聴こえた。

銃口らしきものを背中当てられ、身動きが取れなくなる。

「この弾丸は魔抗銀<sup>マジコウぎん</sup>でできてるんだがね。花柳京殿<sup>はなやなぎぎみ</sup>の〈金剛力<sup>こんどうりき</sup>〉がどれだけ抵抗できるか、試してみるかね？」

「……実験は嫌いじゃないぜ。座学より好きだ」

「私もだ」

キンバリーの指に力がこもり、引き金がかすかに軋<sup>ゆが</sup>みをあげた。

魔術を打ち破る銀が、冷たい銃身から撃ち出される——寸前。

頭上から凄まじい圧力が降ってきた。

上からつぶされるような感覚が、居合わせた全員に襲いかかる。

夜々も、キンバリーも、例の男さえ、皆が大地に手を突いた。

一瞬後、強烈な閃光<sup>せんこう</sup>が天を裂き、市街地で大爆発が起こる。

天が震え、闇<sup>やみ</sup>が裂け、風がうなりをあげた。

遅れて飛んできた衝撃波が、絶句する雷真の顔を激しく打つ。

そこで、ようやく理解が追いついた。どうやら本当に——隕石<sup>いんせき</sup>が落ちたらしい。

「鶯<sup>うぐいす</sup>の同胞」



黒マントの男がキンバリーを呼ぶ。

「ここを離れよう。伯爵はもう寮にはいない」

「そんなはずは——私の探知結界は維持されています。伯爵は寮を出ていません」

「抜けられたのだよ。我々は彼を甘く見すぎていたようだ」

男子寮、ロキの部屋を見上げ、むしろ痛快そうに笑う。

「さすがは〈活殺結界〉、その二つ名は健在と言ったところか」

「笑いごとではありません！」

怒鳴るキンバリーの頭上で、さらに星が流れた。今度の光はわずかに遠い。市街をそれて海に落ち、普段では考えられないような、凄まじい水音が立った。

キンバリーは舌打ちをして、銃をしまった。

「命拾いしたな、〈下から二番目〉。君にお灸を据えるのは後だ！」

仲間とともに樹上へ跳躍し、夜の闇にまぎれてしまう。

二人の気配が遠ざかると、雷真は深い息をつき、脱力した。

「……お灸のことは考えたくねえな。とにかく、俺たちも親父さんを探そう」

今度こそ、ふところから日輪の呪符を取り出す。

使い方はわからなかったが、手にしただけで、呪符は勝手に起動した。

雷真の魔力を吸って、黒い蜘蛛に変化する。あらかじめ魔術を仕込んであったようだ。

びくつとする夜々の前で、蜘蛛は尻から青白い糸を伸ばし始めた。

魔力の糸がたちまち網となり、学院中に広がっていく。

「……蜘蛛の巣？」

「どうやら、探してくれてるらしいぜ。……すげえ魔力を抜かれてる」

見る見る力を奪われる。しかし、その甲斐はあった。

くいくいっと巣が揺れ、震動が伝わってくる。

「獲物がかかったみたいだ。行ってみよう」

「はい」

蜘蛛の糸に導かれるまま、雷真は夜々とともに駆け出した。

## 5

「あかんてー！ これ絶対無理やてー」

爆音や打撃音が飛び交う中、六連の悲鳴が響いた。

極楽蝶が次々と炸裂するが、ヴェイロンは軽々かわして突っ込んでくる。

品の土蜘蛛が大量の糸を噴射し、べとべとの網でヴェイロンをからめ取った。

「あかん言うなド阿呆！ 今のうちに——ぬおっ！」

完全にとらえたはずのヴェイロンが、網をすり抜け、はるか後方に下がっている。

「速っ！ バケモンか！」

「昂、後ろです！」

日輪が鋭く警告を飛ばす。だが、ヴェイロンはとつくに昂の背後に回り込んでいた。強烈な鉄拳が繰り出される。

昂は前方に身を投げ、命からがら回避して、青ざめた顔でつぶやいた。

「あかんわ……こら手エ出せん！」

「あかん言うたらあかん！」

日輪が怒る。その前髪は汗びっしょりで、顔にも疲労がにじんでいた。

六連は肩を折られて戦力外、昂も日輪も限界だ。三人がヴェイロンに手を焼いている横で、ロキとフレイはアスラ一派に苦戦を強いられている。

指揮が的確なのか、思想的な協調性のせいかな、連携が巧みで隙がない。入れ代わり立ち代わり、ガラム犬に波状攻撃を仕掛けてくる。

ロキは舌打ちして、右腕の袖をまくった。

「このままではヴェイロンに逃げられる。敵の数を減らすしかない」

「血を使っちゃ、だめー！ ロキが死んじゃうー！」

「だが——」

「ああっ！ お二人とも、お気をつけて！ そちらに——」

日輪の警告も、ましてや式神しきでんも間に合わない。

ロキとフレイの頭上に、ヴェイロンが出現していた。

こぶしを引き、必殺の構えを取る。ケルビムがただちに反応、ロキを守ろうとしたが、あの一撃をもらえば、金属のボディはたちまち砕けてしまうだろう。

やられた。誰もがそう思った瞬間、ヴェイロンが閃光せんこうにのみ込まれた。

——いや、直撃はしていない。ヴェイロンは影のように動き、光をかわした。

「う……この光は……!?」

フレイが目を見はり、日輪が口を押さえる。

ふわりと風に乗って、金髪の美少女が天から舞い降りてきた。

大照明を浴びて髪がきらめく。妖精えんせいが現れたのかと思うほど美しい少女だ。青い帽子の上には、銅色はみどりいろの仔竜こりゅうがしがみついている。

どよめく大観衆。その視線を一身に浴びながら、少女は堂々と舞台に立った。

「待たせたかしら？」

照れ隠しなのが見え見えの、気取った態度で仲間言う。

「シャルロットさま！ 戻られたんですね！」

飛びついてくる日輪を抱きしめ、シャルは優しく微笑ほほえみんだ。

「遅くなってごめんなさい。ずいぶん心配をかけたけど——私はもう大丈夫」  
それから、舞台の外れ、オルガを振り向く。

「私は帰ってきたわ」

「そのようだ」

オルガはゆつくりと歩き出し、舞台中央に進み出た。

歩きながら、ヴェイロンに鋭い一瞥をくれ、よく通る声で言い放つ。

「君は舞台を降りろ。アスラとその同志たちも、軍を退いてくれ。たった今から、ここはオルガ・サラディーンと、シャルロット・プリューのための舞台だ」

ヴェイロンはじつとオルガを見て、意外にもすんなり引き下がった。こちらにはもう目もくれず、すたすたと舞台を降りていく。

一方、アスラはすぐには動かなかった。戦場を見回し、計算を働かせるような間を取る。その眼前に、単眼の機械人形が三体も降ってきた。

それぞれの胴体が左右に割れ、三体がつながって大蛇となる。

ソーネチカの機巧大蛇だ。扇で口を隠しながら、〈女帝〉は威圧的に警告した。

「無粋は許しませんことよ、アスラ」

「……一旦、退こう。皆、舞台を降りるんだ」

アスラ一派はソーネチカとの衝突を避け、速やかに撤収を開始した。

シャルは仲間たちの顔を順に見て、にこりと微笑んだ。

「みんな、ありがとう。あとは私がやるわ」

一同が一樣に驚く。シャルの口から、こんな素直なお礼が出るとは……。

「まるで別人だな、シャルロット」

オルガが置しく微笑み、右手を虚空に差しのべた。間の中からツールが這い出してきて、その腕にとまる。

「わずか三日足らずで、私を倒す秘策でも見つけたか？」

「……プリューは一二〇年、魔剣とともにあった」

シャルもまた右腕を伸ばし、レザーの籠手にシングルドをとまらせた。

「その意味を、これから教えてあげる」

「それは是非とも、ご教授願おう」

両者の魔力が燃え上がり、ごう、と蒼い火柱が立った。

二人の魔剣使いが、再び舞台で相まみえる。



## Chapter 2 星に祈りを捧ぐ者



### 1

その数分前。グリゼルダがシャルを連れ、学院に到着した直後――

コロセウムに急ぐ二人の前に、雷真と夜々がもの凄い速さで駆けてきた。

「――シャル！ お師匠さま！」

「あわただしいな。夜会はどうなった？」

「大丈夫だ。あいづらが踏ん張ってくれてる」

足を止める雷真に、シャルが小さく頭を下げる。

「遅くなってごめんなさい」

「気にするな。つか、おまえ……シャル……だよな？」

「馬鹿な質問しないで。その目は節穴？」

――違う、逆だ。節穴ではないから、わかったのだ。

シャルの雰囲気は出発前とはかなり違う。しつとりとして、落ち着いている。

夜々も不思議に思ったのか、ひそひそと雷真に耳打ちした。

「シャルロットさん、何だかオトナっぽくなりましたね？」

「……ああ」

「雷真ったら、何を見惚れて……はっ！　そうでした、雷真は年上が好き……たとえ絶壁でもオトナっぽければアリなんて！」

「誰が絶壁なのよ！　泣くわよ！」

あっさり余裕を失い、シャルが怒り出す。こういうところは変わっていない。

雷真は我に返り、早口でシャルに言った。

「話したいことがあるんだが、ともかく今は会場へ急げ！　オルガは待っていてくれるが、アスラ一派と始まっちゃった。ロキも日輪も、もう限界だ！」

「——わかったわ。飛んで行くわよ、シグルド」

シャルは目を閉じ、両手を広げ、風の音に耳を澄ました。

怪訝けげんそうな雷真の眼前で、シャルの体が浮き上がる。

突風が吹き込み、風の精霊が大量に集まってくる。シャルは風の精霊を使役して、自らを鳥のように飛翔やしょうさせた。

「気をつけろよ！　オルガは強敵だ！」

「言われるまでもないわ。貴方も、気をつけてね」



シャルは軽々と林を超え、コロセウムの方へ飛び去った。

「すげえな、おい……。あれが精霊術<sup>スピリットマジック</sup>ってやつか？」

「そうだ。それより、何があった？」

グリゼルダは上空を見上げ、きらめく流星を示した。

「やけに天が騒がしい。先刻などは、駅に隕石<sup>隕石</sup>が落ちたぞ。幸い、直撃したのは駅舎ではなく、車庫だったようだが……」

雷真<sup>ライマ</sup>はグリゼルダの背後、二体の機械天使に目を留めた。

「そいつら、キンバリー先生の——魔術師協会<sup>マジック協会</sup>のものなんだよな？」

「見損なうな。貴様が何をしようと、私は貴様を売りはせん」

「なら、言えない。……あんたには世話になったしな」

呼び止める間もない。雷真は夜々<sup>ヨヨ</sup>を連れ、通りの向こうに走り去ってしまった。

（バカ弟子が……くだらん気をつかいおって！）

グリゼルダは雷真を売らない。ゆえに、グリゼルダの立場が悪くなる——そう懸念したのである。どうやら、雷真は魔術師協会と対立しているようだ。

よほどの事態に相違ない。協会に敵対してでも、手助けしてやるべきでは……？

「ゼルダ！ 何をしているー」

怒鳴られて振り向くと、キンバリーが駆けてくるところだった。

一瞬、別人かと思う。髪はほつれ、らしくないほど焦っている。

「急げ！ 教授には非常招集がかかっているぞ！」

「非常招集——戦争でもやらかすのか？」

「結界を構築し、防衛線を展開する。ついてこい！」

「結界……バリアトライアル？」

「そんなものは間に合わん！ 探知結界を張り、直接攻撃で迎撃するしかない！」

「迎撃とは、何を……？」

「いいから——」

二人の第六感が脅威の到来を告げる。キンバリーが振り向きざま、抜き撃ちで引き金を引くと、銃弾は瞬時に魔力を帯び、巨大な渦を空中に生み出した。

数百メートル先で何かと衝突、凄まじい衝撃波が生じる。

何が起こったのかを理解する前に、グリゼルダは自分の機械天使を盾に変形させ、身を護っていた。真空の刃が周囲の石畳を粉碎し、破片が樹木をなぎ倒す。

「熱圏からの攻撃魔術……メテオストライクか！ 女史よ、これはどういう——」

「見ての通り、攻撃されているのさ。つべこべ言わず、防衛線に参加しろ！」

「——わかった。こい、ディガンマ、ステイグマー——」

学院が攻撃にさらされている以上、グリゼルダには防衛する義務がある。

雷真とシャル、二人の教え子の身を案じながら、グリゼルダはキンバリーに続き、学院のストリートを走り出した。

## 2

空が赤く燃えている。

機巧都市に火の手が上がり、黒煙が立ち込めていた。

その光景を時計塔から見下ろして、エドガーは重いため息をついた。

数日前に場末のバーで聞いた、エドマンドの言葉が甦る。

「ライシンは絶対に貴方を護ろうとしますよ」

陸軍中将ライコネン同席のもと、エドマンドは饒舌に語った。

「学院からも、協会からも、ババアどもからも、貴方を護って戦うでしょう」

あれは確信——いや、信頼に満ちた言葉だった。

「仕込みが完了するまでの二、三日——このもつとも危険な時期に、もつとも安全な場所が学院とは洒落がきいてるぜ。貴方には指定通りに星を落とすし、《聖堂》を破壊していただく。そうすれば、学院の神性機巧研究は頓挫、夜会は中止、ライシンは協会に盾突いた大馬鹿者となり、復讐を遂げるには俺の後援が必要となる」

「……そうでしょうか？ 一連の破壊工作が貴方の仕業と判明すれば、学院も協会も、彼を救すのではありませんか？」

「（聖堂）を失えば、学院の後援者どもは怒り心頭だ。ラザフォードと言えど、ライシンをかばうことはできないだろう。元より学院はマグナスを抱き込んでいる。ライシンを手放したところで、予見の（子ども）候補には事欠かない」

野心を隠そうともしない、エドマンドの笑みが脳裏にこびりついている。

エドガーは奥歯を噛み、感情をおし殺して、右そでをまくった。

一見したところは生身の腕だが、内部で魔術回路が起動している。

「その腕の中に、（万物流転）<sup>（バンクトレイ）</sup> ってやつが仕込まれてるのか？」

不意に、声をかけられる。

背後——鐘楼のバルコニーに、いつの間にか雷真が立っていた。

下から跳び上がってきたらしい。数秒遅れて、彼の相棒がとなりに着地する。

もうこちらの居場所を割り出したのか。学生離れた探査能力だ。

「……仮に（万物流転）<sup>（バンクトレイ）</sup> がここにあったとしても、私一人では起動できないよ」

「何だって？ そいつで流星落下のタイミングを早めたんだろ？」

「それは魔術師がよくやる（はったり）<sup>（ハッタリ）</sup> だ。結社や英国に対応させるためのね。これは星を降らせるだけの魔術——（占星術師）<sup>（スターゲイザー）</sup> だ」

無機物を天空に生み出し、標的めがけて落下させる攻撃魔術。

「……『だけの』ってことはねえだろ。見ろよ！」

燃える街を示し、雷真は怒鳴った。

「隕石がもうちよいでかけりゃ、ここいら一番はクレーターだ！」

「突入速度は秒速十数キロ——確かに、危険な魔術ではあるね」

「あの街は模倣じゃねえんだ！ 家の中に、大勢の人間がいるんだぞ！」

「知っている」

「子どもも！ 年寄りもいるんだぞ!？」

「知っているとも」

我ながら非情な声で、エドガーは努めて冷淡に言った。

「次はここ、王立機巧学院に当てるよ」

「……そうは、させない」

「させない？ では、どうする？」

「やめさせるさ。あんたをぶつ飛ばしてな」

燃えるような視線。叩きつけるような熱気に、エドガーは思わず目を細めた。

そつとこうべを返らせて、時計塔の内部を眺める。

「この塔は、シャルとシグムントが壊してしまっただってね」

「……あいつらのせいじゃない。無理やりやらされたんだ」

「君はなぜ、娘たちを助けてくれたんだい？」

「……シヤルには何度も手を貸してもらった。入院中、アンリは世話をしてくれた。二人の婆さま——あんたのおふくろさんか——の形見が、俺の命をつないでくれた」

「それが理由だど？ 義理堅いね、日本人は」

「今度はこっちが訊くぜ。あんたはなぜ、こんなことをする？」

「君には、大切な人がいるかな？」

質問に質問で返され、雷真は困惑したようだ。エドガーは重ねて問う。

「たとえば、恋人だ。あるいは家族。親や兄弟でもいい」

「……妹がいた」

「その子を救うために、誰かを犠牲にしなければならなかったら、どうする？」

「どっちも助ける」

「子どもの理屈だね」

「よく言われる」

笑ってしまう。だが、失笑と言うには、あまりに心地のいい笑이었다。

「正直、君を好ましく思うよ。……けどね、世界大戦が起きれば、君が考えているよりも、はるかに多くの人が死ぬんだ」

エドガーは顔を上げ、またたく無数の星々を眺めた。

「人類がいまだ経験したことのない、大規模な総力戦となるだろう。かの英仏百年戦争でさえ、実態は散発的な小競り合いの繰り返しに過ぎなかった。でも、世界大戦は違うよ。近代兵器は戦線を無制限に拡大し、高度に組織化された軍隊は大量殺戮に走る。死ぬのは何も軍人ばかりじゃない。一般市民が戦場に駆り立てられ、国民皆兵とも呼びたくなるような、そんな時代がくる」

悲観論と笑われるだろうか？　だが、エドガーは確信をもって言葉を続ける。

「これから起きようとしているのは、そういう戦争なんだ。……親として、私は娘たちにそんな世紀を体験させたくはない」

「……だから？」

「始まる前に勝者が決まっていれば、戦争は小規模で終わるだろう。私はこの学院を破壊して、《薔薇の師団》に神性機巧をもたらす」

ふつ、と雷真が笑った。

「やつばシャルの親父さんだけあるな。嘘をつくのが下手くそだ」

「それは……どういう意味だい？」

「あんたが連中の言いなりなのは、あんたの意志じゃないって言ったんだ」

雷真のとなりで、夜々が控えめに問いかける。

「雷真……つまり、どういうことですか？」

「親父さんが自分で言ったろ。愛する者を護るには犠牲が必要——シャルやアンリ、奥方さまを人質に取られてんだよ。シャルがアンリをかばってたのと同じだ」

「……そこまでわかっていながら、なぜ君は退いてくれない？」

無意識に語気が荒くなる。

「殿下は私の妻子を救ってくださるとおっしゃった。世界大戦の小規模化にも心を砕いてくださると。殿下の思惑通りに事が進めば——」

「あいつのやり方で世界が救えるかよ！ 列強が好き放題やるか、あいつの帝国ができるかの違いだろ。あいつを頼るくらいなら、なぜ魔術師協会の庇護を求めない？」

「求めたさ！ 私は既に一度、協会に妻子の身柄を預けた！」

「——」

「……わかるだろう？ 結社の力は協会の防衛力を上回る。もう、こうするほかないんだ。君が娘の友人なら、あの子たちのために退いてくれ！」

苦渋のにじむ顔で、だが驚くほど明瞭に、雷真は言った。

「断る。悪いが、俺はあんたほどのものわかりがよくないんでね」

「気に入らないというだけで、娘たちを危険にさらすのか？」

「あんたのやり方で、あの二人が守れたか？」



「

「この半年でシャルが何度死にかけたと思ってる！ アンリは自分で死ぬところだったんだぞ!? あいつらがどんな気持ちで、あんたを待ってたか……」

雷真の瞳から怒気が消え、凪いだように静かになった。

「娘の気持ちも知らないバカ親父に、もうひとつだけ言わせろ。あんたがどんなに大事にしても、生き物ってのはいつか必ず死ぬんだよ」

——シグムントのことを言っているのか？

「死ぬときは死ぬ。病気とか、事故とか、神さまだか何だかの気まぐれで、俺たちは簡単に死ぬ。だったら、せめて死ぬ瞬間まで、てめえの手で大事にしろ！」

投げつけるように放たれた言葉が、エドガーの胸を揺さぶった。

そうだ……。私は一体、家族のために何ができた？

この王立機巧学院で、娘の窮地を救ってくれたのは雷真だ。

私は側にいることさえできなかった。支えてやることさえ……。

（だが、それでも——若者の若さに、ほだされるわけにはいかない）

密かに魔力を高めながら、時間稼ぎの意味も込めて、エドガーは語り出した。

「……結社にね、それは仲のいい男女がいた」

雷真は怪訝そうにしたが、黙って続きを待つ。

「娘たちと同じ年頃の男女だよ。二人は愛し合っていたが——結社の幹部、白薔薇さまのご子息、金薔薇さまのご息女だった」

「……それが、何だ？ 何の話だ？」

質問を無視して、エドガーは続ける。

「薔薇の方々は独立していなければならぬんだ。二家が同盟を結べば、組織内の均衡が崩れる。二人の若者は引き離され、記憶を除去された」

「記憶を……除去、だって？」

「魔術で脳の一部を焼きつぶしたんだ。関連するシナプスだけね。万が一にも記憶が復元しないよう、毎年一度、同じ手術をするらしい」

「……正気じゃねえ」

「二人は互いの存在を忘れた。二度とお互いの愛を確かめることはできない」

夜々が両手で口を覆う。エドガーは訴えかけるように雷真を見た。

「結社というのは、そういう組織——そういう世界なんだ。一度でも薔薇のつるにからみつかれた者は、もう逃れられない。もがくたびに棘が食い込んでいく」

「つるなんぞ、焼き切ればいい」

「シャルやアンリが、そんな目に遭うかも知れないと言ってるんだよ」

「魔術師協会はバカの集まりじゃない。それに、キンバリー先生はアテにできるぜ」

「……もう一度、託せというのか？　だが、妻はどうなる！　私の妻は？」

「救い出せばいい。あんたには知識も、技量も、その物騒な魔術回路だってある。戦って勝てないなら、取り引きしたっていいだろ」

「簡単に言うな！　私一人の力で蕃薇の方々には何ができると——」

「一人でやれなんて言つてない！」

「——!?」

「ああしろこうしろ、偉そうに説教垂れて、見てるだけなら本当の屑だ。あんたがその気になったなら、俺も手伝う。シャルとアンリは……友達なんだ」

照れくさそうに、その単語を口にする。彼のとなりで、夜々がくすつと笑った。

「雷真つたら、また余計なことに首を突っ込んで」

「仕方ねーだろ。性分だ」

エドガーはもう、言葉もなかった。

（今の言いざまは、まるで……）

かつてシグムントに聞かされた、エレイン・ブリューの言葉と同じだ。

何という若者だ。この若さで、信念を曲げない。あるいは、その若さゆえか。

かつては自分もこうだった気がする。

シグムントとともに欧州を遍歴し、魔術師の高みを目指していた頃は。

覚悟が揺らぐ。……いや、それはもともと、覚悟などという大層なものではなかったのだ。ただのあきらめ。戦わない自分を肯定するための、言い訳にすぎない。

この若者とならば、あるいは――

「盛り上がってるところをすまないが」

ぞくつ、と冷たい殺気がエドガーの背筋に当たった。

「そういう話なら、ぜひ俺も交せてくれ」

にわかには信じられないような速度で、誰かがバルコニーに上がってきた。黒い甲冑に身を包んだ男子学生――〈下から一番目〉ヴェイロンだ。

到来を予期していたのか、雷真は軽口を叩くように言った。

「おまえも忙しいな。夜会はどうした？」

「状況が変わったんだ。あつちはオルガがやる。そして、俺は自分の仕事をやる」

「仕事？ 親父さんをぶつ殺すってか？」

「……俺の任務は魔術回路の回収だった」

やはり結社の者か。エドガーはヴェイロンの人相、まとっている自動人形から、指揮官を推測した。紅薔薇さま……いや、黄薔薇さま……？

「面倒くせえが――こうなっちまった以上、殺してでも星の雨を止めてやる。俺は夜会を終わらせるわけにはいかねえんだ」

「そこは俺も賛成だ。が、親父さんは殺させねえよ」

両者の視線が激突する。やがて、ふっ、とヴェイロンが頬をゆるめた。

「やっぱてめえは気に入らねえ」

「そう言うな。おちこぼれ同士、仲良くやろうぜ」

「一緒にするな」

ヴェイロンは残像すら残さず、一瞬で雷真の間合いに入り、こぶしを叩き込んだ。

金剛力で受け止める。雷真の身体は衝撃に耐えたが、時計塔が耐え切れない。雷真の足が床を踏み抜き、鐘楼はビスケットのようにたやすく崩れ落ちた。

## 3

「こちらだ、ゼルダー」

キンバリーの案内で、グリゼルダは臨時の作戦本部に到着した。

コロセウム近くのストリートに設置されている。テントやらベンチやらを並べただけの粗末な本部だが、居並ぶ顔ぶれがみすばらしい印象をかき消していた。

教授と教官。七隊からなる警備隊。いずれ劣らぬ魔術の熟練者だ。

そして一同の前に立つ男こそ、学院長エドワード・ラザフォード。

「諸君、状況は既に聞き及んでいることだろう」

最低限の落ち着きを保ちつつ、早口で説明する。

「これは困難だ。我らは一致団結して、この危機を乗り切らねばならん。現時刻をもつて学院生の自動人形使用制限を解除。一回生、二回生は市街地を防衛——引率は担任教授に任せる。三、四回生は所属研究室単位で動き、コロセウム周辺を防衛する。予測される敵の戦術目標はここ、王立機巧学院だ」

「それは僥倖。移動の手間がかからん」

バーシヴァル教授総代が茶化す。学院長は口ひげを持ち上げ、

「その通りだ。何よりもまず、コロセウム周辺の警戒を厳にせよ」

「質問許可を願います。夜会の進行はどのように？ 即時停止としますか？」

警備主幹がたずねる。学院長はかぶりを振った。

「止めなくていい。むしろ、観客に気取られたくない。迎撃に際しては、可能な限り静粛に頼む。舞台の戦闘音と誤認される程度にな」

「……難しい話ですね」

「諸君らであれば、そうでもないさ。魔術師協会の支援もある。彼らと合流できた隊は、彼らに防衛を任せ、より手薄な場所へ動け——バーシヴァル」

呼びかける。バーシヴァルが杖を突き、一歩前に出た。

「医学部は市街中心部、負傷者の手当てと収容を最優先に頼む。……ああ、治療費のことは心配無用だ。あとで市長にたかるとしよう」

「了解した。高価な薬を惜しみなく使わせてもらうよ」

「史学部長エッフェルの観測では、高度数万キロに流星塵の大集団が迫っているそうだ。その数、ざっと五千。五、六分でお着きになるぞ。諸君、ここからは——」

息を吸い、溜め、大音声で命じる。

「ただの一発も、着弾を許すな——」

「応——」

爆音のような返事が響き渡る。散開の合図と同時に、各人が整然と散って行つた。

グリゼルダの胸を不思議な感動が支配した。

学院長も、教授陣も、腹の底では何を考えているのかわからない。敵とも味方とも知れない連中だ。この流星迎撃にしても、市民の人氣が欲しいだけかもしれないし、英国政府に恩を売りたいだけかもしれない。

だが、学院と市民を護る——その一点で、彼らの意志は一致している。

（こうして手を携えるのも人間、戦争を引き起こすのも人間か……くそ——）

「……妙だな」

ふと、キンバリーが怪訝そうにつぶやいた。銀縁眼鏡のレンズ越しに、難しい顔で天を

にらんでいる。学院長が目ざとく気付き、こちらに近付いてきた。

「どうした、キンバリー教授。何が気になる？」

「流星群の位置がどうにも……これでは、遠方に流れすぎるように思います。機巧都市を直撃するものが、あまりに少ない」

「……ふむ。誰かが妨害しているのかな？」

流星は長く尾をひいて、南東の空に消えて行く。

その美しい光に、グリゼルダは不気味な胸騒ぎを覚えた。

## 4

やはり、ヴェイロンの一撃は重かった。

時計塔と平行に、はるか下の大地へ叩き落とされる。

夜々が時計塔の外壁を駆け降りてきて、空中の雷真をつかまえた。時計塔に腕を突き入れ、外壁を砕いて強制的に減速する。

「――上手いぞ夜々！ 助かった！」

「夜々は雷真の妻ですから！」

「相棒な！ くるぞ！」



左右にわかれる。その真ん中にヴェイロンが降ってきた。

着地の際を見逃さず、こちらから攻撃を仕掛ける。

「光焰絶衝——（月影紅蓮）——」

夜々はつむじ風のように回転し、空気が白熱するほどの蹴りを放った。

——やはり手ごたえがない。鎧が少し欠けたものの、致命傷にはほど遠かった。

姿勢を崩す夜々に向け、ヴェイロンがこぶしを繰り出した。

ひたいに直撃。夜々は吹っ飛び、遠くの樹をなぎ倒した。

「夜々——」

気を取られた一瞬に、ヴェイロンがこちらに突っ込んでくる。

雷真はとつさに金剛力を起動し、相手の攻撃をすり抜けざま、用意のものをヴェイロン

の首に引っかけた。

腕に猛烈な加重がかかる。握りしめた鋼線が張り詰め——

あっけなく切れてしまった。雷真は肩をすくめ、切れた鋼線を投げ捨てた。

「真つ二つ——ってわけにはいかねえか」

「……こざかしい野郎だ。いつの間にそんなものを」

「おかげでわかつたぜ。おまえは空間を（転移）してるわけじゃない」

鋼線に引っかけた以上、やはり普通に移動している。

「そのくせ、見た目ほど加速してるわけでもない」

甲冑かっちゅうには傷もついていない。鋼線が切れるほどの加重がかかったのに、だ。

「どうやら、おまえ——〈距離〉を操ってるらしいな？」

相手の表情を観察しながら、カマかけを兼ねて推理を開陳する。

ヴェイロンの表情に変化はなかった。しかし、否定もしない。

「距離を縮めりゃ、離れていてもこぶしが届く。逆に距離を延長すれば、こっちの攻撃を無効化できる。……手ごたえがないわけだぜ」

ヴェイロンの動きが速すぎる理由もこれだ。目的地までの距離を縮めてしまえば、軽く跳躍しただけで、はるか遠くへ移動できる。

「例の必殺技はこの応用——相手までの距離を限界まで短縮する。距離が百分の一なら、通過するこぶしの速度は百倍、衝撃は一万倍だからな。そのくせ、おまえのこぶしは壊れてない。物理法則をねじ曲げて、反作用をキャンセルできるってことか」

ヴェイロンは不愉快そうに眉まゆをひそめた。

「べらべらとうるせえな。だったら、何だってんだ？」

「もう一度、必殺技つてのを撃ってみろよ。おまえのこぶしは砕けるぜ」

「……ふん、思ったよりは利口だな。スレイブニルの急所を見抜いたか」

急所はこちらに接触する部分、こぶしの先端だ。ヴェイロンが魔術による反作用を無効

化できるとしても、こちらから当たった攻撃は、普段の威力を発揮するはず。

ヴェイロンのこめかみを、汗がひと筋、すべり落ちた。

「……おまけに、おまえは相手の魔術を妨害できるんだってな？」

「そうだよ。わかつたら、負けを認めて寮に帰れ」

「甘いぜ、〈下から二番目〉。自分だけが、相手の魔術を看破してと思ったか？」

ヴェイロンは向きを変え、雷真に側面を向けた。

「おまえの魔術は、二人同時には使えない」

「しまっ——」

左右にこぶしを繰り出す。片方は雷真を、もう片方は反対側の夜々を狙っていた。

ヴェイロンとの距離は腕のリーチの一〇倍程度。一〇倍離れた標的に到達するのだから、速度は最低でも一〇倍だ。そのくらいなら、金剛力で苦もなく止められるが……。

夜々はこぶしを受け止め、金属同士がぶつかるような音を響かせた。

しかし、雷真は弾き飛ばされ、ごろごろ転がって、時計塔に激突した。

「ら……雷真——」

夜々があわてて跳んでくる。雷真は血の塊を吐き、咳き込んだ。

「……バレるとすりゃ……範囲攻撃か、多対一戦闘で……と踏んでたんだがな」

「雷真は馬鹿です！ どうして夜々の方に金剛力を使ったんですかっ？」

「文句言うな。とっさに……そうなっちゃったただけだ」

口元をぬぐって立ち上がる。血がむせて、濁った咳が出た。

「だがまあ、俺の勝ちだよな、ヴェイロン？」

先ほどと同じ位置に、顔面蒼白のヴェイロンが立っている。

雷真を殴った方——左のこぶしがひしゃげ、五本の指がひん曲がっていた。

「……狂ってやがる。俺のこぶしを……生身で潰しやがるか」

あの一瞬に、肘を叩きつけてやった。ただし、生身ではない。グリゼルダが教えてくれたもう一つのスキル「魔力による身体強化」を使っていた。

金剛力は夜々と雷真のどちらか一方にしか適用できない——その秘密を暴かれないために、これまでもカモフラージュとして使ってきた技だ。

当然、金剛力よりはるかに弱い。雷真の肘も肉が裂け、骨が割れて、肩は脱臼している。時計塔に激突した際、肋骨を折り、内臓にダメージを受けていた。

それでも、夜々が健在である以上、こちらの方が優勢だ。

「退けよ、ヴェイロン。〈下から二番目〉が〈下から一番目〉に勝つのは道理だ」

返事の代わりに、ヴェイロンは突っ込んできた。

それは夜々が反応できている。繰り出されるこぶしを、金剛力で殴り返す。夜々は雷真もろとも弾き飛ばされたが、ヴェイロンの右手は完全に壊れた。

両手を砕かれてなお、ヴェイロンは戦意を失わず、さらに魔力を高めた。

「おい、やめろー！再起不能になるぞー！」

「くだらねえ……。退けと言われて、おまえはすんなり退くのかよー！」

ヴェイロンは左手を伸ばし、壊れた右手で〈必殺技〉の構えを取った。

魔力がどんどん高まり、ヴェイロンの姿がぼやけていく。

「こぶしが砕ける？ 死ぬ？ どうでもいいんだよ、そんなことは。俺の命があいつの助けとなるのなら——命なんざ、くれてやる！」

今になって、雷真は理解した。こいつは俺と同じだ。

信念を持つ敵。自分ではなく、誰かを救いたくて戦っている敵。

自分と同じような存在ならば、殺す以外に、止める手立てがない……？

だが、意外なところから、雷真に助けが入った。

流れ落ちた星が、ヴェイロンを襲う。

ヴェイロンはありったけの魔力で距離を延長したらしい。小指の爪ほどの隕石が空中に制止し、強烈な閃光を放ちながら、凄まじい衝撃派を生み出した。

「雷真！」

「ああー！」

金剛力で夜々を走らせる。夜々は隕石が生み出す衝撃波に逆らい、ヴェイロンを隕石の

進路上から引つ張り出した。

隕石が見かけの静止状態から解き放たれ、時計塔を直撃する。

土くれが間欠泉のごとく噴き上がり、雷真と夜々、そしてヴェイロンをのみ込んだ。

## 5

舞台上の人形使いは、既に二人だけとなっていた。

仲間たちは皆、舞台の外からシャルの戦いを見守っている。

ふと、シャルの胸にシグムントの声が甦った。

「目の当たる世界を、友と手を携えて歩け」

フェリクスに裏切られたあの夜、シグムントが言ってくれた言葉。

（できてるわ、シグムント）

今はもう私にも、私を支えてくれる友達がいるわ。

だから、負けない。

真正面にオルガを見据える。オルガは油断せず、相棒に話しかけた。

「どう見る、トール？」

「さてね。だが、魔剣の力で言えば、俺の方が有利だな」

赤い仔竜こりゆうがにたりと笑い、値踏みするようにシグルドを見た。

「あの魔剣、見てくれは同型機だが、シグムントの知性を感じねえ。赤ん坊なのか、仕様なのか——どのみち、俺とは踏んだ場数が違うぜ」

「ならば、人形使いの力量が勝敗をわけるということだ」

深く息を吸い、魔力を練る。そして――

「ラストーカノン――」

二体の仔竜が同時に光を放った。

両者のあいだで滅元素メグメントが激突し、爆風が生じる。それでも光は消えない。奔流と奔流がぶつかり合い、力比べとなった。

シヤルはあせらず、魔力を上げた。均衡が崩れ、光がオルガの方へと雪崩を打つ。

「光よ――」

オルガは光の精霊を盾にした。消滅光の影響で豊富に存在している。

「どういうことだ、トール。おまえが手抜きをしたとも思えないが」

「……どうやら、（心臓）が違うな。何か細工をしやがったか」

「二倍体のおまえが、力負けする……？」

「長期戦では分が悪い。一気に決めろ」

「——わかった」

切り替えが速い。オルガはシグルドの出力を見抜き、すぐさま戦法を変えてきた。

蜂蜜色の髪が逆立つほど魔力を燃やす。トールの体をもやのような闇が包み、そこから大きな魔が、たくましい脚が伸び、見る間に巨竜に変貌した。

魔剣の出力を上げるため、巨大化させたのだ。シャルを強敵と認めたらしい。

一方のシャルは、シグルドに何も命じなかった。

「ビ……？」

「いいのよ、シグルド。私たちには、私たちの戦い方があるわ」

「ラストージェイル！」

見上げるほどの高さから、赤い巨竜が光を放出する。吐き出された光は鉛細工のように形を変え、ゆがみのない〈格子〉となった。

見事な精霊操作。光の精霊を使役して、滅元素の経路を操作している。

光の格子は箱状に展開し、シャルとシグルドを閉じ込めようとした。

（やるわね、オルガ。——でも！）

瞬間的に魔力を高める。それだけで、光の精霊に混乱が生じた。

オルガとシャル、どちらに従えばいいのか、わからなくなっている。光の檻はたちまち



破れ、正面に穴があいてしまった。

これで射線は確保した。シャルはすかさず、

「ラストーカノン！」

手加減なしの一発を放つ。光の格子が巻きこまれ、大爆発が生じた。激しく揺さぶられるシャルを、風の精霊たちが支えてくれる。

この一撃で、トールを護る光の甲殻は、簡単に弾け飛んだ。

滅分子の奔流が流れ込む。これで決まり——いや、まだだ！

トールはうるこの表面を焼かれたくらいで、けろりとしていた。

オルガも無傷だ。真剣な表情で魔力を集中させている。濃密な妖気から察するに、一帯の精霊を集め、精霊の魔力抵抗でブロックしようだ。

オルガはもう驚きを隠そうとせず、食い入るようにシャルを見つめていた。

今初めて同じ高さで見つめ合ったような、そんな気がする。

二人はどちらからともなく微笑み、そして同時に動いた。

光と光、魔力と魔力をぶつけ合う。

精霊が荒れ狂い、爆音が轟き、閃光が観客たちの網膜を焼く。

先日の戦いが嘘のような、互角の勝負だ。激しい滅元素の応酬で、野戦のような騒音が響く。その音と光が上空の騒ぎを隠していたのは、不思議な巡り合わせだった。

息詰まる攻防が一〇分ほども続く頃、少女二人の息も上がってきた。

「……この私に汗をかかせるとはな」

オルガは濡れた髪をかき上げ、不敵な微笑みを頬に刻んだ。

「見事なものだ。正直なところ、私は君という人間をみくびっていた」

「お互いさまよ。私も三日前は、貴女をみくびっていたわ」

「私は……私の価値を証明しなくてはならない」

「私もよ」

「こんなところで、足踏みしている暇はない」

「それは奇遇ね。私もよ」

オルガの髪が吹き上がり、全身から大量の魔力があふれ出した。

……決めにくる！

「ラストファイ——」

「ラストセイバー——」

トールが光の鎖を吐き出す前に、シグルドが光の刃を放っていた。

こちらの方が一瞬速い。直撃したと思ったが、突然地面が隆起して、シグルドの射線がそれてしまう。

（土の精霊——アースクエイク!?）

直接、精霊を操ったようだ。この魔術をオルガが見せるのは初めてだ。勝負がもつれたときのために、温存しておいたのだろう。

地震が生じ、オルガに制御された精霊が、シャルの周囲に土壁を築き上げた。視界を塞がれてしまう。だが、シャルは動じない。

なぜなら、シャルには敵の位置を教えてくれる〈友達〉がいるから。

シャルがもつとも仲良くしている、双子のような精霊が――

「ラスターカノン！」

シグルドを〈強制支配〉して、ほぼ真上に攻撃させる。

光の大砲は頭上で一二〇度向きを変え、トールの前肢を貫いた。

右手を破壊され、巨竜が雄たけびをあげる。

「馬鹿な！ 湾曲というレベルではなかった！」

オルガが目をもく。驚くのも無理はない。今のは光の精霊に運ばせたのでも、風の精霊に進路を変えさせたのでもない。

続けてラスターセイバーを撃つ。それは土壁をぐるりと回り込み、トールの背後から敵に迫った。その迂回によって、ようやく観客にも仕組みがわかる。ラスターセイバーの光を、空中に浮かぶ〈鏡〉が反射し、偏向させている――

魔剣のタネは滅元素。本来は鏡で反射できるようなものではない。

だが、鏡の精霊ならば？

「飛べ、ツール！」

ツールは大きく羽ばたいて、上空へとエスケープした。

追いつがるラスターセイバーを、ツールはラスターカノンで防ぐ。空中は機動の自由度が高く、巨体でも瞬時に向きを変えられる。その上、風の精霊の手助けもある。生半可な攻撃ではとらえられない。

しかし、それすらも、シャルの計算のうちだ。

観客が一斉に息をのむ。

いつしか、シャルを取り囲むように、無数の鏡が浮いていた。

手鏡ほどの小さな鏡面が整然と並べられていく。それはシグルドが吐き出した光を次々と反射して、虚空に複雑な幾何学模様を描き出した。

あたかも古代の魔法陣。見る間に輝きを強め、膨大な火力と魔力を蓄えていく。

大量の滅元素を充填する<sup>ヒールアップ</sup>には、竜に巨体が必要となる。だが、鏡の精霊が味方となった今、竜の体内のみならず、体外で充填させることが可能なのだ。

これがシャルロット・ブリュウの魔剣闘法<sup>マジック・デュエル</sup>——

「くっ——地上に戻れ、ツール！」

危機を察知し、オルガが叫ぶ。のみならず、ありったけの魔力を放出し、上空のツール

周辺に精霊を集結させた。メテオストライクさえ受け止められそうな密度と強度だったが、シャルはかまわず、魔術の引き金を引いた。

「ラスターカノン——（マグナム・オーパス）——」

シグルドの小さなあごから、ラスターカノンの光が飛ぶ。空中の魔法陣を通過した途端、光はゆうに数千倍の直径を得た。

斜めに放たれた光の大河が、機巧都市の空を消し飛ばす。

消滅した空気が突風を呼ぶ。暴風が吹き荒れ、大気の摩擦が磁気嵐をうながし、七色に揺らめくオーロラが見えた。

その途方もない光量は、遠くロンドンからも観測できたという。

光がツールをかすめる。触れたわけでもないのに、左半身が融解した。

翼をもがれ、なす術もなく墜落する。もう巨体が維持できないのか、ツールは見える見る小さくなり、地面に落ちたときには仔竜の姿になっていた。

べしゃ、と軽い音を立てて、舞台の上に転がる。

「……わざと、外しやがったな」

けけけ、と牙をむき出して笑う。

「とどめを刺さねえのか……？ 俺は、憎いカタキだろ……？」

「刺さないわ。私は自動人形を殺さないの」

シャルは首を左右に振り、はつきりと言った。

「プリューの人間にとって自動人形は道具じゃない。家族であり、友だわ」

「……かなわねえな。腐っても……あの女の子孫か」

ちらりとオルガを振り仰ぐ。オルガはただ呆然とトールを見下ろしていた。一瞬で勝敗が決したせいも、まだ敗北の動揺から立ち直れていない。

失望気味にため息を漏らし、トールはシャルに視線を戻した。

「その気概に敬意を表して……とっておきの……プレゼントをやるよ」

「え？ プレゼント？」

「ヴァルハラから……せいぜい見物させてもらおうとするさ……。おまえたちの家族……」  
が……行き着く先をな……」

ほんの一瞬、トールの目が優しくなったような気がした。

「……あばよ、兄弟。今度は主と……上手くやれ」

言い終えると、トールは得体の知れない肉塊を吐いた。

それは、テニスボールくらいの、球形の臓器だった。

とくとくと脈打ち、魔力を放っている。心臓……だろうか？

臓器を見た途端、シグルドが羽ばたき、その前に降り立った。

あつと言う間もない。ばくつ、と肉塊をのみ込んでしまう。

「えっ、シグルド!? そんなもの食べちゃだめ! 出なさい!」  
仰天するシャルの前で、シグルドはふう、とため息をついた。

「……そんなもの、などと言ってやるな。トールは竜王の至宝をくれたのだ」  
それは聞き慣れた——淡くて深い、彼の声。

シグルドがつぶやいたのだと、理解するのに数秒かかる。

気がつけば、シグルドのボディが、やわらかな光を帯びている。

「ふむ、復元できた記憶はこれだけか。ずいぶん忘れてしまったが……とりあえず」  
シグルドはゆっくりシャルを振り返り、照れくさそうに笑った。

「君の名を覚えていてよかった。シャル」

「……ひょっとして……シグムント……なの?」

シャルの問いには答えず、仔竜(こりゆう)はトールを見下ろした。

トールはもう動かない。手足が風化するように崩れ、青白い光となって散っていく。  
ボディはたちまち消滅し、後には金属製の骨格だけが残った。

直後、わっと歓声があがった。

耳が割れそうなくらい、大きな拍手がシャルに送られる。

だが、もちろん、シャルはそれどころではない。

「せ……説明して! 貴方(あなた)は、誰(たれ)なの……?」

歓声をうるさく思いながら、顔を寄せて、仔竜の返事を待つ。

仔竜は少し考えるような——シグムントそっくりの仕草をした。

「竜王の死から一二〇年……君の一族には、もう語ってもいいだろう」

知性的な眼差しがシャルをとらえる。

「魔剣の本質は物質の存在形態を反転させ、無と有を切り替えることにある。そのままではこの世に存在することができない——ゆえに、竜王は異界ヴァルハラに魔剣を精製した。詳細は省くが、魔剣の竜はすべて、この世に映った写像なのだ」

「わ……わからないわー 貴方には実体がない……ってこと？」

「私の本体はヴァルハラにある。我々魔剣は与えられた〈器〉に魔術回路と人格を宿し、こちらの世界で活動していたのだ。だが、私の器は破壊されてしまった。私はこの世界にアクセスする手段を失い、二度と君に会えない……はずだった」

「待って！ それじゃ、さっきツールが吐いたのが——」

「その〈器〉だ。ツールが所有権を譲ってくれたので、たった今、心臓と融合した」

「そんなの……信じられない。すぐには……理解できない」

遠う。理屈が理解できないのではない。

信じていいのか、本当に喜んでいいのか、わからないのだ。

怖い。信じた瞬間、はかなく壊れてしまいそうな気がする。



シャルの心を見透かしたように、仔竜は大人びた微笑を浮かべた。

「わからずともかまわんよ。ただ、私はクローンやコビーなどではなく、君が知っているシグムントであり、シグルドだ。そこは安心してくれていい」

シャルは気を鎮めるように息を吸い、仔竜を目の高さに持ち上げた。

「私ね……努力したのよ？」

「知っている」

「貴方に認めて欲しくて……誓めて、欲しくて……っ」

「知っている。ずっと見ていたよ。幼い私を護ろうと、必死になっていた君を」

「シグムント……っ」

「シグルドと呼ぶがいい。君がくれた名だ、シャル」

慈しむように微笑み、シャルの名前を呼んでくれる。

懐かしい声で。ずっと、聞きたかった声で。

シャルの両眼に涙が盛り上がった。

だが、シャルは涙をこらえ、凜とした顔でかぶりを振った。

「それは駄目。だって、貴方は私のものじゃないもの」

仔竜を見つめ、敬虔な気持ちで言葉をつむぐ。

「だから、偉大なる竜王と、ブリューの魔術師たちに敬意を表し、私は貴方をこう呼ぶの。



——お帰りなさい、シグムント」

シグムントは目を細め、まぶしそうにシャルを見た。

「立派な娘に成長したな。君はもうブリュウの名に相応しい、一流の魔術師だ」

——もう我慢できない。

シャルはシグムントを抱きしめ、泣き笑いで否定した。

「まだまだ、これからよっ」

「うむ、異論はない。今のは少々サーピスが過ぎたようだ」

「あつさり認めないでー お昼のチキンを……牛フイレにするわよっ」

「それは願ったり叶ったりだ」

べろり、と舌なめずりをする。

シャルは仔竜こりゆうに頬ほをすり寄せた。もう離すまいと抱きしめる。大観衆の前だというのに、涙は後から後から、馬鹿ばかみたいにあふれ出て、止まる気配がない。

されるがままになりながら、仔竜は小さな前脚で、そつとシャルの髪を撫なでた。

オルガが白い手袋を脱ぎ捨て、人知れず舞台を降りていく。

舞台を包む大歓声は、いつまでも途切れることがなかった。



# Epilogue

乙女の胸で眠る竜



「……いしんー しっかりしてください雷真！」

夜々に揺さぶられ、雷真は意識を取り戻した。

あたり一面、荒野のようになっていいる。せつかく建て直した時計塔が廃墟同然だ。

「はは……呪われてんじゃねーか、この場所」

起き上がる。刺すような痛みが右肩に走り、ぶわっと脂汗が噴き出した。

すぐ近くにはヴェイロンが倒れていて、甲冑型自動人形も転がっている。

「よう、最下位野郎。生きてるか？」

「……殺せ」

雷真は靴底で砂を蹴り、ヴェイロンの顔にかけた。

「ぶほっ……やめろ実質最下位野郎！ 何しやがる、このバカがー」

「バカはてめえだ！ おまえが死んだら、『あいつ』ってのはどうなるー」

普段は眠たげな双眸を見開き、ヴェイロンは呆然と雷真を眺めた。

「俺たちは同じバカ野郎だ。バカ同士、仲良くやろうぜ」

手を差しのべる。ヴェイロンは雷真の手を見つめ、忌ま忌ましげに蹴飛ばした。

甲冑かづもぎの人形を連れ、よろめきながら、林の方へと逃げていく。

「おい待て！ その態度はあんまりじゃねーか!?」

「雷真らいしんー それどころじゃありません！」

夜々ややが雷真らいしんの左袖ひだりそでを引っ張る。引かれるまま振り向くと、引きつった顔のキンバリーが立っていた。白衣が汚れ、髪はほつれ、化粧も崩れている。

「よ……よう、先生。補講なら、明日にしてくれないか……?」

「この腐れ問題児が……どの口でそんなことを——」

「彼を叱しとらないでやってくれ。貴女あなたは私に用があるのだろうか?」

半ば倒壊した時計塔から、エドガーが念動で降りてくる。

黒マントの男たちが次々と現れ、雷真とエドガーを取り囲んでしまった。

エドガーはかまわず、雷真にほがらかな笑顔を向けた。

「ありがとう、ライシンくん。君はまるで地上の流星だね」

「あ？ 何だそりや?」

「流れ星に願いをかけると、叶かなうと言われているだろう?」

「どう考えても無理だけどな」

「それでも、願いをかけたくなるのさ」

「どういう……意味だ?」

エドガーは魔術師協會の戰士たちを見やり、両手をあげて宣言した。

「この少年に危害は加えないでくれ。私は投降する」

雷真は驚き、妨害しようとしたが、逆にエドガーに止められた。

「大丈夫、心配はいらないよ。上手く交渉してみせるさ」

片目をつむり、それから、男たちの向こうに優しい目を向ける。

そこにメイド姿のアンリがいた。投降をうながすため、連れてこられたようだ。

「すまない、アンリ。私はまた出張しなければならぬようだ」

「え？ どこに……？」

「ミレイユを取り戻しに行くよ。戻ってきたら、家族みんなで一緒に暮らそう」

「……はい！ はい、お父さま！」

父娘が抱擁する。キンバリーも黒マントたちも、それを邪魔するほど野暮ではなかった。名残惜しように父娘が離れるのを待って、エドガーに「魔封じ」の手錠をかける。

連行される前に、エドガーは雷真の耳元に唇を寄せ、ささやいた。

「ライシンくん。私を手伝ってくれるという約束だったね？」

「ああ」

「妻は私が何とかする。だから、君は娘たちをよろしく頼むよ。なに、どちらを選んでも損はさせない。二人とも自慢の娘なんだ」

「選ぶ……って何だよ？」

わけがわからない。夜々の瞳孔がたちまち開き、雷真は戦慄した。

発言の真意を確かめる前に、エドガーは黒マントたちに連れ去られてしまった。本当にこれでよかったのか。思い悩む雷真の頭を、キンバリーが小突いた。

「君は本当に、どこまでも手間のかかる生徒だな……。協会は君を悪いようにはしない。だから、もう問題を起こさないでくれ。……頼む」

「意外だぜ。あんたに『頼む』なんて言われる日がくるとはな」

「言いたくもなるさ。知っているか、（下から二番目）。私は体罰は好かないが——」

ばしっ、と力強く雷真の肩を叩く。脱臼している方の肩を。

「ときには、腹に据えかねることもある」

「っ……よく……わかった……」

「地上の流星か……ふふっ」

珍しく楽しげにキンバリーが笑う。そのとなりで、びよんと夜々が跳ねた。

「雷真！ 見てくださいー」

コロセウムを示す。そこからはるか天空へ、巨大な光が伸びていた。

赤い竜を撃ち落とし、夜空を切り裂く光の大砲。それはシャルの勝利を告げる、祝福の号砲だった。

オルガは足を引きずるようにして舞台を降りた。

言い知れぬ虚脱感が襲ってくる。ドロシーが何か言いかけたが、途中でやめた。あるいは、見限られたのか。オルガは自嘲して、入場ゲートから外へ向かった。

通路の出口まできたとき、立哨の警備員が話しかけてきた。

「やられちゃったね、オルガ」

聞き覚えのある声だ。驚いて顔を上げると、制帽の下に見知った顔があった。

「アリス——」

「見ていたよ。僕はどうにもあの姉妹が好かないものだから、君が勝ってくれるのを期待していたんだけど——君らしからぬ油断をしたかな？ それとも気負ったかい？ 金薔薇のセト家はその昔、白騎士エレインに苦渋を舐めさせられているからね」

「……今さら先祖の仇討ちもないだろう。私はただ、自由になりたかったただけだ」  
かさついた唇から、乾いた笑いが勝手に漏れる。

「何とも滑稽だな……。私は一体、何のために自由を欲していたのかな？ あれほど自分を衝き動かしていたものが何か、もう……わからないんだ」

この中途半端な覚悟が、最後の最後で勝敗をわけた気がする。

アリスはくすりと笑って、謎かけのように訊いた。



「ねえ、オルガ。君がどうして入院していたか、覚えている？ 足を痛めたわけでもないのに、しばらく車椅子に乗っていた理由は？」

「……頭の手術をしたと聞いている」

「聞いている、だって？ おかしな表現だね。じゃあ、ライシンとの婚約騒動——見合いの相手が怯んじやうのような、派手なスキャンダルが必要だった理由は？」

「……何を言っているんだ？」

「君には、大事な人がいたんじゃないのかい？」

「くだらない。私には恋愛感情など理解の外だ。そんな私に想い人など——」  
アリスの冷たい指が、そつとオルガの目元に触れた。

涙を拭われたのだと気付き、オルガは狼狽した。

「泣くほど自由になりたいなら、なればいいじゃないか」

「だが……私はもう……魔王になるチャンスを……失ったんだー」

「魔王になんかならなくても、結社を抜ければいいだろう？」

「馬鹿なことを……結社を敵に回して、生きていけるものかー」

「（十三人）最強クラスの魔術師が二人もいて、そんな泣き言を言うのかい？」

「二人……だと？」

そのとき、すいっと空を飛んで、一人の男が近付いてきた。

「アリスお嬢さま、例の男を連れて参りました」

シンか。こちらも警備の制服に身を包んでいる。抱えていた荷物——両腕から血を流す男子学生を、壊れ物でも扱うような手つきで地面に下ろした。

ふてくされた顔に見覚えがある。(トから一番目) ヴェイロンだ。

驚くオルガに、アリスがそつとささやいた。

「ライシンにやられたんだ。ヴェイロンは君と同じ、結社のメンバーだよ」

「……お婆さまも人が悪い。結社の人間がこれだけ入り込んでいるのに、学生総代の私にひと言もないとは。よほど信頼されていないと見える」

事実、信頼に足る実力はなかった。一対一でプリュー家の娘に敗れたのだ。

オルガは目元をぬぐい、平静を装って口を開いた。

「ひどい怪我だな、ヴェイロン。すぐに医務室へ連れて行ってやる」

「……俺に構うな。こんな傷、どうでもいいんだよ」

冷たく答えるヴェイロンに、アリスがいつもの調子でからんでいく。

「おや、そんな言い方はないだろう。君の可愛い仔猫ちゃんに向かつてさ」

ヴェイロンは不愉快そうに顔をしかめた。一方、オルガは唾然として、

「アリス……それはどういう意味だ？」

「君も薄情な女だね。自分の彼氏を忘れちゃったのかい？」

「な……んだって……？　そう……なのか、ヴェイロン？」

答えない。その不器用な態度に覚えがある——ような気がする。

もどかしい。そのくせ、胸が張り裂けるように苦しい。

「じれったい連中だね。この際、ヴェイロンの片想いでもいいけどさ。はっきりしていることはただひとつ、彼は君のために両手をつぶしちゃうような男だ」

「——」

「万が一にも君が敗北しないよう（暴竜）を脱落させようとした。夜会が中止にならないよう——君の夢が終わらないよう、エドガー・ブリューを止めようとした」

アリスはヴェイロンとオルガ、二人の背中をほんと叩いた。

「愛の力があれば、結社も怖くないだろうさ。やってられないよ、まったく。ただし——君たちが現実主義者で、愛の力なんてアテにならないと思うなら、学生の特権を使うんだね。ここは天下の王立機巧学院だ」

「学院長の……あんな男の庇護を求めると言うのか？」

「利用すればいいさ。君が僕を、僕が君を利用したようにね」

アリスは笑っている。冷えきっていたオルガの胸に、次第に熱が戻ってきた。

「私は……甘えてもいいのかな？」

「利用してもだろ？　構わないさ。こっちも利用させてもらうんだから」

偽悪的な言い回しで、友情を伝えてくれる。アリスだって逃亡中の身の上だ。なのに、リスクを冒して、オルガとヴェイロンに便宜をはかってくれている。

オルガはヴェイロンを見上げた。ヴェイロンはすぐさま視線をそらす。からんだ視線が懐かしい情熱となつて、オルガの体内を駆け巡つた。

——知っている。この感じを、オルガは覚えている。

「ヴェイロン。私が結社を抜けると言つたら、君はどうする？」

「どうでもいいさ。俺はどのみち——」

ヴェイロンは顔を背け、やる気を感じさせない、ぶっきらぼうな声で答えた。

「おまえについていくだけだ」

「……ありがとう」

傷ついた手に触れる。それからそつと、広い背中にひたいを当てた。

そんな二人を、アリスはむすつとした仏頂面（みづかぶつめん）で眺めていた。

シンが主の背後に立ち、控えめにささやく。

「ヴェイロンの記憶改竄（きおくかいざん）を妨害した甲斐（かい）がありました。結社の情報入手し、戦力を減じることが出来ます。十分な戦果——だというのに、ご不満そうですね？」

「他人のキュービッド役つてのは、どうしてこうストレスが溜（た）まるんだらうね？」

「その点に関しては、まったくもって同感でございます」

「気持ちが腐るよ。さつさとババに引き合わせて、潜伏先に戻ろう」

「ライシン・アカバネに会われずともよろしいので？」

「……いいさ」

アリスは入場ゲートの奥、いまだ拍手の鳴り止まないコロセウムを見やった。観衆の喝采を浴びるシャルに、日輪が抱きついていてる。

「あいつめ。僕の知らないところで、また愛人を増やしてるじゃないか」

「どちらかと言えば、お嬢さまが愛人ボジションであろうと思われます」

「OK、シン。あとでミンチにしてやるからね」

シャルのまぶしい笑顔を見ながら、いつしか、アリスも優しく微笑んでいた。

「おや、今度はご機嫌ですね。『どうにも好かない』ではなかったの？」

「……ただの嫉妬さ。健康で、父親に愛され、泣いているだけで助けてもらえた」

「今はもう、嫉妬を感じないのですか？」

「星が心を洗うつてのは本当だね。そんなもの、流星と一緒に燃え尽きちゃったよ」  
またたく星々を示す。夜空から流星は去り、静寂を取り戻していた。

「まあ、お嬢さまもびーびー泣いているだけで救われましたしね」

「……OK、シン。焼いた鉄棒をケツの穴にブツ刺してやる」

そんなことを言い合いながら、人知れず、主従はコロセウムを後にした。



同刻。英国王が住まうバッキンガム宮殿にて。

私室の窓から天をにらむ国王。その背後に突然、黒ずくめの若者が現れた。

「これはこれは陛下、ご機嫌麗しく！」

王は瞠目した。と同時に、かかる事態を理解する。

「この騒ぎ……おまえの仕業か！」

「いえいえ、ただの自然現象ですよ」

「戯れ言を……！ これほどの流星群、予見されてはおらぬ！」

窓の外を示す。ロンドンの街に火の手が上がり、煙が朱に染まっている。流星が落ちるたび、艦砲射撃を受けたような、凄まじい爆発音が轟いた。

「いやはや壮観な眺めですね。実に素晴らしい天文ショーだ！」

エドマンドは窓から外をのぞき、道化師のようににはしゃいで見せた。

「陛下には不運な出来事でしょうがね。軍も警察も大混乱、近衛すら市街防衛に出払って、王宮はもぬけの殻だ。頼みの綱の〈灰十字〉も、リヴァプールに出動中ときた」

エドマンドは背中を見ている。王は一瞬、判断に迷い――

逃走を選択した。素早く私室を飛び出し、城内を走る。

「誰ぞー 誰ぞおらぬかー ライコネンー」

誰の返事もない。城内は不気味に静まり返り、あるべき気配がない。官吏も、侍従も、兵も、料理人さえ、見当たらない。

足を速め、謁見の間に飛び込んだとき、金髪の乙女が進路を塞いだ。

侍従の誰か——ではない。

腹と背中が露出した特別な衣装を着ている。相模は際立って美しいが、どこか無機質で、感情を感じさせない。碧の瞳が銃口のように王に狙いを定めていた。

むっとする鉄のにおいが漂う。乙女の両手は赤く染まり、血をしたたらせていた。ゆっくりと近付いてくる。王は直感的に、己の死を悟った。

「愚かな……篡奪した王位で国の繁栄など……あり得ぬ！」

乙女が王の首筋にそっと触れた——その瞬間、王の首がつぶれた。

行き場を失くした血が、目から、耳から、鼻から噴き出す。

王の首は針ほどの細さにまで圧縮され、あっけなくへし折れてしまった。

「確かに国はいただきましたよ、父上」

父の遺体を蹴飛ばし、エドマンドは玉座に腰を降ろした。

「掠め取るようなやり方は俺の帝王学にはそぐわない。だが、成果は手段に優越する——それも俺の帝王学だ」

「痺れます陛下。濡れます——」



「本気でうぜえな。学院の方はどうなった？」

「うど……っ!? 赤羽雷真は健在、学院の損害も軽微です。（愚者の聖堂）破壊は失敗、オルガさまは（暴竜）に敗北したそうです」

「そりゃあいい。ババアどもは面目丸つぶれだな」

肩を揺らして笑う。それから、皮肉っぽく唇をゆがめた。

「ただし、俺もアテが外れたな。なかなかどうして、ままならないもんだ」

「まんまと玉座を奪った者の言葉とも思えんな」

冷やかな声が割り込んでくる。コツコツと硬い足音を響かせながら、若い将官が謁見の間に入ってきた。鷹の目を思わせる、鋭い双眸の持ち主だった。

「よう、我が友。魔王くん。礼を言うぜ。君の師団が何もしなかつたおかげで、俺は名実ともに国王陛下だ」

オブシダンのペンダントを指で弾く。魔力が行き渡り、秘められた魔術が発動した。

王子の姿がたちまち王のそれに変わる。変身の魔具らしい。

ライコネンは王の遺骸を見下ろし、深いため息をついた。

「……これが狙いか。初めから。伯爵を逃がし、（占星術師）を使わせたのは」

エドモンドは王の顔で、にやにや笑っているだけだ。

「俺は貴方を過小評価していたようだ。とんだ馬鹿王子だと」

「間違っちゃいない。だが、俺は世界を変える大馬鹿だ。改めて言うが、ひとつ俺の駒にならないか。『イエス』が正しい選択だぜ。なぜなら、俺が正しいから」

ライコネンは答えない。エドマンドは肩をすくめた。

「フー」でも別に恨みはしないぜ。俺は君が好きなんだ。何なら、結社のババアどもに俺を売って、出世の材料にしてくれてもいい」

「……それは下品な行為だ」

ライコネンはエドマンドをじっと見つめ、あきらめたようにつぶやいた。

「試してみるのも一興か。貴方の運を」

「そいつは上等——いや、極上の答えだ」

上機嫌で手を叩く。それから、エドマンドは乙女型自動人形を見下ろした。

「おまえにもたつぷり働いてもらうぜ、七號」

「はい、陛下——もちろんたつぷりサービスしますー」

「その恋する乙女みたいな目をやめろ。うぜえ」

「うざ……っ!?」

その夜、雷真とシャルは医務室で一夜を明かすことになった。

フレイは既に退院し、六連は上の病棟に回された。シャルは目立った外傷こそなかった

ものの、最後の特技があまりにも強大すぎたため、肉体の負担を考えて、医師の管理下に置かれることになったのだ。明日にも精密検査が行われる。

「シグムント、起きてる？ 起きてるわよね？」

カーテン越しにシャルのささやき声が聞こえた。

普段の彼女なら、雷真と同室なんてひと悶着あるところだが、今夜ばかりはそれどころではないらしい。シグムント、シグムントと、そればかりだ。

シグムントも困った様子で、諭すように言った。

「シャルよ、もう休め。君は魔力切れだ」

「あのね、私ね、もう魔王を目指すのはやめるー」

いきなりの宣言に、雷真も、ベッドサイドの夜々も、耳をそばだててしまう。

「ライシンとも、ロキとも、戦わない」

「……だが、君は家族を取り戻し、ブリュー家を復興させるために」

「いいの。私ね、魔王にでもならなければ、もう誰もブリュー家なんて認めてくれないと思ってた。でも、それは間違いだったわ」

ふふっ、と嬉しそうに笑う。

「さっきの拍手を聞いたでしょう？ ブリュー家の復興なんて、魔王じゃなくても叶えられる。だって私にはもう、私を認めてくれる友達がいるんだもの」

誇らしげに弾んだ声。シグムントにだけ言ったつもりだろうが、雷真にも夜々にも聞こえてしまっている。雷真と夜々は互いに顔を見合わせ、微笑んだ。

「お郎を取り戻して、家族をみんな取り戻せても、貴方を失ってしまったら意味がない。そのことが、やっとわかったの」

「……そうか。君の気持ちはわかった。だから、今夜はもう休んでくれ」

「眠るのが怖いのに！ だって、これが全部夢だったらって思うと……たまらなく怖い。目が覚めたら、また、貴方がいないんじゃないかって……」

「命は有限だ。形あるものはいづか壊れる。だがまあ、明日の朝までは無事だ」

「……本当？」

「本当だ」

「本当に本当？」

「寝たまえ。私も休みたい」

「……わかったわ」

となりのベッドが静かになる。

しばらくして、シグムントの控えめな声が聞こえてきた。

「シャルよ。そうしがみつかれては、私が休めないのだが……」

シャルは返事をしない。聞こえないふりをして、シグムントを抱きしめている。

やがて、どれくらいの間が経つたのか。

二人の寝息が聞こえてくる頃、夜々はそつと雷真の枕元でささやいた。

「起きてますか、雷真？」

闇の中、雷真がうなずく。夜々は声を潜めて、

「シグムントがあんなことになって……すごく悲しかったんです。でも……それ以上に、うらやましいと思いました」

「……うらやましい？」

「私たちは自動人形、戦いで壊れるのは当然です。その死に際に、あんなふうに悼まれて、惜しんでもらえることが、すごくうらやましいと思いました」

夜々は深く息を吸い、思い切ったはずねた。

「いつか夜々が死んでしまったら……あんなふうに悼んでくれますか？」

雷真は答えなかった。

五秒、一〇秒。不審に思つて顔を近付けると、雷真は小さな寝息を立てている。

夜々は怒った。おし殺した声で騒ぐ。

「も……雷真は馬鹿です！ 馬の骨ですーっ！」

それから、少しほっとした。

言つてしまわなくてよかった。雷真にはまだ、知られたくない。

「……そんな無防備な寝顔してると、ベッドに潜り込んじやいますよ？」

雷真の枕に自分も頭をのせる。そんな程度のことだが、すごく嬉しい。

えへへ、と笑いながら、雷真の頬をつついた瞬間――

「――っ」

痛みが走り、あわてて手を引く。指先から何かが滴り、床ではねた。

床を汚した斑点は、夜々の血だった。

指が切れている。何もしていないのに、ひとりでに肉のつながりが断たれ、裂傷が生じていた。夜々はあわてて呼吸を整え、自分の魔力で傷を修復する。

窓から差し込む月光のもと、荒い息をつきながら、そっと微笑む。

「夜々はきっとお役に立ちます。あんなふうには、悼んでもらえなくても」

今宵、少年たちは幸せな眠りにつく。

だが、若き魔術師たちの闘争は終わらない。

明日もまた、夜会の幕は上がる――



## あとがき

こんにちは、海冬レイジです。

うわーん、大好きー！ 大好きだよ、シグムントーっ！

というわけで、前回の思わせぶり発言の通り、シャルとシグムントにフォーカスしたお話となりました。雷真にとつても、シャルにとつても、仲間たちにとつても、これまでで一番つらい戦いになったのではないかと思います……。

エンディングはかなり悩みましたが、結果的にああいう形になりました。シャルは案外強い子でしたけど、作者が予想通り弱い子だったからー。つまり普段の海冬レイジ節です。あらすじで怯おそまれた方も、どうぞ安心してお買い上げくださいねー

あと今回、初心に帰りまして、ガッツリ削ってコンパクトに仕上げました。これ以上は無理……というところからさらに絞ってシェイプアップー。ボクサーばりの自制心で減量に臨みましたが、その甲斐かいあつて、いい感じに濃縮還元できたのではないかと思います。やっぱり、このくらいの尺が機巧少女マシンドールにはマツチしますね。

さて、夜会も強敵が次々と立ちほだかり、かなーり盛り上がってまいりました。雷真も



あと一点——あの要素さえクリアできれば、マグナスといい勝負ができるかも……野望系男子の王子様や学院長が変な横槍よこやりを入れてこなければ、ですけど。

そんなこんなで、この先もぜひぜひ、お付き合いいただければ幸いです！

今回も、たくさんの方にお力添えをいただきました！

小説を書くのは一人でも可能ですが、面白い本を作るとなるとまったく別の話でして、さらに面白いコンテンツともなると作家個人にはお手上げです。ビジュアルで世界を広げてくださる絵師えしるろおさんやデザイナーさん、ハード&キュートにストーリーを補完してくださる高城たかしろさんのコミックチーム、その舵かじを取ってくださる担当さんたち、完成品を世に出してくださる出版・流通の方々、店頭に並べてくださる書店員さま——皆さまのお力で機巧少女ワレンジャーは成立しております。

そしてそして、本書を手にくださった貴方あなたに最大の感謝を。

コンテンツを一緒に盛り上げてくださる貴方の存在がなければ、たとえ傑作ができたとしても、本書には存在意義がありません。いつもありがとうございます！

ではまた次回、機巧少女10でお会いできますように！

2012年7月

海冬レイジ

こんにちは。絵の人です。

スコードロンさん達が  
描きたい病なのに  
シャル描いちゃった。  
次巻こそっっ



MF文庫J



# マシンドール 機巧少女は傷つかない9 Facing "Star Gazer"

|       |  |
|-------|--|
| 発行    | 2012年9月30日 初版第一刷発行                         |
| 著者    | 海冬レイジ                                      |
| 発行人   | 三坂泰二                                       |
| 発行所   | 株式会社 メディアファクトリー<br>〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 |
| 印刷・製本 | 株式会社廣済堂                                    |

©2012 Reiji Kato  
Printed in Japan ISBN 978-4-8401-4829-7 C0193

※本書の内容を無断で複製・転写・放送・データ配信などすることは、固くお断りいたします。

※定価はカバーに表示しております。

※乱丁本・落丁本はお取替いたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。

※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。  
メディアファクトリー カスタマーサポートセンター

電話:0570-002-001

受付時間:10:00～18:00(土日、祝日除く)

## 【ファンレター、作品のご感想をお待ちしています】

おて先:〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト  
株式会社メディアファクトリーMF文庫J編集部宛付  
「海冬レイジ先生」係 「るるお先生」係

★スマートフォンにも対応しております(一部対応していない機種もございます)。

★お読みいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料権利を受けをプレゼント!

★サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時にかかる通信費はご負担ください。

★中学生以下の方は、保護者の方の了承を得てから閲覧してください。

「海冬レイジ先生宛のファンレター」  
「るるお先生宛のファンレター」  
はコチラから



<http://mf.jp/mbw/>